
夏目さんと私

空野みち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏目さんと私

【Nコード】

N5126G

【作者名】

空野みち

【あらすじ】

私のご近所には昔から古本屋さんがあります。その店主の夏目さんは、蜂蜜色の髪に青灰色の瞳をした綺麗な男性で、全体的に日本人には見えないくせに何故か甚平なぞ着た変人です。何処かつかめない夏目さんと私、葵の不思議なお話

1話：金木犀と白百合

幾度となく流れゆく涙はまるで命の欠片のように、熱く頬を伝った。

ああ…行ってしまうのだ。私を残して行ってしまうのだ。

離れてゆく背中が雪の彼方に消えてゆく。悲しいくらい背景と溶け合って。

その背中はいつにも増して悲しかった。触れれば切れんばかりに。

出来得ることなら直ぐにでも走ってその背中に触れたい。たとえその鋭さにこの身を傷つけようとも。

あふれるような金木犀の香が鼻孔を攪る。

この季節はいつもの景色を違う物のようになってしまう。

いつも通っている帰り道なのに、このまま違う世界に迷い込んでしまいそうだ。

「おや、葵ちゃん？」

後方からの呼びかけに、ふと足を止めた。

振り返ると、蜂蜜色の髪に青灰色の瞳をした綺麗な顔。

全体的に日本人には見えないくせに何故か甚平なぞ着たひよる長い男が手に紙袋を抱えて歩いて来た。

「あ…夏目さんではないですか。珍しいですね、外で会うなんて」

その男、夏目さんは私の近所の古本屋さんの店主である。

本当にサビレタ……いや趣のある古本屋さんで、私が生まれる前からそこに存在していたらしい。

夏目さんは昔から夏目さんで、私が初めて彼と会ったのは10年も前のことだというのに全く変わらないという謎多き人だ。

「今帰り？」

「はい、今帰りです。夏目さんはまた本ですか」

並んで歩きながら、ちょうど目線の先にある紙袋を指して言った。

夏目さんは無類の本好きで、自分で購入した本を一度だけ読んだぐ自分の店の売り物にしてしまう。

なんでも、一度読んだ内容は憶えておけるらしい。

夏目さんのお店の何百札とある本のがほとんどが夏目さん自ら購入した本で、古本というより「夏目コレクションズ」だ。

たまに珍しい本は他人から買い取るようだが。

自分が読む本は新品が好らしく、しかし読んでしまえばその内容は覚えてられるので売ってしまおうということらしい。

その本の値段は夏目さんの価値基準で決められるが、基本的に安価に売られている。

はたして、この男がどうやって生計を立てているのか謎だ。

「そう。秋はいつもに増して本が読みたくなってね」

「夏目さんは年中読書の秋じゃないですか。それにしても、むせかえる様な香りですね」

この住宅街の垣根には金木犀が多く使われている。
微かに香るなら良いが、こつもきついとトイレの芳香剤の匂いに思
えてならない。

「金木犀…謙遜する少女は彼の言葉が真実であると気づかない。し
かし金木犀の香りに二人は陶醉した。そう…これが初恋であるのか
と…！」

「なんですか？それ…」

夏目さんは変人だ。いきなり脈絡もなく可笑しなことを言っても驚
いてはいけない。

謎多き人、で言いくるめられる範疇を超している。まともに引いた
ら負けだ。

「謙遜、真実、陶醉、初恋。金木犀の花ことばだよ。俯く三つ編み
の少女の頬は赤く、学生服の少年は彼女の愛らしさに立ち尽くす。
ほうら、見えてこない？金木犀の木の陰に寄り添う二人が」

夏目さんがうつとりとした表情で熱弁してくる。

とんだ妄想家だ。金木犀の香りだけでこんな妄想が膨らむ人がある
なんて…。

確かに言われると、小梅ちゃんのような女の子と黒学ランの男の子
の、いつの時代だ！！て2人が瞼の裏をちらちらするけど。

「花ことばなんて、乙女ですね夏目さん」

「おや、葵ちゃんは興味ないのかい？」

「ええ。あまり必要性を感じないので」

今時どこに、花言葉の話題で盛り上がる女子高生がいるだろうか。乙女過ぎだ。

夏目さんはおや？と片眉を器用に上げる。

そんな表情でも様になるほど格好いい。変人なのを考えなければ…。

「それは是非に学ぶべきだねえ」

「なぜです？」

「男は時として花に思いを委ねるからさ」

「まず、花など送られません」

花に思いを馳せるとかいつの時代のお貴族様だよ。花を贈る時点で十分に気障だが。

私には全くもって関係性のないことだ。

「おや、葵ちゃんほどの愛らしい女性に花の一つも贈れないとは、最近の男児は恥ずかしがり屋さんらしい」

もう、どこから突っ込めばいいのかわからない。いつそスルーしよう。

「そういう夏目さんは女性に花を贈った経験はあるのですか？」

この男なら一度くらいは確実にありそうだが。一応聞いてみる。

「毎年ね。カサブランカを」

ゆるりと愛おしげに青灰色の不思議な眼を細めて微笑んだ夏目さんを見て、少しだけ聞いたことを後悔した。
昔から知っているご近所さんの夏目さん。
綺麗で不思議な彼に花を贈るような特別な女性がいたことを少しも知らなかった。

とうに忘れた初恋の痛みが金木犀の香りと共に、少しだけ胸を燻った。

2話

何時の間にか良く見知った、自分の家の前まで来ていた。何処にでもある様な日本家屋。その家を囲う垣根はやはり金木犀だった。

「ではね」

夏目さんは私に別れを告げる。夏目さんのお店はもう少し行った先にある。

きつとすぐに帰って購入した本を読みたいに違いない。その足取りは、先ほどよりも早い。

いや、ただ単に先ほど自分に合わせてゆったりと歩いていただけで、普段の彼の歩調にすぎないのかもしれない。

藍色の甚平が遠くなってしまうことが無性に悲しくなった。

「夏目さん」

考える暇なく呼び止めてしまう。ん？とゆっくりと振り返った彼に目を細める。

「後で、夏目さんのお店に伺っていいですか？」

夏目さんは、不思議な人だ。とても長い付き合いなのに未だに彼のことは掴めないでいる。

昔から私は事ある毎にお店に入り浸っている。

そう、二日と続いて行かなかったことはないほどに。

今日は行く予定でもなかったけれど、「ではね」とそっけなく去っていく彼がとても齒がゆかった。

「今日は来る？」とも聞いてくれずに。

「もちろん。待っているよ」

何時ものようにゆるりと微笑む彼の笑顔。

それだけでなぜだかホッとしてしまうのも今日に限ったことじゃない。

しばらく夏目さんの後姿を眺めた後、古めかしい引き戸を引いて我が家に入る。

今時こんな引き戸も珍しい。

「葵、今日は早いな」

声の方を見ると、学生服姿にお洒落メガネな我御兄弟の秀がいた。なかなかの二枚目のはずなのに、掛けられたヒヨコのエプロンが彼を残念にしている。

「うん。兄さんも早いね。もうご飯作ってるの？」

「ああ、今日は豚の角煮にしようと思って今下茹でをな」
我が家では、なぜか兄が晩御飯を作る。

両親共働きとはいえ誰かが強制したわけではなく、物心ついたところには彼は晩飯の神となっていた。

「それは夕食が楽しみだね」

「ああ、まだしばらくかかるかな」
部屋に移動しながら兄を振り返る。

「丁度よかった。今から夏目さんのところへ行こうと思ってたんだ。

夕食までには帰るね」

予想はしていたけど、兄は苦虫を噛みつぶしたような顔をした。昔から、私が夏目さんに懐くのを彼は快く思っていない。

それは、兄のジェラシーとかではなく、何というか夏目さん自身が駄目らしい。

嫌いではなく、“駄目”なのだそうだ。

「また、あの妖怪のところか。よくあんな気味の悪い所に自ら行くな」

兄は昔から、夏目さんを恐れているようで、決して一緒に古本屋に行こうとはしない。

今や妖怪呼ばわりだ。何かトラウマでもあるのか。

両手で自身の腕を擦りながら珍獣でも見るような眼を私に向けてきた。

「失礼な！かなり変人で常人とは言いがたくても、妖怪は酷い」

「葵も相当失礼だな…」

何を言う！と息巻く私に、台所に戻りかけていた兄は、「ああ」と言って振り返った。

「妖怪のところに行くなら、干し柿持って行け、窓に干してあるのが丁度出来ているから」

干し柿作りまで完璧にこなす兄は、夏目さんを不気味がっても、私に会うなと強要したりはしない。

寧ろ手土産まで持たせてくれる心づかい。

「わかった。ありがとう」

「ああ、夕食までには帰ってこいよ」

ポスリと頭をなでる大きな手。私はこの兄が割と嫌いじゃない。

パーカーとジーンズという軽装に着替えて、渡された干し柿を紐に吊るされた状態のまま手に持って夏目さんの古本屋を訪れた。

こちらにも、我が家に負けず劣らずなボロ…もとい古き良き感じの引き戸で、ガラガラと開けるとふわりと本の匂いが立ち込める。

目に入るのはずり並んだ本棚。

この濃い木目調の本棚に整然と並んだ本たちはいったい何冊あるんだと言いたくなる。

「夏目さん、こんにちは」

本棚の森を奥へ奥へ進むと、同じ木目調の机と椅子があつて、そこが夏目さんの指定席となつている。

今日もいつもと変わらずそこで本を読んでいたようだ。

「いらつしゃい。葵ちゃん」

「はい干し柿です」

「秀君の干し柿だね。いつもありがとう。」

さて、お茶を入れようかと立ち上がる彼を「私が」と制して、勝手知つたる奥の間の台所へ向かう。

毎回兄が手土産を持たしてくれるので、私が来ると自然とお茶の時間になる。

彼の読書の時間を中断させてしまふのを悪く思って、私がお茶を入れるようになって随分経つのに、

彼はいつまでたっても自分が入れようと腰を浮かすのだ。
そういうところにも、自分がただの客でしかない線引きされているように少し悲しくなる。

いや、ただの客なんだけどさ。

カチリと回したコンロに青い火がボツととつく、しばらくぼんやりそれを眺めてから、

頭を振って、お湯が沸く間、干し柿を紐から取る作業に専念した。

「どうぞ」

入れたお茶と干し柿を彼の居る場所まで持つて行く。

私は夏目さんの斜め向かいにある、少しアンティーク調の椅子に座る。

この椅子だけ少し浮いているが、ここが私の指定席。

私が頻繁に来るようになってから置かれるようになったもの。

この椅子の存在が、ちょっとだけ私が特別な存在なんだと思わせてくれる。

肘かけをそろりと撫でた。

「やはり、葵ちゃんの入れたお茶は美味しいなあ」

ほくほくした笑顔で言われると悪い気はしない。

夏目さんは、再び本に夢中になってしまい、私は、ずず…とお茶を啜った。

本をめくる音と、お茶を飲む音だけの静寂。

いつもの風景、ここに来たからと言って何をしているわけでもない。

時には本を物色したりするが、購入したことはない。

夏目さんが、ここで読んでいくといい、と言うからだ。

何にもしていないのに、此処が一番好き。

この空間だけ時間が止まっているみたい。

本の森に囲まれて、もうずっとここに居るみたい。

カラン・コロン

「夏目さん？」

「なんだい？」

「音が…聞こえます」

聞きなれない音だった。

「本当だ、お客さんかな。ああ、いらつしゃい」

振り返るとすぐ近くに赤い着物を着た奇麗な女の人が佇んでいた。吃驚した。

そうか、先ほどの音は、彼女の履く下駄の音であつたらしい。それにしても、引き戸の音には気付かなかったのが不思議だ。

「驚いたな、あなたとこちらで会えるとは」

ボタンと本を閉じて夏目さんは言った。心なしか青灰色の目が見開かれている。

「お久しぶりです。おそらく今年が最後になりますので、ご挨拶に伺いました」

「ええ、もうすぐきつと終わりますよ」

「あなたは、ちゃんと約束を守ってくださいますのね」

「違い様もない事だからね」

どこか入り込めないような空気が居心地悪い。

不眠にならない程度に女性を見る。

初めて見る女性だ。夏目さんの言葉からして客ではないらしい。

さらりと長い黒髪に赤い着物の良く映える、若い女性。

とても美しい人だけど、どこか物悲しい雰囲気が付きまっていた。

「真白のユリ、約束の証はもうありません」

縋る様な女性の熱い眼差しが、夏目さんに向けられる。

その視線を夏目さんは、言葉もなく受け止めた。

真白のユリ！

ああ、カサブランカ。この人は毎年夏目さんが花を贈る女性なのだ。
入り込めない空気。二人はおそらく…。

「あ、あの私帰りますね。」

女性が、初めて私に気づいたようにこちらを見た。

ああ、頭が、ががんとする。

夏目さんも、こちらを見たが、その瞳を見ることがなく足早に本屋を出た。

だから私は、物言いたげな夏目さんの視線に気づくことはなかった。

3話

夏目さんの特別な女性。

赤い着物の良く映えた悲しげな女性。

毎年、カサブランカを贈られる女性。

思考を振り切るように、家に帰り引き戸を後ろ手で絞めたまま、その場にしゃがみ込んでしまった。

醤油のいい香りが充満している。

どうやら豚は確実に美味しくなっているらしい。

「おお、早かったな」

相変わらず、ひよこエプロンの兄がほのぼのと出迎えてくれた。

おい、どうした？と聞いてくる兄に首を振ってのろのろと立ち上がる。

「何か、あったか？」

「ん、おなか減った」

もちろん、腹が減ってしゃがみ込んでしまったわけではないが。

何故か、自分がショックを受けていることに対してショックなのだ。理解不能だ。

「なんだ、とうとう“妖怪本性現る”かと思った。よくぞ食われる前に逃げ戻った妹」

部屋に戻りながら兄が軽口をたたく。

本性ねえ…。

「というよりも、“熱愛！！知られざる恋”かな」

ぶつと兄が噴き出したらしき音が聞こえた。
なんだ、きたないなあ…。

「ね、熱愛って。おおっお前、ついに妖怪に手え出されたのか」

ものすごい勢いで肩を揺さぶられる。

なんだ、この男。あつくるしい。今私はそれどころではないのだ。
自分のシヨックにシヨックしてだなあ…。

「違う！私とじゃなくて、白百合の君と！！」

「しらゆり？」

ぴたりと兄の手が止まる。

それを、面倒くさく振り払いながらコクリと頷いてやった。

「そう。今日、綺麗な女性が訪ねてきたの」

「客じゃなくて？」

「ただならぬ雰囲気だった」

あの女性の熱い、焦がれるような視線。あれが恋でなくて何だというのか。

それから、夏目さんは毎年カサブランカを彼女に…。

あれ、でも確か【今年が最後になる】とか【もうすぐ終わる】とか、あれはどういう意味だったのか。

もしかして別れ話？ いや、でもそんな雰囲気では…なかった。
寧ろ喜ばしい響きにさえ聞こえて。

うーん。と呻っていたら、いつの間にか兄が食卓に料理を並べ始めていた。

母と父はいつも帰りが遅いので、大抵二人で先に食べる。

急いで箸とお茶の準備に取り掛かった。

料理は任せつきりでも、これくらいは私の担当だ。

「ま、あいつもいい年した大人なんだし、そういう人がいてもおかしくはないだろうな」

相手が人間かどうかは疑わしいが…。

と、すっかり美味しそうに彩られた食卓に付きながら兄が言った。

何だか今はそれも否定することが出来ない。

夏目さんは、私がほんの小さい頃から、あのままなのだ。

蜂蜜色の髪に青灰色の瞳。初めて会った時、王子様が現れたかと思っ

った。

まあ甚平姿だったけど…。

幼い私の初恋は夏目さんだった。綺麗な指が私の頭をなでてくれて、

不思議な色の目が微笑に細まった。

あの瞬間恋に落ちた。

しかし、いつの日か気付いたのだ。

彼はきつと私とは違う次元を生きていて、決して交わることのない人だと。

子供の十年と大人の十年は違う。もちろん、彼が老けにくい人で、20代に見える30代であるのかもしれない。

もしかしたら、エイジングケアには事欠かないとか。いや想像できないけど。

でも、そんなことではなく、ただ悟った。

この人に恋心を抱いても叶わないのだと。

そういう人間らしさが、夏目さんにはない。

彼の存在は私にとって侵してはならない神域のように美しい。

だから、不思議な彼を暴きたいとかそういうことはなく、ただ彼の傍にいられたらそれだけで、満たされる。

初めて見た、夏目さんの人間らしさ。

嗚呼、そうか。

だからショックなんだ。私の知る世界以外で、夏目さんの世界がちゃんと存在し回っている。

当たり前の事なのに、それが嫌なんだ。

夏目さんを人間ではないと望むのは、寧ろ私なのか。嫉妬よりもたちが悪い。

いつまでもサンタクロースを信じたい年頃でもなくせに。

「ああ、子供っぽい」

「何だ、俺のエプロンにケチつける気か」

私の独白に兄が過敏に反応した。子供っぽい自覚あったのか。ヒョコ…。

「まさか。この神のごとき角煮を作る兄上にそのような暴言を吐くことがあるのか（いやない。反語）」

「そうであるか、なら良い」

急に始まる平安ごっこに付いてこられる兄は素敵だ。さすが、私の兄。

「いわんやオムライスをや」

ちよつと違うが、伝わるだろう。オムライスは言うまでもなく美味しいだろうな（現代語訳）だ。

つまりヨイシヨしてリクエスト。如何せん、兄の料理は和食が多い。親の好みのせいが大きいけど。たまには茶色くない食事要望！！

「あい分かった」

何処の皇帝だ。さすがだ、兄上。

4話

そつ、あの日も金木犀の花が香っていた。

6歳の私は兄が構ってくれないことにやきもきして家を飛び出した。何においても完璧主義な兄は「うるさい。まだ宿題があるんだ」と、キツパリ遊びの誘いを断ってくれた。

バーカ。お兄のガリ勉！もやし！

などと捨て台詞を残し、ぶらりと出てきたはいいが、寂れた近所に6歳児の遊び場は見つかるはずもなく。

本当は、兄がカリカリ勉強をしているのが羨ましかった。

まだ小学校に上がりたてで、文字の練習も拙い自分は、紙を前にしたってカリカリなんて書けないんだ。

兄に出来て何故自分に出来ないのか。

あの頃は、いつも兄が基準で、何時も其ればかりだった。

何で、お兄の方がお小遣い多いの！？

何で、お兄の方がご飯の量多いの！？

何で、お兄がカギ預けられるの！？

些細なことが不満だった。たった2歳の違いなのに、と。

ふらふら、歩いていたら蟻地獄を見つけて、他人の家の庭にも関わらず潜入した。

幼い子供は時として残酷であり、言わずもがな蟻を落として遊んだわけだが、陰険と言わないでもらえると嬉しい。

無邪気で残酷なのが子供なのだから。

そして、その庭が夏目さんの古本屋さんの庭だったわけで。

「おやあ」

と後方から覗きこまれてビクツとした。

蟻を貶めている時が出会いなんて今思うと最悪な第一印象だ。

「何をしているの？」

振り返ることもできず硬直した。

てつきり怒られると思ったからだ。悪い事をしている自覚はあった。

「だ、だってお兄が、遊んでくれないんだもん」

子供のだっては脈絡なく、理由にもならない。でもそんなことしか言えなかった。

「そっかあ。じゃあ僕と遊んでよ。」

まるで、子供みたいに喜々とした声だった。
恐る恐る見上げると異国の王子様みたいな人。

「お、王子様！？」

「え、僕？うーんと“夏目さん”」

「なつめさん？」

「うん。君は？」

「あおい」

「あおいちゃんか。立葵の葵だね」

「ちがうよ。“ささの あおい”だよ」

夏目さんはアハハと快活に笑うと、落ちていた木の棒をひよいと摘みあげた。

そして私の近くに屈み、地面に“葵”と書いて花の絵を描いた。真っ直ぐな幹もあるい花がたくさん。

「とっても綺麗な花だよ、白やピンクで真っ直ぐ真っ直ぐ太陽に向かって伸びるんだ。」

花の事なのに、自分を褒められてるみたいと思った。

「これ、あおい？」

「うん。ほら、書いてご覧。」

棒を差し渡されて見よう見真似の漢字で“葵”と書いた。ついでに花の絵も。

「うん。上手だ」

そうやって頭を撫でてくれて、それが面映ゆく、くすぐったかった。なんて綺麗に微笑む人だろう。

綺麗な髪。綺麗な瞳。

それから二人で色んな絵や字を書いて夏目さんは博識に色んな話をしてくれた。

あっという間に時間が過ぎた。それから慌てたように兄が探しに来て、夏目さんを見るや否や連れ去るように家へ引っ張られた。

「思えば、なんてことのない出会いだなあ。大体、兄はあの頃から、夏目さんに恐れを？」

何なのか。外見的に王子だからかなあ。甚平とのギャップ？ギャツブに恐怖？

「さつきから、ブツブツ正直不気味」

「おわつ。椎名君！」

にゅいつと現れたのは、同じクラスの椎名夜彦。

現在、放課後図書室。図書委員の彼は今日が当番らしい。

あんまり喋ったことはないが、なかなかとつき難い印象の彼。

兄様なお洒落眼鏡と違い恐らく度が入っているだろうノンフレームの眼鏡に、あまり変化のない表情。

歯に衣着せぬ言葉。何とも言えない圧力感。正直怖い。

「図書館では静かに。これ基本」

「あ、うん。ごめんね」

「花に興味が？」

私で会話終了となるかと思いきや、思いがけず私の見ていた花図鑑に食いついてきた。

おや、まさかの夏目さんのお仲間発見？

「や、えっと花ことばを……」

そう、カサブランカの花言葉を調べに来ていた。

夏目さんは、あれだけ花に関心があるのだから彼女に贈る花にもそれなりの意味があるに違いない。

それで、立葵のページを見つけてしまい、カサブランカそっちのけで思い出に浸ってしまったわけ。

「…超、おとめ」

あまりの衝撃に、ぐらつとした。

いや、確かに自分もそう思ったよ。今時花ことばなんてって。

いやそれよりも、それよりも！

椎名君が超とか使わないで欲しかった。おとめとか言わないでほしかった。

無表情鉄仮面で。

逆に怖いよ。ギャップが怖い。

嗚呼、これが、まさにギャップに恐怖！

「う、うん」

あまりの恐怖におとめを肯定してしまった。

いいえ私はさそり座の女で、決しておとめ座でもなく……。思考が力オス！

「……」
「……」

ここに来ての沈黙とか辛い。色々痛い。もういつそ立ち去ってほしい。

「あ、もうこんな時間だ。帰らないと。これ借りていい？」

しょうがなく自分が立ち去ることにした。棒読みっぷりが悲しい。

「…駄目」

え、え何で？何故に？どうして？

何か彼の気に障る様な事を私はやらかしてしまったのか。
何の拷問なんだろう、これ。

「図鑑、貸出禁止」

—さいですか…。

5話

結局、言った手前、また調べに来ると言って図書館を後にした。出来れば、もう椎名君が委員の日は避けたい。怪我したくないし、心のね。

夏目さんも大概変人だけど、椎名君も負けず劣らず…うん個性的。それから、教室に鞆を取りに戻った。

「あれ、葵。」

教室には戸川 四季子というクラスメートが一人残っていた。ブックカバーに覆われた本を窓際の席に座って読んでいたようだ。

「珍しいね、葵が放課後残ってるの」

何時もは、早く夏目さんの所に行きたくて、そそくさ帰る私。だからって、そんな珍獣発見的に驚かなくても。

「今日は図書館に行っていたの」

「何か調べもの？」

「あー…花ことば」

「…あんだ、チョーおとめ。そんな趣味あったけ？」

言わないで欲しい。いくら四季子にはぴたりとハマる言い方であったとしても。

まさに今の私にはNGワード。禁句というもの。

「花ことは調べて何が悪い！四季こそ何してるの？」

「何怒ってんの？落ち着きなよ、悪いなんて言っていないって。私は……」

若干逆切れ気味の私に引いた後、四季子は窓の外を見た。

丁度グラウンドでは野球部が片付を行っていた。

はーん。なるほど彼待ち。それで本を読みつつ教室で待っていたと。

いいねえ青春。ま、私には無縁ですよ。何てったっておとめですから。

「命短し恋せよ乙女」

「なーに急に」

若干赤くなりながら四季子が言う。

甘じょっぱい反応をありがとう。

「別にい。ねえ、それ何読んでるの？」

「あ、これ？恋愛小説。」

ぴらりとブックカバーを捲って見せてくれた表紙は、何とも言い難い煌びやかな表紙。

何というのか、ハーレクインとかそういう本だろうか。

「さすがに、この表紙で堂々と読むのは恥ずかしくって」

「四季、あなたこそ立派なおとめだ。おめでとう」

「な、さっきの仕返し？いいでしょ別に。なんていうかさ、現実ではありえない、焦がれるような恋？ドキドキするんだよね。それで泣けるのよ、このお話。公爵家のダーシーが、町娘のシルシアに恋をして、彼女にアプローチをするのだけど、彼女は身分の違いを理由に受け入れられないの。お坊ちゃんの一時の遊びだろうって。だけど彼は本気なのよ。シルシアに毎日花を贈るのよ、純白の花を。私の気持ちは変わらないという証明。私の愛の印です”って。毎日送られる花、それでも彼女は素直になれない。ある日、いつもの時間に彼は花を届けに来なかったの。彼女はやっぱりって、思いながらも悲しくなった。気付かぬ内に彼を愛していたのね。」

気持ちの証明。愛の印。純白の花。

“真白のユリ、約束の証はもう必要ありません”

不意に昨日の女性の言葉が蘇る。彼女はそう言っていた。

「二人はどうなるの？」

すっかり四季子の話を、夏目さんと白百合の女性に置き換えてしまった私は、急かすように先を促した。

「シルシアが街に出ると辺りが騒がしい。如何したのか聞いてみると馬車が横転したって。…それが…ダーシーの乗った馬車で…ッ。ダーシーは、ダーシーは、その日シルシアに花を届ける途中で」

「そっそれじゃあ、ダーシーは！」

「全部下敷き…花も彼も」

そんな…！ダーシーが。

四季子は涙声で続ける。

「あまりのことに、シルシアは愕然とするのよ。いつそのこと彼のもとに私もって。そしたら雪が降ってきて彼が彼女の前に現れるのよ。霊となった彼が。」

なんと！

「そして彼は言うの。“遅くなって申し訳ない。これが私の愛の証。純白の雪の花が降った時だけで構わない、私を思い出して欲しい。毎年雪の花を受け取って欲しい”で。彼は微笑んで彼女に背を向け消えてしまうの。彼女は雪に溶けて消えゆく背中を見ながら思うの。今すぐ追いかけて一緒に行きたい。だけど彼は言ったわ。毎年雪の花を受け取って欲しいって。つまり言外に彼女には生きていて欲しいってこと。だからシルシアは彼の背中を見つめ切なくも涙するのよ。たくさんの彼の愛という名の雪に降られながら」

ダーシーっっ！

シルシアーっっ！！

それから、四季子と抱き合いながら号泣して、迎えに来た四季子の彼にドン引きされてしまった。

そして、一人身の私は、一人寂しく帰路に着いているしだいです。

「あー、一人身の寒さが肌に沁みる」

それにしても…。途中から、夏目さんと白百合の女性で想像していたせいで変な気分だ。

何か、言いようのない不安がじわじわ心の中を侵食するような。

毎年贈られる白百合。約束の証。

まさか、夏目さんも身分差の恋で？いや夏目さんはただのしがない古本屋だし。

第一、隠れ坊ちゃんにしても今時身分差なんてことがある筈…。

…今時？そういえば夏目さんは、もう十年来外見的变化がない。よ
うな気がする。

不思議で、人間味のない夏目さんという人物。

もしかして、彼は既に…。

不吉な予感に背筋がぞわりとした。

や、やめよう。こんなこと考えるだけ無駄というもの。

第一彼には触れられるし、茶だって飲むし、干し柿だって食べていたではないか。

次第に薄暗くなっていく夜道を足早に歩くも、嫌な予感が夜闇のよ
うに侵食する。

考えるな。考えては駄目だ。

「笹野さん」

「ギャーでたー！！」

私は鞆を頭に覆いながらしゃがみ込んだ。

「なに、その、反応。普通に傷つく」

あ、この声。独特な淡白な物言い。恐る恐る見上げると思った通りの人が立っていた。

「し、椎名君！」

思わず、跳びかかる様に彼のブレザーの袖を掴んだ。
もうこのさえ鉄仮面でも何でもいい。幽霊でなければ。

「じ、じじじじ」

「鶏？」

「怖かったよ。じいな、くん」

がたぶる震えながら、彼に取りすがったら。若干腰を引かれてしまった。

そんな、邪険にしないで欲しいこんな時ぐらい…。

「家、何処」

相変わらずの淡白な口調に、少し冷静になる。

や、ヤバイ。私、鉄仮面様のブレザー握ってる。しかもオモツキリ。
これって幽霊より怖いことじゃ…。

「やあ、ごめんよ」

外国人爽やか大学生、吹き替え日本語並みの余所余所しさと不自然さでもって慌てて手を離す。

「家、どこ？」

「家？家はですね、並木茶屋通りを左に入った並木商店街の近くの団地でして、いやあ、中々古き良き店や家の建ち並ぶ…」

「そこまで、聞いてないけど」

一刀両断。流石は椎名 夜彦。何さ、そっちが聞いたんじゃない。

「……………」

「……………」

また、ですよ。この沈黙。

嗚呼、如何しろというのか、私に。

「あ、いけないコンナニ暗い。早く帰らないと。じゃあ、またね椎名君」

例にたがわず、棒読み口調が悲しいが、本当に暗くなってきているし、

こんな処で二人黙り込んだところで拉致あかない。

すちゃっと、手をあげて歩き出そうとした処で、がしりとその手を掴まれた。

「な、何か」

なんだ、また「駄目」とか言うんじゃないだろうね。勘弁してください。

私を帰してください。

「送る」

「は」

「暗いし」

其のまま、ずいずい歩きだされる。

「え、あの、腕を」

持ったままなのですが。

「掴んでいればいい、怖いなら」

「え、う、うん」

わけも分からず、頷いちゃったよ。
寧ろ掴んでいるのはあなたです。

椎名君と話すと本当調子狂うなあ。でも、もう幽霊のことなんてどこかに行ってしまったている。

それに、こうして夜道を送ってくれる彼は存外恐れるほど怖い人ではないのかもしれない。

変わらない表情も、淡泊な言葉も、それが彼なのだと認めてしまえば何のことはない。

「あ、ここ私の家」

あれから、この店の肉は100g何円だとか、なんとか間を持たせるためにどうでもいいことを話まくった。

拳句の果てに、金木犀って芳香剤の香りだよね。

そうそう知ってる？金木犀の花ことばって（以下略）

で、ほら垣根に小梅ちゃん佇んで見えてこない？と夏目さん直伝妄想話までしてしまう始末。

椎名君は淡白に返してくるから、よりサブリ。

私、かなりスベツてる。

「あの、本当ありがとうございました。わざわざ」

お礼はきちんと言うべし。

誠心誠意を心がけて頭を下げる。

「…いや、愉快だった」

椎名君は、ちよつとだけ笑った様に見えた。薄闇の下でとても曖昧だったけれど。

立ち去る彼が、もと来た道を行くので、彼の家とはきっと違う帰路だったに違いない。

うん。きっと彼はとても優しい。鉄仮面や言葉がそれを邪魔しているだけで。

「遅い」

家に入るなり兄がひよこエプロンで凄んで来た。

「ごめん。少し調べものしていて」

「今日はお前がリクエストするから、オムライスだというのに、帰って来やしない」

「ええ！本当ー？」

「ああ、あまりに遅いから、デミグラスソースも完璧に作った」

「やったー。さすが皇帝！よっ日本ー」

「何が、皇帝か。おだてても何も出ん」

とか言いながら、兄は手早くオムレツを作った。

何でも、卵はバターの風味とふわふわとろとろ感が命だそうで、食べる直前に作らないと駄目らしい。

流石は完璧主義。

しかも今日は通常の包むオムライスじゃなくて、それより卵を多めに使うリッチオムライス。

綺麗に盛られたチキンライスにポンと落として、さて至福の時。

「私、やるー！」

私の言葉に、兄は苦笑しながらナイフを渡してくれる。オムレツの真ん中に、そろり切れ目を入れて、

ゆっくりと両サイドへ流すようにチキンライスを包み込む。

やつふい。とろとろ。ついでに兄の分もやらせてもらった。

くっう。この瞬間たまらないぜ。父、母が帰ってきたら、彼らのも是非させてもらいたい。

そっこう考えているうちに兄がデミグラスソースをかけてオムライ

スは完成体となっていた。

味は勿論、最高に最上。

「卵の狂喜乱舞や」

「どちらかというとお前が狂喜乱舞しているぞ」

とくを見るがいい、美味の舞！

久しい洋食に、テンションMAXな私。

「落ち着いて食え！！」と兄の叱責が飛び交う中今日も夜が更けてゆく。

6話

幾度となく流れゆく涙はまるで命の欠片のように、熱く頬を伝った。

ああ…行ってしまうのだ。私を残して行ってしまうのだ。

離れてゆく背中が雪の彼方に消えてゆく。悲しいくらい背景と溶け合って。

その背中はいつにも増して悲しかった。触れれば切れんばかりに。出来得ることなら直ぐにでも走ってその背中に触れたい。たとえその鋭さにこの身を傷つけようとも。

こんなに愛しているのに、私は待つことしかできないのだ。

それでも、あなたが待っていてくれ、と言うならば、私はいくらでも待ちましょう。

でも、約束が欲しい。どうかお願い、約束して頂戴。

そうすれば、私は何度でも思い出せる、貴方の愛を。

そうだね。そうね、花がいい。あなたと初めて会った時のあの溢れる様な香り―

私たちの出会いの花……。

今日は雨。しとしと降る雨に金木犀の香はきつと流れて行ってしまうのだろう。

強過ぎれば邪険に思い。無くなれば悲しくなる。全く身勝手極まりない。

うーん。クッションを抱きしめながらごろごろ転がる。

「葵、休みだからってゴロゴロしてるな、“漣”^{さざなみ}行ってコーヒー豆買って来い」

「えー。雨じゃん。何もこんな日にい。自分が行けばいいでしょう」
大体、単にゴロゴロしてた訳でなくて、頭の中はフル稼働だったのに。

「俺は課題がある。晩飯の神を少しは敬え！」

いけず！何が神か！横暴！！ガリ勉！！

猫のように摘み出されて、渋々珈琲喫茶漣へと足を運ぶ。

いつも家のコーヒーは漣で購入している。

あの店のブレンドは、コーヒー嫌いの私でさえ唸らせた逸品だ。苦いだけのコーヒーではない。独特のコク、風味、まろやかさ。

何より引立ての豆の香りと言ったら。確かに買いに行きだけの価値はある。

でも、なあ。

ポツポツ鳴る傘を見上げながら嘆息する。

こんな日はいつも夏目さんのところで濃い茶を飲むのに…。

先ほど考えていた事が蘇る。

カサブランカの花言葉。“雄大な愛”“威厳”“高貴”

昨日調べ損ねたそれは、以外にも我母親が教えてくれた。意外と知っているものだ。

母親の世代がおとめ世代なのかな。

どちらにしたって、愛しい人に捧げるには事欠かない花ことば。何かが、引つかかるのだけど、何だかはつきりしなくて、もどかしい。

ピースの足りないパズルみたいだ。

漣さざなみと書いてある電光掲示板が近づく。

ここの商店街は、どこも古びれているけれど、漣の趣は好きだ。好い風に味があるというか。レトロといった感じが。

カランカラン

ドアベルを鳴らして店内に入る。すぐ立ち上る馥郁ふくいくたるコーヒーの香り。

それからジャズピアノ。店内には存在感大のグランドピアノが置かれている。

私は未だかつてあのピアノが弾かれる姿を目にしたことがない。今日の演奏者もまた、人ではなくレコードのようだ。

「いらつしえいませ」

カウンターの中の30歳中頃、男の渋み満載のマスターこと小松親分が、にこやかに出迎えてくれた。

店内は、雨のせいか人は少なく、小松親分と黒いスーツの老年紳士の客がカウンター席にいるだけであつた。

「こんにちは。小松親分」

「おお。葵ちゃん久しぶりじゃねえか。えれえ別嬪になっちまって。秀坊は如何したんでえ？」

彼の“親分”たる所以はこの“べらんめえ”口調にありそうだ。

「課題が忙しいそう。ガリ勉中です」

秀は秀才の秀だ！と豪語する兄が頭上に浮かんで、思わず手で振り払った。

ええい、うつつしいやつちゃ！

「そりゃ、秀坊らしいぜ」

カカカと親分が笑う。

ブレンドの豆を注文すると、

「まあ一杯ぐれえコーヒー飲んでけ。御馳走してやらあ」

と言われたので、お言葉に甘える。

老年の紳士に挨拶して、カウンター席に腰かけた。

「ほほ、ご近所の方かね、お譲ちゃん」

「はい、古本屋さんの近くに住んでいます」

「ほほう。夏目さんのかい？」

「彼をご存じですか？」

「私の母の実家がこの近所でねえ。わしが小さい頃は夏目さんにもお世話になった」

心臓がバクバクしていた。

だってもし彼の知る夏目さんが、今の夏目さんだったら。

それはつまり、彼が老いていない事実。

ゴクリと唾を飲み込んだ。

「不思議な色の髪と目でしたか？」

「不思議？真っ直ぐな黒髪に、意志の強そうな黒い眼の凛々しい青年だったよ」

ホツとした気持ちと、腑に落ちない気持ちが同時に襲いかかった。と言うことは、もしかしてその人は夏目さんの曾祖父にでも当たる人なのかな。

「ワシの父親は私が本当に小さい頃、戦争に出兵してね。若かったワシのの母親を良く支えてくださった。父は結局帰って来なかったが、夏目さんは大層良くしてくれて。よく花など贈っては母を慰め、元氣付けてくださった」

「花、ですか」

「ええ、白いユリをですな。カサブランカ、というのかね」

頭が真っ白になった。

今、何かが繋がった気がした。

「すいません、お母様は長い黒髪の赤い着物をよく着ていらっしやった？」

震える声で、どうにか聞いた。

「おや、なぜお譲ちゃんがそれを？そう、母は赤い着物がお気に入りです……」

なんだ、なんだ、何だ。

「失礼ですが彼女の命日って」

「今日です。わしは丁度、母の墓参りの帰りです」

！！

「はいよ。ブレンドおまち…て。どうした葵ちゃん。顔真つ青でないかい」

小松親分が心配げに聞いてくる声も耳に入らない。

「お母様のお墓の場所を教えてください！」

「並木茶屋川麓の墓地で…」

私の剣幕に押されるように老紳士は、答えた。
聞くや否や。ガタリと席を立った。

親分の「おおい、葵ちゃん？」という声に返事をする暇もない。
転がり出るように店を飛び出した。ドアベルが騒がしく響く。
傘をさしている暇なんてない。

わき目も振らず雨の中を走る。

心臓が耳にあるみたいにバクバク煩い。

『男は時として花に思いを委ねるからさ』

―彼が彼女の前に現れるのよ。霊となった彼が―

「お久しぶりです。おそらく今年が最後になりますので、ご挨拶に伺いました」

『ええ、もうすぐきつと終わりますよ』

「あなたは、ちゃんと約束を守ってくださいますのね」

『違い様もない事だからね』

「真白のユリ、約束の証はもう必要ありません」

「相手が人間かどうかは疑わしいが…」

―シルシアに毎日花を贈るのよ、純白の花を。“私の気持ちは変わらないという証明。

私の愛の印です”って。毎日送られる花、それでも彼女は素直になれない。ある日、

いつもの時間に彼は花を届けに来なかったの。彼女はやっぱりって、思いながらも悲しくなった。

気付かぬ内に彼を愛していたのね―

《夏目さんは大層良くしてくれて。よく花など贈って母を慰め元気付けてくださった》

【白いユリをですな。カサブランカ、というのかね】

【毎年ね。カサブランカを】

沢山の言葉が頭の中を駆け巡る。

色んな人たちの多様な言葉、それがピースのように重なった。

あの時の女性は、老紳士の母親に間違いない。彼女は若くして戦争

で旦那を亡くした。

彼女を支え、カサブランカを贈った人物、それが、夏目さんの曾祖父である夏目氏。

込められた意味は恐らく“雄大な愛”

彼女は亡くなった旦那の愛を忘れられないままだったが、長い時を経て、支えてくれた夏目氏に心を砕く。

そして、思いは遂げられないまま。夏目氏あるいは白百合の女性は他界。

二人は結ばれなかったに違いない。

ここからは推測だけど、白百合の女性は、結ばれることのない恋に未練があつた。

強すぎる念は呪いとなり得る。彼女は、今は亡き夏目氏の子息のもとに現れた。愛を貰いに。夏目氏子息は彼女の呪いを避けるため、約束という回避を試みた。

現に生きる人間の間は、真白カサブランカを贈ることで愛の証明を。死が迎えにくるまでの約束。

しかし、『あなたは、ちゃんと約束を守ってくださいますのね』という彼女の言葉から、

夏目さんより前の子息は、死を迎えても彼女と結ばれることはなかった。

そして、彼女はまた残される。彼女は遂に、愛の証しでは駄目だと気付いたのだ。

今日という命日で、偽物ではなく、夏目さんを連れ去ってしまうつもりだ!!!

— ええ、もうすぐきつと終わりますよ

いやだ。嫌だ。絶対終わらせたりしない。

夏目さんを奪わせたりしない。

間に合え、間に合え！

7話

荒い息を吐いて並木茶屋橋までたどり着いた。

橋の下の川は雨で荒れ、何もかも飲み干してしまいそうだった。直ぐ目の前の墓地まで急ぐ。

同じような、墓が立ち並ぶ。雨のせいで酷く視界が悪い。

夏目さんは!?

カラン・コロン

聞きなれない、でも聞き覚えのある音。

彼女だ! 白い花の添えられた墓標。傘をさした夏目さんの後姿が見えた。

彼の前には赤い着物の女。

彼女の白い手が夏目さんに差し出された。

だめっ!!!!

無我夢中で走った、そのまま、夏目さんの腰に抱きつく。

決して彼女に渡さないように、強く。

「葵ちゃん!?’」

彼の手から滑り落ちる傘がスローモーションで見えた。

「駄目。連れて行かないで! 私から夏目さんを奪わないで! あ、貴

女が、叶わない恋の代わりに夏目さんを連れ去っても、それは変わりではない、まがいものよ！良く見て、目の色、髪の色。貴女の夏目さんじゃないでしょ！」

貴女の愛した夏目氏ではないでしょう？

甘い蜂蜜色の髪も。

トンボ玉みたいに、冷んやりとした色、でも温かい笑みが何より良く似合う青灰色の瞳も。

貴女のものではない。

私の、特別な色なの。

ねえ、取らないで、とても大切な色なの。

息つく間もなく叫ぶ。

「私の夏目さんは、夏目さんだけなの！失ったら死んじゃう。嫌だ。連れて行かないで！いっちゃやだ——」

同じ言葉ばかり繰り返す思考も、雨なのか涙なのか分からない顔も、もうぼろぼろだ。

まさに捨て身とはこういうこと。

「行ったりしないよ。」

ぽすりと濡れた頭に温かな手が乗る。

え？

「何処にも行ったりしないさ。僕が、葵ちゃんを置いて何処に行くというんだい？」

ええ？いつ行かないのお！？

思わず抱きついたまま彼を見上げる、彼は、ゆるりと微笑んだ。

とつても、安心する夏目さんの微笑み。

ぽんぽんと、頭に添えられた夏目さんの手が、大丈夫だよと私を慰める。

それだけで、荒らんでいた気持ちが、ゆっくりと静まって行くのが分かった。

夏目さんが、ついつと着物の女性に視線を投じた。

「さあ、お待たせして申し訳ない。やっと終わりましたよ。約束のモノです」

懐から何か古めかしい本のような物を取り出し、目前に佇む女性に差し出した。

私は、わけも分からず、いまだ彼の腰にしがみついた状態で、二人を見比べていた。

彼女は白い手で其れを受け取り、宝物のように腕かいなに抱きしめ涙を流す。

「ああ、これでやっと彼のもとに行けるんですね。夏目様、長い間本当にありがとうございます」

「なあに。貴女の意志あつてのこと。僕はただ、少し手を貸したままで。さ、僕の事は気になさらず、彼のもとへ行って差し上げなさい。」

おそらく、待っておられる。と夏目さんは朗らかに笑う。
いったい、これはどういう展開なのか。

女性は夏目さんに微笑を返し、傍らの私にも微笑んだ。
そして、ゆつくりと頭を下げ、スウッと音もなく消えていった。
それを見届けた後、私を腰にぶら下げたままの夏目さんは、

「おや、晴れてきたね」

と空を見上げた。

小雨がまだ少し降る中、雲間から少し光が漏れている。
呑気な夏目さんを暫く啞然と見つめた後、はっ、となって彼を揺さぶる。

「な、夏目さん。無事なんですか？無事なのですね！どういうことです。怨念は？呪いは？一体全体……」

「随分心配してくれていたようだねえ、葵ちゃん」

夏目さんは、にこにこ笑う。

懷からハンカチを取り出し、母親並みの甲斐甲斐しさでずぶ濡れの私をふいてくれた。

うっ、されるがまま……。

くっ、このまま夏目さんのほのぼのとした空気に騙されてなるものか！

私ばかりが消化不能で気分悪いのだ。

「どういうことか説明してください……！」

「そう？僕はもう少しこのままでもいいけどなあ」

は！

今更、くっつき過ぎを自覚した私は、反射神経フル起動で、夏目さ

んから離れた。

ハンカチは有り難く、ひつたくっておいた。

殿方に何時までも抱きついたままなど、何たる不覚！

ひよろそつに見えて以外と硬い腹筋とか、意識してませんから。え

え、決して！全く！

赤くなる顔を誤魔化すように、ごしごし拭く。

夏目さんは、私の様子を楽しげに眺めた後、落ちた傘を優雅に拾い、パタンと閉じて振り向いた。

「行こうか」

雨は完全に止んでいた。

8話

来た道を歩きながら、夏目さんは話します。

「単刀直入に言えば、あれは、幽霊というよりも彼女の念、かな。」

「念？」

「そう僕が彼女に渡したモノ、あれは彼女の日記でね、彼女は夏目家の者にそれを預けていたんだよ。その内容は、戦地に赴いた旦那への愛が切々と綴ってあった。」

戦地へ、向かう旦那。追いたいのには追えないもどかしさ。

「長い年月をかけて日記の思いは彼女となり具現化した。ただ、日記は大部分が破損していてね。それを、僕に彼女が訴えてきたのさ」

『これでは、彼との約束を思い出せない。彼に会いに行けないのです。夏目様どうかお助けください』

「どうやら、彼女の命日に彼女の思いは強まるらしく、ふと現れたんだ。金木犀の木の下にね。日記はどうにも破損が激しく、修繕にもまた時間が掛かる。其の由を彼女に伝えと、何年かかっても良いのでお願いしたいと言う。何でも、夏目の名を持つものに以前、願い出たことがあったが、ついには直してはくれなかったと言うじゃないか」

『だからどうか、約束の印を、毎年修繕の成果の証を』

「彼女がそう言うから、僕は夏目青磁が以前、彼女を慰めるために贈っていたという花にあやかって、カサブランカを修繕の報告の証にしたというわけさ」

あの、老紳士が言っていた、夏目さん、もとい夏目氏は夏目青磁と言っらしい。

「そして今日、ついに出来上がったというわけだ。いやあ、命日でもないのに店に現れたのには、さすがに吃驚したよ。おそらく、ほとんど修繕も完成していたから、思いも強くなってしまったんだろう」

あの時は、驚かせてしまつて悪かったね。と夏目さんが私を見て言う。

あまりに呆気ない真実。念というものがどんなモノなのか今一曖昧ではあるが、怨霊などという物騒なものではないらしい。

彼女が愛していたのは、夏目さんの曾祖父らしき夏目青磁さんでもなく夏目さんでもなく、

ただ一心に旦那さんだけだったらしい。

あ！でも！

「でも、青磁さんは、彼女を愛していたのではないですか？」

旦那が去った彼女を支え続けた夏目氏。彼の恋は実らなかったのか。

「何故だい？」

「だって、カサブランカの花ことは“雄大な愛”」

それを聞いた夏目さんは少しキョトンとして、アハハと顔を上向かせながら額に手を当てて笑った。
な、なんだ。いきなり。

「ははは…はあ。違うよ。そんな大層な意味など考えもしてないだろうさ。夏目青磁という男は本当に無骨な男だからね」

まるで、青磁さんなる人を見てきたような口ぶりだ。

日記には、そんなことまで書いてあったのか。哀れ夏目青磁さん。

「では、何でカサブランカを？」

「それは、彼女の名前がただ単に百合子さんだったからではないかな。色は適当に選んだのだろう」

ゆりこ…

で、ゆり…

色は…適当。

―がく。

私の推理って、いったい。的外れ過ぎて、いつそ馬鹿馬鹿しい。

結局は私の取り越し苦労というわけか。

所詮探偵のモノマネなど、一介の女子高生には無理な話だったのだ。それに、と続ける夏目さん。

「彼女の特別な花は別にあるしね」

何処か、遠くを眺める夏目さん。その視線を追うように顔を上げた。

「金木犀」

彼女が毎年佇んでいた場所。

「そう、最初から彼女の特別だったんだ。思い出せなくとも、彼女はちゃんと待っていた。気付けなかっただけで。——おそらく、彼も……」

雨上がりに、金木犀が僅かに香る。

金木犀は、初恋の香り。

「あ」

一瞬、金木犀の木下に、赤い着物の女性と、大きな背中中の男性が見えた気がした。

香りのように微かに、一瞬だけ。

「ほら、見えてくるだろう？」

夏目さんが隣でクスクス笑っている。

ああ、この人といると、現実がとても遠い。本当に非常識だ。でも、なんだろう。悪い気はしない。

楽しそうに笑う夏目さんを眺めながら、今までの取り越し苦労も、気が抜けたように溶けだしてしまっていた。

【約束をして、

あなたと初めて会った時のあの溢れる様な香り——
私たちの出会いの花……。

また、金木犀の木の下で会いましょう？】

隣を歩く夏目さんは、何故か何時までも機嫌よくニコニコしている。今にも鼻歌が聞こえてきそうな雰囲気だ。時折、私の髪を滑るように撫でる。

何なのだ？ いったい。

「それにしたって、あの時の葵ちゃんには思わず、ときめいてしまったなあ」

「は」

「あんな熱い言葉を向けられたのは初めてだ」

「え」

あ……！ ああ——！！！！

——私の夏目さんは、夏目さんだけなの！！ 失ったら死んじゃう。嫌だ。連れて行かないで！
いつちゃやだ——

しっ死ぬ。羞恥のあまり死ぬ！

必死だったとはいえ、あんなことを口走るなんて。

お前を失ったらおれは死ぬ。イタリア人が私は——！！

「わわわ忘れてください。忘れる！忘れやがれ——！！」

「忘れられるはず無いだろう？一言一句おぼえているよ？」

ちよっ！顔俯かせながら頬染めんのやめてくださいよ！！
態とだ絶対。からかつてるんだ！

「『私の夏目さんは、夏目さんだけなの！！失ったら——』」

「やめっ」

やめて——つつっ！！！！

すっかり、機嫌を悪くした私を、夏目さんが宥めつつ古本屋に帰って来た。

雨で冷えた体をお茶で温めやつと落ち着く。

ま、何だかんだ解決で良かった、良かった。と幾らか機嫌を直し、ほのぼの夏目さんとお茶を飲む。

ああ。これこれ。この濃い茶！

もちろん、漣のブレンドも美味しいけど、休みの日はやつぱり……って、ああ！

ブレンドコーヒーも豆も小松親分も全部ほっぱり出して来てしまったことを今更思い出す。

や、やばい。発狂したとか思われてたらどうしょ…。

8話（後書き）

これで、「金木犀と白百合」のお話は終了です。

結局最後にはのぼのとなるのが、この話の宿命なのです。

葵と一緒にハラハラしていただけたなら幸いです。

1話目、6話目の冒頭の文章は、百合子さんの日記だった訳です。

次は閑話少しを入れて、新たな夏目さんストーリーを作っていきます。とおもいます。

次のお話では椎名君の生い立ちも取り入れつつ。

題名は「レールの先に見る才能」何のこっちゃですね。

新たな人物も出す予定です。待っていて下さると嬉しいです。

閑話

事件後のお茶のひと時。

地味に気になっていたことを聞いてみた。

「夏目さん」

「ん？」

「夏目さんの下の名前って、なんて言うのですか」

何せ、自分はてつきり“夏目”が彼の名前だと思っていたのだ。

まだ記憶に新しい白百合事件（命名）で、夏目さんについて色々発覚したことがある。

・夏目さんの曾祖父らしき人は夏目青磁という。

・彼は黒髪黒眼

・夏目さんの言葉の中に出てきた「夏目の名を持つもの」とは何なのか

・その他、もろもろ夏目さんへの不信感

白百合事件は解決したのに、夏目さんの謎は深まるばかりだ。

「僕は、僕だよ」

「…意味わかりません」

「葵ちゃん。時として、敢えて知らなくてもいいモノが世の中には溢れていると思わないかい？」

それが、名前だというのか！

長い付き合いのくせに、名前すら教えてくれないってどうなの！？

「なんですか、それ。もしかして、私を疑っているのですか？別に、フルネーム聞いたからって悪用したりしやしませんよ！」

しやらくせえ

名前ぐらいで、悪用も何もない。

「葵ちゃんを疑うはず無いさ」

「じゃあ、問題ないじゃないですか」

むう。と睨みつけてやる。

夏目さんは、長い足を組みなおした後、ぷいとそっぽを向いた。

コラッなんだ、その態度は！お母さんは許しませんよ！白状なさい！さらに胡乱な視線を投げてやる。

じと…

夏目さんは、横目で私をちらりと見る。そして嘆息一つ。

「恥ずかしい名前なんだ」

は？

今度は、しっかりと私を見据え、諭すように言いなおす。

「口には出せないくらい恥ずかしい。もし、その名で呼ばれたら僕は死んでしまうよ」

マ、マジでか。

…夏目さんに、ここまで言わしめる名前って…逆に気になる。

露未男ロミオとか、美氣欄璽ミケランジェロとか？

謎です。

謎すぎます。夏目さん。

夏目さんの剣幕に押された私は、結局彼の名前を聞き出すことは出来ず。

今日も今日とて、夏目さんは、夏目さんなのでした。

9 話：レールの先に見る才能

才能とは何か。

強制的に敷かれたレールは果たして才能となり得るのか。

自身が好む事柄に才能が付いてくるとは限らない。

寧ろ、その様なことは稀だ。

では、強制的にでも敷かれたレールをたどる方が賢明というものの、
なのか。

このレールを辿れば、栄光という名の産物は確実に手に入るの
だろう。

しかし、どうしてだろう。

そのような物に自分は少しも魅力を感じない。

カランカラン

「いらっしえ… おお、葵ちゃん！心配したぜ！大丈夫だったのかい」

ブレンドのことを思い出した私は、再び“珈琲喫茶漣”を訪れた。

「いや、すいませんでした、小松親分。急を要する出来事がありま
して…。無事、解決しましたので大丈夫です」

「おお、何か知らねえが、解決したってえなら良かった。お、後ろ
のお方は…」

小松親分は、私の後ろに続いて入ってきた人物を見て、驚く。後ろに居るのは勿論、夏目さん。

もしかしたら、まだあの老紳士が居るかもしれないと思って、折角だから会わせてやろうと連れて来た。

一応、この事件に由縁のある人だし。曾祖父さんのこともあるし。

「近所の古本屋さんの夏目さんです。夏目さん、こちらはマスターの小松親分」

「はじめまして。夏目です」

夏目さんはマスターに微笑んだ。

眩しいものを見たかのように瞬きする小松親分。

「いやあ。参った。並木茶屋にこんなキレイな兄ちゃんが居るなあ」

小松親分も人好きのする笑顔で答えながら、私たちをカウンター席に促した。

「あのおじいさん、帰っちゃったんですか」

残念な事に老紳士は既に店を出てしまったようだ。

「ああ、葵ちゃんが、置いてったコーヒー、ちゃっかり飲んで帰ったぜ」

親分が笑う。

なぬ！まあ、残しておいても勿体ないけどさ。

何といってもコーヒーは引立て煎れたてが命だからね。

帰っちゃったのか…残念。私もちゃんと話したかったのになあ。しょんぼりしていると、夏目さんが「また、会えるさ」と微笑んでくれた。

親分が入れてくれたブレンドコーヒーを飲む。

夏目さんも、いたく漣のコーヒーをお気に召したようで、豆の焙煎はどうかとか、お湯の温度とか、親分がたじろぐ位質問していた。随分打ち解けた雰囲気になり、ふと夏目さんが親分に訪ねる。

「あのピアノ、随分良いものですねえ。どなたか弾かれるのですか」

「ああ、あれかい。そりゃあ良いピアノさ、だがなあ、弾ける奴が帰ってこんなにやあ、宝の持ち腐れよ」

実は私も気になっていた、やたら存在感を誇るピアノ。それなのに、弾かれているところを見たことがない。

「帰ってくるって？」

親分は確か独身だし…。

「俺の弟だ。あのピアノも奴のもんさ。今はベルリンに留学中だよ。秀坊とは顔見知りだが、葵ちゃんは会ったことねえかもな」

漣には兄の方がよく通っている。基本、私は夏目さんの所に入り浸っているし。

でも、この親分の弟さんがクラシック…。まさか“べらんめえ”口調だったり…。

なんか、嫌だ。

「弾いてみても？」

いきなり、夏目さんがそんなことを言う。
ええ！貴方弾けるの？

「ああ、構わんだろう」

親分の下承を得ると。するり、とピアノの方に向かう。
私は啞然としながら夏目さんを目で追った。
繊細な動作で鍵盤を開き、ポーンと確かめるように一つ弾く。

「調律はマメだぜ？」

得意げな親分に「さすがです」と一つ笑い返し、カタリと姿勢よく座る。

次いで、聞こえてきた演奏に耳を疑った。

鐘の音のように響く出だし、そして次第に早まる旋律。

跳ねる手。何処までも早く繊細に音を紡ぐ。

これって…。

音楽の知識がまるでない私でも分かる。

超絶技巧、という奴ではないだろうか。

ヤバイくらい難しいとされる曲。

鍵盤の端から端まで余すことなく指が動く。

強く、早い旋律。

す、う…。

これで甚平じゃなければ、もっと絵になるのに…。

演奏は終盤に向けて速度を増す。
そして儼かに曲は終わった。

「「すげー……」」

私と親分が同時に言う。

「何で？何で、夏目さんそんな弾けるの？プロ目指してたんですか？」

未知だ、もう無限だよ夏目さん。私は夏目さんに詰め寄った。

「まさか、ただちよつと昔かじつてただけさ。正確に弾くのは得意だけど、音に色が全くないだろう？レコードと変わらないさ。弾けるのはリストぐらいだしね」

首を傾げながら事もなげに言う。

「いやいやいや。かじつてただけで、正確に弾けること自体すごいですって。」

半ば啞然としていると、

ドアベルが鳴った。すぐ後にパンパンと軽快な拍手が聞こえる。

フランツ・リスト

「Franz・Lisztのパガニーニによる大練習曲『ラ・カンパネラ』をそれだけ弾けるのは中々すごい事ですよ」

声の方を見ると。白いジャケットにタータンチェックのサスペンダー付きスラックスという小粋な服装の男性が立っていた。

誰！？

そして何語？

パガ？カンパ？

その男の人は続けて言う。

「ピアノの魔術師と呼ばれたリストの超絶技巧練習曲、パガニーニ

による大練習曲。中でもラ・カンパネラはリスト以外の人間には弾きこなせない難曲であつたがため、楽譜を書き直したことで知られる名曲だ」

その人は、すごいよ貴方、と夏目さんに笑いかけた。

何ものですか？アナタこそ。

10話

「有志じゃねえか。お前、帰って来る時ぐれえ連絡しろ」

小松親分が呆れたように言う。

「ああ、ごめんよ兄さん。ちょっと帰って来なくなっちゃって」

有志さんとやはらは、どうやら先刻話題に上がった小松親分の弟さんらしい。

噂すれば影とは正にこのことだろう。それにしても、似てない兄弟である。

渋め江戸っ子風小松親分に対して、有志さんは、茶目つけおフランス風といった風貌だ。

どちらにせよ、濃ゆいことには変わらないが。

「やあやあ。さっきの演奏はあなたですね。セニョール！なかなか卓越した弾き方をなさる」

有志さんはボストンバックを小松の親分に押し付けて、夏目さんに握手を求めた。

「お褒めに預かり光栄です。ですが、弾ける、ただそれだけのことです」

握手に答えながら夏目さんは言った。

それは、謙遜と言うより真にそう思っているといった口調だった。

「まあ確かにね。音楽というものは弾ければそれで素晴らしいと言

うわけではないですから。しかし、貴方ならもつと素晴らしい演奏を目指せるのでは？」

「いえ、興味がないので」

何処か冷え冷えとする口調でそっけなく返す夏目さん。
確かに、すごい演奏だった。

でも、彼らが言うには、それだけでは駄目らしい。
音楽の知識のない私には何が駄目なのか分からないのだが。

「ううん。そういうことなら仕方ありませんね。」

ひょい。と肩を竦めて、有志さんが残念そうに言う。

「おい、有志。お前ちゃんと向こうでやってんだろっな」

「あたりまえだろう。私を誰だと思っているんだ」

小松親分の言葉に、いきなり不遜な態度で胸を張る有志さん。
うわぁ、この人ナルシストか？

思わず、ジロジロ見ていたら有志さんと目が合った。
そしてすぐ、ついと逸らされる。

な、なかったことにされた。

「あなた！初対面の人には挨拶と自己紹介！」

存在を無視されたことでムカムカした私は、思わず彼に噛みついた。
有志さんは、嫌そうな顔をして私を見ると、また逸らした。こ、こいつ。

「それを言つなら、君もだろつ。あ、あまり近寄らないでくれたまえ！」

どこ見て言つてんだ。そつちは壁しかないぞ！
言いたい事あるならハッキリこつち見て言えい。

「悪いね、葵ちゃん。コイツの女嫌いは昔から酷くてなあ」

憤慨する私に小松親分が申し訳なさそうに言つた。
女嫌い。なるほど。それならこの怯え様も頷ける。
だけど、だからと言って人間礼儀つてものがある。
女だからと邪険にされたのではたまつたものではない。
ジロジロ見る私にビクビクする有志さん。

「…有志。こちら秀坊の妹さんの葵ちゃんだ。それから葵ちゃんのご近所の古本屋の夏目さん」

見るに見かねた小松親分が紹介してくれた。

「へえ、秀にこんな妹が…」

思いつきり見下した言い方。こんな、とはなんだ！
どうせ、ちんちくりんですよ！

「もういいです！行きましよう夏目さん！小松親分ブレンドどうも
ありがとうございました」

いつの間にか、私たちの攻防そつちのけで優雅にコーヒーを飲んで
いた夏目さんを引っ張って店内を鼻息も荒く出て行った。

「失礼な人です！何様ですか。あの人は」

「女性に相当トラウマがあるのかな、彼」

「女嫌いだからってあの態度は許せません」

ぷりぷりと怒る私に夏目さんは隣でくすくす笑う。
何が可笑しいのか！

「なんです？」

「憤慨している葵ちゃんがかわいいな、と」

な！何を言い出すか！この人は！

どうやら、白百合事件から夏目さんが少々おかしい。何がってアレだ。甘いのだ、言動が。

そんな風に言われたって私はどう反応すれば良いのか分からない。

「嫌いなのは、今までそういう出会いしかしてこなかったからさ。
きつと彼も変わるよ」

癖のように私の髪の毛をすりと梳かしながら夏目さんが言う。

「どういうことですか？」

「僕もそうだったから」

「夏目さんも、女嫌いでしたか？」

「と言うより、人間全般かな」

人間嫌い…。初耳である。

確かに本ばかり読む夏目さんはどちらかと言えば孤独を愛する人のように見える。

しかし飽くまで私と接する時は紳士だし、邪険にされた記憶もない。また、小松兄弟に対しても人当たり良く、そんな風には見えなかった。

はて…。

「それは、また何故？」

「人は受け入れられないことを知った時、とても絶望すると思わない？」

また、婉曲な…。と思ったが、夏目さんが何時ものような笑顔を浮かべないからそれ以上は聞くことは出来なかった。

青灰色の瞳がいつもに増して冷え冷えとして見える。まるでガラス玉のように無機質だ。

この飄々とした人は、本当はとても脆く深い闇をその心に秘めているのではないだろうか。

「遅い！」

いつかのように、帰って早々兄に凄まれた。今日はひよこエプロンではないが。

「ブレンド買いに行くだけでどれだけかかるんだお前。迅速な俺は課題もすでに…ぶはあ」

「ごちゃごちゃとうるさい兄の顔面に御希望のブレンド豆の袋を押し付けてやった。」

「はいはい。お待たせしました。そんなら自分が迅速に行ってくれば良かったじゃん」

「ぶあか言え。俺は課題中にコーヒーが飲みたかったんだ」

「知るか!!」

「うるさいな。こちとら色々あったんじゃない」

「白百合事件に続き、フランス伊達男にもあって散々な日だった。」

「おまけに帰りの夏目さんとの会話で妙な空気になるし。」

「キツと兄を睨みつけてやる。」

「大体、兄さんが悪い!全ての元凶はお前だ!」

「そうだ。兄が漣に行けと言いだしたのがいけなかったのだ。」

「兄が夏目さんを妖怪扱いするから夏目さんが受け入れられないとか言い出すんだ!」

「半ば八つ当たりの勢いで全身全霊を込めて兄を睨み据える。」

「流石の兄も之には聊かたじろぎ半歩後ろに下がった。」

「何だ?腹が減ってるのか?」

「何故か私の不機嫌を腹のせいにする兄。その変な気遣わしさにまた」

腹がったった。

「違う！今日漣で変な人に会った。兄さんは知ってるでしょう？有志とかいう」

「有志が帰って来て居るのか！ああ、なるほど。お前の不機嫌はあいつのせいかな」

兄がしたり顔で頷いてくる。
それだけじゃあないけどさ。

「あの人すごく失礼！女嫌いって言うけど、『近づかないでくれたまえ』だよ？」

私のモノマネが似ていたのか兄は大いにうけた。腹を抱えて笑っている。

「あははは。相変わらずだなアイツ。」

「昔からあなの？」

「ああ。あいつのは女嫌いというか、極度のテレ症だろう。素直になれないんだ。」

ツンデレ属性か、あの男。

いや、デレられても全然萌えない。いい迷惑だろうな。

私がものすごく渋い顔をしていたら、兄が弁解するように話出した。

「いや。あいつ女性に対してあんなだろ？最初はみんなお前みたいな顔するんだが、あいつの演奏を聴いたらみんなあいつに惚れてし

まうんだ」

「そんなにすごいのか？あの人の演奏」

「ああ、音楽のことはよくわからんが、すごいと思うぞ」

ふーん。と気もなく答えながら、少しだけその演奏に興味を湧いた。この兄が褒めると言うのは、なかなか珍しい事である。しかし、またあの人に会いたいかと聞かれると、顔も見たくもないのが現状であった。

11話

「葵の上は六条御息所の生霊に崇られ…」

ああ、葵の上死んじゃった。

古典の時間、葵の上という名に親近感を覚え珍しく一生懸命授業を聞いていたら、あっけなく崇られて死んでしまった。無念。

大体、光源氏が悪いんじゃない。ふらふら色んな女にうつつを抜かしおって。

六条御息所も光源氏を崇ればいいものを…。女の嫉妬は恐ろしい。後ろから二番目という絶好の席で一人葵の上の冥福を祈りながら、クラスの様子を窺う。

皆午後からの授業とあつて、見事なまでに黒板が見えやすい。つまり皆、机に伏せ状態。

ああ、平和だな。などと古典の先生には全く有り難くない光景にしみじみしていると、ここから斜め前の方向にピンと伸びた背中を發見した。

あれは、椎名君。

帰り道を送ってもらったからといって特別何か変化があったわけもなく、まあ朝挨拶を交わす程度だ。

だけど今までの苦手意識が無くなったおかげで、以前より自然に接することが出来る。

ぼんやり彼を眺めていると何かを察知したかのように椎名君が肩越しに振り返った。

「……」
「……」

しばし、無言で見詰め合った後、何故かコクリと頷かれました。

そのまま何事も無かったように前を向く椎名君。

…謎だ。

ごめん椎名君。流石にまだ以心伝心は無理みたい。

呆然としていたところでチャイムが鳴り、余程呆けた顔をしていたのかノートの収集を先生に頼まれた。くぬう…。

「はい、後ろから古典のノートまわして〜」

HR後、皆に「ご愁傷さま葵の上」などと軽口を叩かれつつノート回収を行った。

まさか椎名君の無言の頷きは、こういう意味合だったのか！とハツとした。

無念、葵の上的な…。

いやいや私は葵の上でもなければ死んでもいないぞ、椎名君…。

震える腕を叱咤しながら図書室までの道に行く。

この学校の国語教諭は図書室の奥に準備室を構えている。

どうでもいいが多少遠いのは勘弁してほしい。

乙女にあるまじき行為ではあるが、如何せん両手が塞がっているの
で足で図書室のドアを失礼し入室する。

すると、今日もまた椎名君が図書当番であつたらしく、貸出カウン
ターに佇む繊細な背中が見えた。

おや、何をしているんだろう。

そろそろと近づいて伺い見ると、どうやらカウンターに飾られた花
を微調整していたらしい。少し神経質な指先がスイートピーを整え
ている。

その様子を以外に思いつながら取りあえず手に持ったノートをカウン
ターに置き、話しかけた。

「お疲れ、椎名君。」

指先がぴくりと震えた後、緩慢に振り返る椎名君。どうやら相当真剣だったらしい。

いや、悪いことしちゃったかな。めんご。

「…笹野さん。それは提出物？」

しかし、振り返った彼の顔に動揺はなく、積み上げられ置かれたノートをツイと指さす。

「うん。大変だった。もう階段とかしんどい…」

ここに至るまで如何に苦勞して運んだかを切々と話し出す若干ウザイ私に一つ頷いて、椎名君は無言でノートの束を抱え、奥の準備室へ去っていった。

相変わらず、つれない…。

このまま帰るのも悪いので、椎名君を待っていることにした。手持無沙汰に図書室を眺める。本で一杯の空間。だけど夏目さんの所とは違う。

夏目さんの古本屋さんはもつと神聖で暖かくて、何処か閉鎖的。ふと、彼の無機質な瞳が蘇る。あの人はいったい何を心に抱えているのだろうか。

恐らく、聞いたところで彼はまた飄々と誤魔化してしまうのだろう。今までは、それで構わないと思っていた。

寧ろ知らない事があの特別な空間を崩さない方法であると信じていた。

小さい頃、綿飴だと信じていた雲はただの水の塊、そんな絶望を恐

れていたのだ。

だけど、垣間見てしまった。彼の悲しさ。こんなにも胸が押し潰される。

何故自分は何も知らないのだろう。

夏目さんにとつての私って一体何だろう。

空虚をさまよう思考に身を委ねていると、椎名君が戻ってきていた。

「あ、椎名君ありがとう」

目だけで頷いて見せた彼に、何だか立ち去りたくないな、という感情が芽生えた。

ついこの間まで彼の事を怖がっていたくせに、今はもう少し彼の傍にいたいなどと思う。

鉄仮面で言葉の足りなすぎる椎名君。いつも飄々としていて掴みどころのない夏目さん。

正反対な彼らだけど、何か通ずる不思議な二人。

ふと、視線に先ほど彼が整えたスイートピーが鮮やかに映り込んだ。そういえば、いつか椎名君が花図鑑に興味を示したことを思い出す。

「ね、椎名君は花が好きなの？」

彼の表情は僅かにも変わらないが、何か思案するようにスイートピーを暫し眺めた。

「好き、と言うのとは違う」

自分でもよく分からない、と彼は呟いた。

軽い質問に対して彼の返答は真剣であった。

そう、か。彼も抱えているのだ。夏目さんのように心の中に何処か冷えた感情を。

不意に衝動が沸き起こる。

もっと知りたい。見せてほしい。

パンドラの箱を開けた時いったい何が残っているのか。

この感情をどう表現すればいいのだろうか。

12話

何処か虚ろな椎名君の表情。きつと今彼はここにいてここにはいないのだろう。

花を眺める瞳がどこか曇って見えた。彼は今何処を見ている？

人の暗い感情は何となく空気で分かる。

その人が本当に触れて欲しくない事ならば本当に慎重に扱わなければならぬ。

いや、本来は触れるべきでもないのだろう。

だけど、触れたいと思った。椎名君のことが知りたい。

私たちは今まで近くにいながらも平行線のように生きてきたけれど、一度交わった糸を容易く解きたくはないと思う。

ねえ。椎名君。私はもっと貴方のことが知りたいよ。

「……何？」

訝しげな椎名君の声でハツとした。どうやら私は長い間椎名君に熱い視線を送ってしまったていたらしい。

「は、いいや…あの、」

君のことが知りたい。だなんて告白めいた思考が今更気恥ずかしく、しどろもどろになる。

私の青くなったり赤くなったり顔が面白いのか、椎名君もじっと私を見つめていた。

眼鏡の奥の瞳にもう曇りはなく、ただ私の困惑顔がそこに映っていた。

「椎名君と仲良くなりたいです」

混乱の最中、私が紡ぎ出した言葉は小学生でも到底言わないであろう言葉だった。

ああ、もう。痛い。自分が痛い。

「……いいよ？」

軽く自己嫌悪で俯いていた私の旋毛に声が落とされる。

はたと顔を上げると今まで見た事のない椎名君の表情がそこにあった。

か、かわ…！！

何だこのハニカミ笑顔！

笑顔らしきモノは一度見た事があったけど、こんな風にはつきり見るのは初めてだ。

日頃無表情の人の笑顔って…破壊力ありすぎ。

反則だよ、それは。キラースマイルだよ。

「そ、そつか。じゃあ、仲良しだ」

「うん」

「メルアド交換する？」

「…」

黙られた。仲良し違うんかい！若干もう、どうしたらいいのかわからないです。

「機械、苦手」

「え、携帯持ってなかった？」

「ある。でも、電話だけ」

お、お年寄りですか椎名君。ラクラクフォン買いなよ…。

じゃあ、電話番号だけでも、と言いかけた私に、電話も苦手と椎名君。

お互い言葉もなくじっと見つめ合うだけで暫く黙った。

私は既に前途多難なこの仲良し計画をどうしたものかと考えていた訳だけど、

椎名君はそうではかったようで、私から視線を外すとカウンターの端に置いてあったカバンから1冊のノートを取り出し私に差し出した。

「これは…？」

おそろおそろ、差し出されたノートに手を伸ばす。

まさか、交換日記から始めましょう的なそんなアレですか？

「仲良しだから」

そう言った椎名君のノートを持つ指が私の手に触れた。

「特別」

淡々とした言い方はそのままなのに、今までより声が柔らかく聞こえるのは、私の気のせいだろうか。

帰って開いて見てほしいとの椎名君の言葉に、何なのか未だ良く分からぬノートを鞆の中に納めて学校を出た。

は。思わず溜息が洩れる。

何だってこんな展開になってしまったのか。自分が何をしたいのかよく分からない。

夏目さんのことを考えていたのに。何故、急に椎名君に興味が湧いてしまったのか。

肌寒い秋口の風が頬を掠める。

私の中で何かが変わっていくのかもしれない。先ほど触れた指先にそんな予感がした。

早く、夏目さんに会いたい。今日はそのまま夏目さんの所に行こう。帰路に行く足を速めて良く分からない思考を遮断した。

ガラガラと引き戸を開け、何時ものように本棚の森の向こうにいるであろう夏目さんのもとへ急ぐ。

ふと、本棚の影から覗いた夏目さんに思わず足を止めた。どう表現したらいいのだろう。

何時ものように、何時もの席で頬杖をつきながら本を読む夏目さん。綺麗な蜂蜜色の髪が出窓から漏れる微かな光にきらきら輝いて、伏せられた同色の睫毛に本を見つめる青灰色の瞳。

長い指先が本をパリリと捲る。

ああ、なんて綺麗な…。

本当にこのまま額に納めてしまえそうだった。だけど、何かが凄く悲しい。

何が、なんて上手く説明できない。

しかし私の胸は締め付けられるように切なくなり、その場から動けなくなってしまった。

思わずカーディガンの胸元をギュッと握る。

「葵ちゃん？」

呼びかけられて、はっとする。夏目さんが本から目を上げ、私を少し訝しげに見ていた。

「あ、こんにちは。夏目さん」

何処かぎこちなく挨拶をして、縫い付けられていた足を夏目さんの方へと動かす。

そのまま私が夏目さんの斜め前のアンティークの椅子に腰掛けるまで、夏目さんの視線は私を追っていた。

自分でも不自然だし、ぎこちないのが分かるから余計に目を合わせ辛い。

でも、何を言ったらいいのかわからない。

「あ、の」

でも、このままの雰囲気もまずい気がして、とりあえず声を出して失敗した。

何も言うべきことが見つからず視線を下に彷徨わせる。

「今日、学校からそのまま来て、お土産ないんです」

結局出てきたのはそんな言葉だった。

「それは、丁度良かった。葵ちゃんにと思ってたくさん買ってしま
ってね」

声と共に掌サイズの白い袋が差し出される。

夏目さんを見ると少し笑って頷かれたので、その袋を受け取り、そ
っと開いた。

「あ、金平糖」

白にピンクに緑に黄色……。カラフルで可愛らしく懐かしいお菓子が、
白い袋にたくさん詰まっていた。

「私に、ですか？」

「そうだよ。お星様見たいで可愛いよね」

「夏目さんが買ったんですか？」

「そうだね」

一つ黄の金平糖を取り出して口に入れる。優しい甘みが口の中で溶
けた。

嬉しい。

夏目さんが私のいない間、私の事を考えて、私のために物を買って
くれた。

こんな綺麗なお菓子を選んでくれた。

「夏目さん」

「ん？」

「ありがとうございます」

宝物だ。金平糖は1年持つというから、乾燥材と綺麗な瓶を用意しよう。

思わず頬が緩んだ。

「カタチに残るモノより、溶けてなくなつた方がいいのだろう」

夏目さんの言葉に緩んだ頬が一瞬にして強張り、意味を図りかねて彼の瞳をじっと見た。

「だけど、覚えていて欲しい。と言うのは傲慢かな……」

私を映した青灰色の瞳が揺らいだ。

紡がれた言葉は私に聞かせる言葉と言うよりも、彼の独白のようであつた。

何を、とも誰を、とも言わない。だけど、それはまるで……。

「夏目さん」

何でそんな事を言うのですか？

続く言葉は空気に溶けて、私は彼の名前を呼んだだけだった。

13話

透明なガラス瓶の中でカラカラ流れる。

白、ピンク、青、緑、黄色。

夏目さんに貰った金平糖を家に帰って早速ガラス瓶に詰めた。

小さな瓶の中で甘い星が鳴る。

こうして眺めていると、本当に星の欠片のように綺麗で食べ物ではないみたいだ。

——カタチに残るモノより、溶けてなくなった方がいいだろう。

何故、彼はそんな事を言ったのだろ。形を残したくはない理由は何？

——だけど、覚えていて欲しい。

何故、そんな悲しい瞳をするのに曖昧な感情しか言葉に乗せてくれないの？

「分からないよ。……そんなの」

目を閉じてベットに倒れ込む。

思えば、彼と過ごした思い出はいつも美しく、しかし形として残る物は何もないかもしれない。

四季折々の花と一緒に見た。初めて立葵の本当の花を見た。

夏には蛍を捕まえてそと掌に小さな光を乗せてくれた。

古本屋の縁側で花火をした。焼き芋もした。大きな雪だるまを作った。

思い出はたくさんで、毎年毎年美しくも鮮明に思い出せる。

だけど、それだけだ。

もし、夏目さんが忽然と消えてしまったとしたら。

私のこの手には何が残る？美しいばかりの思い出だけが私を支えて

くれるのか。

否。夏目さんと過ごした10年間と少し、彼は私の生活の一部となつてしまっている。

私の世界は彼によつて彩られていると言つても過言ではない。

白百合事件の一件で初めて夏目さんを失うかもしれないという不安に苛まれた。

本当に胸が押しつぶされた。

血が流れる音を初めて感じるほど、冗談ではなく私の心臓は壊れそうになった。

—— 僕が、葵ちゃんを置いて何処に行くというんだい？

本当に？ だけど、夏目さん。私は与えられるばかりで、貴方に何一つとしてあげることができません。

きつと、貴方は私に愛想を尽かして行つてしまふのでしょうか？

だって、私と夏目さんは余りに不確かだ。

何も、何一つとして彼と私を繋いでいる確かな物などない。

すべて私の一方通行。

不安は降り積もるばかりで、それを止める術を私は知らない。

深く溜息をついてからベットを起きあがる。

カラリとなる金平糖の瓶を大切に机の上に移動させてから学校バツクを取り出した。

椎名君から渡されたノート。

何の変哲もない大学ノートだった。

机に寄りかかりながら、パラパラと捲つて驚いた。

これは…

一枚目のページに戻る。“月影”そう書いてあつた。

綺麗で少し右肩上がりの字。椎名君の文字だ。

それは、物語だった。苦悩を含んだ主人公の物語。

あの言葉の少ない椎名君に、こんなにも豊かで熱い言葉が潜んでいた事に驚いた。

私は兄の「飯だ―」の声も耳に入らぬほど、その物語に没頭していた。

「休み…」

私はショックで呆然と呟いた。

昨日一晩で読んだ椎名君が書いた物語をすっかり読み終え、興奮冷めやらぬ内に椎名君に感想とお礼を言いたかったのに、彼の欠席というオチ。

斜め前方の空席をこれほど恨めしく思ったことはない。

私は、この物語についていち早く椎名君に言いたいことがあった。

主人公である、名家に生まれた一人息子のお話。

月に見せられながら、家を裏切れないでいる男。

その描写はとてもしアルで男の苦悩と困惑が見えるようだった。

ただ、最後がとても疑問だ。男がどうなってしまったのか明確に表記されてない。

その終わりは、無理やり叩き切られたラストのように思えてならなかったのである。

何故、椎名君はこんな終結を書いたのか。

ただ知りたかった。

なのに、休みだもんな…。

朝のSHが終わって担任の中山田先生こと中センに椎名君の欠席の理由を尋ねに行った。

「中セン。椎名君、今日どうかしたの？」

「笹野か。何だ椎名に用事でもあったか」

「あるにはあるけど、それより心配だし」

「お前らそんなに仲良かったか？」

ニヤリと嫌な笑顔をを向けてくる中センを一睨みして早く教えろと促した。

これだから下世話なオッサンは嫌いだ。教師のくせに無精髭なんかはやしおって。

「椎名は大事な家の用だとよ」

「身内に不幸でもあったの？」

「いや、あいつの家は特殊だから。てか椎名はよく家の用事で休んでんだろ？」

「……」

同級生として過ごして早半年以上、今更ながらに気付く事実。

嗚呼、私って、そんなに周りが見えていなかったのか。
今更ながら凹む。

「でも、本当に珍しいよなあ？」

名簿で肩をトントン叩きながら、中センは私をまじまじと見やった。
何のことを言っているのか分からず首を傾げる。

「お前、クラスの奴らとはそれなりに仲良くしてるけど深入りしないだろ？」

言われてギクリとする。

「どっか、冷めてるって言うのか、半分違う世界に置いてきてるって言うか…。欠席した奴がいて俺に聞きに来るなんて今までなかったもんな。椎名は椎名で不思議な奴だが、ま心配出来る奴ができたのはいい傾向だ」

名簿で軽く私の肩を叩くと中センは教室を去って行った。

私は予鈴のチャイムが鳴るまでその場から動くことが出来なかった。その通りだった。

中センはよく生徒を見ている。

休憩時間やお昼に喋る友達はいても、放課後を共にしたり休日遊びに出かけるような関係にはならない。私がそれをしようとしなかったらだ。

私にとって学校生活は重要ではなかった。

昔から大切なのは夏目さんの方で、優先するのは夏目さんだった。

他の人に夏目さんの事を話したいとも思わなかった。

他の世界に半分…。

私の半分以上を占めるのは夏目さん？

今までそれで良いと、それを崩すつもりはないと思っていたのに、人に言われて初めてその不自然さに気付いた。

私は、このままでいいのだろうか。

14話

月に行きたいだなんて馬鹿みたいだと思うかい？

そう、僕は夜にしか輝けないこの月が酷く愛おしいよ。

だけどさ、そんなこと叶わないから言えることさ。

馬鹿みたいで、叶わない。だから言えるんだよ。

何度読み返しても、それは不思議な終わり方だと思う。

私は人の気配の薄い図書室で椎名君のノートを開いたり閉じたりを繰り返した。

いつもに増して肌寒さが身にこたえるのは何故だろうか。

私にとっての当たり前が、するりと指先を通り過ぎていく。

足元がぐらついて不明瞭な不安が押し寄せる。

私の常識は私以外に通用しない。それって当たり前で、すごく怖い事だと思った。

夏目さん中心の生活。夏目さんを軸にぐるぐる回る私。

太陽を失った地球はいつたいていどうなるのか。

答えは容易く、暗く沈む私の心に滑り込んで来る。

ぱらり、ぱらりとページを捲る一方で、私の頭はすっかり中センの言葉に囚われてしまっていた。

「おい、下校時刻だ」

人の気配が少ないとは思っていたが、もうすっかり下校時刻になってしまっていたらしい。

ハッとノートから顔を上げると、下校時刻を知らせる音楽と気怠気

にドアに手をかけている中センが意識に滑り込んできた。

「何で中センが？司書さんか図書委員の人は？」

「押しつけられた。」

迷惑そうな顔をして手に持った鍵を見せつけてくる。

そんな、ぶっきら棒な仕草が中センらしかった。

「いつもは、椎名が大体最後までしてくれるんだが」

「委員じゃない日もですか？」

確かに彼は図書委員だが、担当の日は決まっただけで毎日図書室を管理する必要はないはず。

自然と浮かぶ疑問に首を傾げると中センも何も言わず首を傾けて、私の使用している机に座ると腕を組んで見下ろしてきた。

何と教師らしからぬ行動か。

「お前、今日俺が言ったこと気にしてるだろ」

覗きこまれるように見られてハッと息を飲んだ。

如何やら、粗野な言動に似合わず彼は本当に良く生徒を見ている。

先生の鏡だよ…あんた。

私は、無言で苦笑して見せた。

こうやって自分の心理に介入されることに慣れていないし苦手なのだ。

「お前と椎名は全く逆だな」

「え？」

「だけど、似ている所もある」

一々引つかかる言い方をするのに、私の疑問の声には応えてくれる気は無いらしい。

俺様教師め。

仕方がないので黙って聞いていることにした。

ただ、視線が胡乱になってしまうのはご了承…。

「お前、クラスでは飄々とうまくやってるけど、本当はすごい人見知りだ」

中センの観察力に半ば肌寒い物を感じた。それと同時に酷く驚いた。客観的に見たクラスでの私が、飄々としている？それでいて人を引き寄せない…。

私の脳裏には飄々としたあの人が浮かんだ。

「ただ、本当に大事にしたい場所はちゃんとあって、それを壊されないか恐れている」

中センは、まるで占い師のように私に言葉を突きつけた。

私はそれを黙して聞くより術がない。

とても真剣に、とても大切なことを言われていると思う。

身動き一つしてしまえば何か聞き落としてしまいそうなピリピリした緊張が体を駆け巡った。

「だがな。視野が狭い。お前らはまだ若い。」

どんな事を言われるかと思ったら……。思わず肩透しをくらった気

分だ。

「……ま。中センよりは若いでしょう」

私が言うと、中センはフンと鼻で笑った。

私の直接的な嫌味も彼には痛くも痒くもないという様子である。

「一つのモノを追い求めるのもいいが、もっと沢山選択肢はある。一つに拘る必要はない。特別なモノが一つなんて誰が決めた？」

中センは何処か遠くを見つめるように言葉を漏らした。

下校時刻を知らせる物悲しいメロディーと相まって、気怠い苦味がそこにあつた。

「唯ひとつを決めるのは、もっと人生の最後でいい。アイデンティティも確立してないお前らが人生保守に回ってどうする。もっと手当たり次第がむしゃらに生きる。自分の生きやすい場所を沢山作れ。」

生きやすい場所…？

「宝箱はいくらあつたっていいだろ？」

にやりと笑う中センはどう見ても悪人面の無精髭なのに、その口から紡がれる言葉はまるで無邪気に輝いていた。

「変態には気を付けて帰れよ」

「“先生が送っていいこう”とか言ってよ。」

「甘えんな。俺の愛車に乗れるのは20からって決まってるだよ」

「20禁!？」

すっかり元のテンションで会話をしながら、私と中センは図書室を出た。

はつきり言ってこんな信用に欠ける担任願い下げだ。

だけど、悔しいけど。本当に認めたくないけど。

今日話しをして中センもやっぱり先生なんだなって思った。

15話

「……」

その光景は本当に奇妙だった。

人というのは、奇妙なものに出くわすと、動作を停止してしまうらしい。

私は、その人物を見た瞬間すっかり目が離せなくなった。

くそう。中センが送ってくれないからいけないんだ。

変態ではないけれど、奇妙さは同等だと思う…。

「あの…？何してるんですか？」

暫しの逡巡の後、自販機の前で何やら格闘しているその人に話しかけた。

自販機に向かってブツブツワタワタいったい何事か。

「何って、小銭が…っって、女…！」

振り返ったその人は、数日前出会った第一印象最悪男でした。

女で…。

半ば呆れて、目の前の挙動不審な男を見る。

「ええ、生物学的に女16年、固有名笹野葵です。偶然ですわね男！」

ふはは、と不敵に笑って言ってやる。

腰に手を当てて仁王立ちだ。

有志さんは、少しだけ私に焦点を合わせてきた。多少へっぴり腰ではあるが…。

何処か検分するような眼差し。
しばし、意味のない見つめ合いをした。

「……………。君にはあまり女を感じないな」

「…は？ケンカ売ってんですか！？」

「君、私に惚れたりしない？」

「惚れるか！！」

何処に惚れる要素があると言っのか！
間違っても惚れない。

世界に男が有志さん一人だけでも惚れない。
思いきり突っぱねると、有志さんはホッとしたように笑った。

「そうか、ならいい。極力、傍に寄りさえしなければ会話はクリア
できる」

「クリアで……。何かが解決したようですが、私は全く不条理な気
持ちで一杯です」

所々引っかかるが、取りあえず会話対象者になり得たらしい。
嬉しいやら、微妙やら……。

「で、先ほどから何を？」

「コーヒーを買いいたい」

「？」

有志さんは、無言で私に掌を差し出した。

「丁度10円足りない」

暮れかかった公園で、隣のベンチに足を組んで不遜に腰掛ける男を横目で眺めた。

もう、時期的に寒いせいか公園に子どもの姿はなく、何処か閑散とした雰囲気だった。

この寒い夕方に、私はいったい何をしているのだろう。
思わず深い溜息が出る。

「……ついこの間まで私のことあからさまに嫌がってたくせに、いきなり図々しい人ですね」

「10円位で、愚痴愚痴と君は……狭量だと良く言われるんじゃない？」

「態度の問題ですよ！もつと謙虚に頼むものです。日本人の嗜みです！」

「海外生活が長いからね」

「ばっ人間性の問題です」

思わず馬鹿って言いそうになってしまった。いや、言ってしまうば良かった。

くそう。私の良心め!!

饒舌に言葉を返してくる遙か隣の人は、返す返すイラツとくる性格だ。

「大体、何で私の隣のベンチなんですか！会話するのに声張るの辛いですけど！」

普通に二人座れるベンチだ。一つに座ればいいじゃないか！

「ふん。この距離が限界域なんだから仕方ないだろう。それに、私は君に共にいてくれと頼んだ覚えはないし」

「くっ……寒い日に自販機の“あつたかい”の文字を見たら飲みたい衝動に駆られるんです！」

「君の衝動なんかどうでもいいよ」

プイッと顔を背ける男に、私は寒さではない震えが沸き起こった。これが世に言う武者震いという奴なのだろうか…。

会話が成立したらしたで、なんてムカツク男んだ。取りあえず手の中のアツかいココアで気持ちを落ち着かせるべく、そのプルトップに手をかけた。

このぽかぽかの物を体に取り入れて、さつさと家に帰ってやる！プシュッと開けた時、ふと頭上が陰る。

「……何ですか？」

「……」

私は、さつさか飲んで帰りたいんですが…。

不機嫌そうな顔をした有志さんは、なるべく私に近寄らない距離から自分の缶コーヒーを差し出していた。

取りあえずココアを脇に置いて、訝しがりながらもそれを受け取る。

「何？くれるんですか？」

「誰があげるか。開けてくれ」

は！？

「馬鹿俺様ナルシー」

あ、良心の崩壊。しかも息継ぎなし。よく言った私。

「…君。何だそれは呪文か？」

しかし伝わってないー！！！！

「ええ、呪文ですよ。自分でプルトップも開けない人間は呪われてしまえ」

につこり笑いながらブシュリと力を込めて缶コーヒーを開けて、どうぞ？と黒い笑みと共に手渡す。

「不気味な…。すまない。極力指には気を使ってるんだ」

思いがけずしおらしい様子で受け取る有志さんに、おや？と思う。そして受け取るその手の繊細な美しさに、嗚呼と納得した。

「なるほど、ピアノですか。流石徹底していますね。日頃からそんなに気を使うものなんですか？」

芸術家も大変そうですねと聞くと、彼は少し苦く笑った。

「皆がそんな訳ではないけど…。私はね。出来得る限りの努力は惜しみたくはないんだ。人よりも持っていないモノが多いから」

コーヒーが若干熱いのか、繊細な指先でジャケットの胸ポケットからハンカチを取り出す様子は、さながらマジシャンのようだとボンヤリ思う。

「持っていないモノですか？」

「そう、才能とか…さ」

どういう風の吹きまわしか、有志さんは私の座るベンチの端にそのまま腰かけた。

あくまで私から随分離れた端っこだが…。

「兄は、有志さんのこと大分褒めていましたよ。“あいつの演奏を聴いて惚れない女性はいない”的に」

私の発言に彼は、随分と顔を顰めた。

「…昔からそうだった。私が弾くと香水臭くてケバケバしい女性たちが、猪の如く襲ってくる…。留学先でコンサートを開いたときも…。」

鳥肌が立ったのか少し身震いしている。

あ、何となく女性恐怖症の理由が見えてきた…。

「で、でもそれは有志さんの演奏の虜になったってことで、れっきとした才能じゃ…」

「違う。悲しい事にね、彼女たちは、私のルックスに寄ってくるだけだ」

発言はまるでナルシストなのに、冷たく言い切る口調は重々しかった。

確かに、小松親分と違って有志さんは、たれ目に緩く曲線を描く柔らかそうな茶色の髪で少し甘いルックスだ。

彼が、ピアノを弾く姿は王子様のようかもしれない。

「私の演奏中に女性たちが騒ぎ花を投げて来た事があった。演奏中にだ。あの時は本当に絶望した。ああ、自分はサーカスの動物のようだ。本当の意味で自分の演奏は聞く人に届いていないのか、と」

何を言っているかわからず、私はただ彼を見た。

フーと溜息を付きながら頂垂れている様子は、まるで考える人のように苦悩に満ち溢れている。

——人は受け入れられないことを知った時、とても絶望すると思わない？

何故か、いつかの夏目さんの言葉とガラス玉のような青灰色の瞳が掠めた。

ギョツと心が音を立てる。

あの時もそう、結局私は何も言えないから…。

「…才能があるのは夏目さんのような人だろう」

有志さんが何の前触れもなく呟いて、まるで心を読まれたかのように

で吃驚した。

「夏目さん？」

私が驚いた顔をして聞くと、何故か有志さんも少しだけ驚いたような顔をして私をチラと見た。

だがそれもすぐ消え、「そ」と頷く。

あの日、ピアノを弾いた夏目さん。

とても、すごい演奏だった。

「だけど、彼の演奏はただの音。何も感情が籠っていないね。彼は自ら其れを掴もうとしないからさ」

嫌味ではない本当に素直な感情を込めて有志さんは言った。

「ね、才能ってなんだろう。有名な音楽家たちは、絶対音感なんてものが潜在的にある人もいるけど、幼い頃から音楽漬の環境で育つ。それは持っている物というよりは与えられた物だと思わないかな？」

私は有志さんの言う意味が良く分からなくて少し首を傾げた。
有志さん aussi 思い付いたことを矢次に吐き出して居るようで、何処か取り留めのない自分の言葉に焦れっただそうにしている。

「ん〜。つまりはさ、私の家は音楽家の家系というわけではないし、絶対音感を持っているでもなく、自分の伝えたい想いを曲で伝えることも出来ない未熟者だが…」

彼はそこまで早口でまくし立てると、すくつと立ち上がった。

「ピアノに関しての努力は、惜しまない。いくらでも少しのことで

も怠らない」

はつきりとした言葉は自分の心に刻み込んでいるかのようなうだった。私は、その後ろ姿を見つめる。

その向こうの空に薄ら月が昇っている。

「馬鹿みたいで叶わないことでも？」

言葉が零れた。正に意識する間もなく。ついつい口を伝って落ちたモノだった。

椎名君の小説の主人公の言葉。

有志さんは、肩越しに私を振り返る。

「馬鹿みたいで叶わないなら、努力する。そう出来得る限りいくらでも」

その言葉は酷く私の心に響いた。

16話

「実はさ、私は半ば自棄になって日本に帰って来たんだ」

ガコンと、

空になった空き缶が、綺麗な曲線を描いてゴミカゴに入る。

私も狙いを定めて投げたが、見事に外して有志さんに鼻で笑われる。くっ。

横目で睨んだら彼の姿はそこになく、いつの間にか外れてゴミカゴの横に転がった空き缶を綺麗な動作で拾って捨ててくれていた。まさかそんな優しさを見せられるとは…。意外過ぎてついそっけなく、どうもと言ったら、10円の借りは返したと言われた。

意外と律儀な人…なのか？

「どうしても越えられない壁とか、他人を妬んだりして、腐って、弾くのが嫌になった。半ばやけくそで日本に帰った。そしたら漣からすごい曲が聞こえてきた」

示し合わせた訳でもなく、自然と二人で公園を後にし、家路を歩いていると、隣から脈絡もなく言葉が流れてきた。少し高い位置にある彼を見上げれば、その横顔は真っ直ぐ前を見つめている。

「ああ、すごい才能だと思う、小窓から覗くと私より数段ルックスも優れていて人間離れた美貌だ。こんな人も居るものかと思った。どだい自分にはこんな才能はない。いや、だけども。彼の弾き方はどうだろうか？彼の演奏は空っぽだ。私ならそこでクレッシェント…で、何時の間にかまた、純粹に弾きたい気持ちが芽生えた。」

話して聞かせるというより、自問自答のように紡がれる言葉は、と

ても耳障り良く暮れかかる通りに馴染んだ。

相槌さえいらないうことを空気で読み取り、私はただ彼の言葉に耳を傾ける。

不思議に闇の暗さは、人の心を何時もより研ぎ澄まさせ、人をいくらか素直にさせる。

まるで遠かった隣の男が、久々に会った友に話して聞かせるように柔らかに話す。

私は少しだけ頬を緩ませた。

「言わば、彼のお陰で私はピアノへの情熱を取り戻したわけだ」

丁度街頭の明かりの下にたどり着いたとき、ライトアップされた有志さんが、喜劇役者のように肩を竦ませ両掌を掲げておどけて見せる。

照れ隠しのような其の仕草に私は微笑を深めた。

今、初めて有志さんに会った気がした。

何故か少しだけ目を細めて私をじっと見た後、有志さんも口の端を釣り上げて見せた。

「夏目さんは、魔法使いなんです」

打ち解けた空気がそうさせたのか、私は自然に言葉を零した。
今度は、有志さんが私の話に黙って耳を傾ける。

「不貞腐れてるとヒョイって、何でもないよ、大丈夫だよって。私の心を軽くしてくれるんです」

——立ち葵の葵だね。太陽に向かって真っすぐ真っ直ぐ伸びるんだ。

初めて会った時からそう。

「だから、誰にも渡したくなかったし、触れられなくなかった。変わらないものであって欲しかったし、事実変わらないものだった」

聖域みたいに侵されたくはない場所だった。

「だけど、最近私おかしくて。」

夏目さんが、居なくなるような、そんな不安から始まった。

「永遠」というものの不確かさ。

椎名君の存在が、私の中で大きくなる。その事の漠然とした心許なさ。

夏目さんに対する、依存と執着の異常さ。

夏目さんが、こうして私以外の人に与える影響。誇らしいと思う反面、私だけの魔法使いでいて欲しいと思う。

何故か焦る様な口調で話してしまう。

有志さんに話す意味だとか、何でこんな話しているのかとか、考える余裕もなかった。

私はモヤモヤとした感情を吐き出すように闇に溶かした。

「夏目さんは、変だし格好もおかしいし正直わけわかんないし、兄さんは妖怪呼ばわりだし、そんな訳の分かんない人に私の生活の大半は……」

「ふん……そうか。君は彼を愛しているわけか」

……。

「は！？あっあい？」

ぎよつとして見上げると、顎に手をあて思案するような気障ったらしいポーズで、私を見下ろしている眼とかち合った。

「だってそうじゃないか。彼のこと分からない。独占したい。彼のことを考えると……てやつだ。」

何故か不満氣に言う有志さんに私は酸欠の金魚のように口をパクパクさせた。

「くっ。面白い顔」

人の顔を指差しちゃいけませんっ！

「って。そうじゃなくて！違くて」

確かに初恋の相手だけど。

そうじゃなくて！

何か、もう何か！そんな艶っぽい話じゃなくって。

そうじゃなくてを繰り返す私を横目に有志さんは「私はこっちの道だ」と勝手に話を切り上げてしまった。

「君には色々話せてスッキリした。」

「~~~~。」

清々しく言われても、こっちはモヤモヤしっ放しですけど。

自分だけすつきりするなんてズルイ！

恨めしく睨みつけると、今まで見せたことも無いような笑顔を返された。

な、何だ。

「私は時機に向こうへ戻ることになるだろうが。その前に君には是非ピアノを聞いて欲しい」

「…それは、是非」

思いがけず友好的に言われて、睨みつけるのを辞め、気の抜けたような返事を返す。

何が可笑しいのか私を見ながら笑みを深める有志さん。

「私の演奏を聴いたら惚れてしまうかもね」

「はあ？」

ニンマリと言われても意味わからん。

惚れるなど言ったのは何処のどいつだ。

態と耳の遠いお年寄りのようなジェスチャーで聞き返す。

「ま、君はまだ若いし、視野は広く持てってね。じゃ。その時は是非、秀と夏目さんも一緒に」

そう言うとは彼は軽い足取りで去って行った。

私は啞然と彼の背中を見送りながら思う…。

……い、意味わからん。

17話

モクモク…

モクモク…

「……」

モクモク…

「…おい？」

モクモクモクモク…

「おい！葵！」

大声で呼ばれて、口いっぱいにご飯を頬張ったまま顔を上げた。
そこには、今日の夕飯であるブリ大根と、不審気な兄の顔があった。

「お前、さつきから白いご飯ばっか食べて…ッ。俺のブリ大根に不満があるならあると、はっきり言えばいいじゃないかつっ！」

嫌がらせみたいに白米ばっか食うな！と何故か涙目の兄が私に詰め寄ってきた。

すっかり物思いに耽り、おかずの存在を忘れて無心で米を咀嚼していただけだったんだけど、兄にはそうは見えなかったらしい。
慌てて、ブリ大根に箸を伸ばす。

「べ、別に嫌いなわけじゃないんだからね！」

ツンデレサービス付きだ。

うん。最高に美味だぞ。自信を持って兄よ！

G Jとグツと親指を立ててみせる。

「…………おまえ」

な、何故憐憫の眼差しで私を見る。

何時もの冴え渡る突っ込みはどうした！

「お前、今日は何時にも増して可笑しいぞ」

大体、ツンデレはそうじゃなくてもつとこう……。とツンデレに妙な拘りを見せつつ、私に“どうした？”と視線で問いかけてくる兄。私は、箸を一旦御膳に戻して、膝に手を置いた。

「ん。よく分かんない」

シヨンボリと呟いた私に、兄も箸を置いてフーと大きな溜息を付く。

「どうせ、また妖怪のことだろ。今日も古本屋に寄って来たんだろ？何かされたか？」

確かに、夏目さんのこともあるけど、それだけじゃなくって……。うん。

ホントに良く分からないんだ自分でも。

中センに言われた言葉とか、有志さんに言われた言葉とか。

——視野が狭い。お前らはまだ若い。

——君はまだ若いし、視野は広く持てってね。

何か二人ともに限りなく近い事を言われてるんだよなあ。

若いとか、視野とか何だ。意味わからん。

具体的な考察と対策を教えろって話だよね！こんちくしょうめ！

「んーや。今日は夏目さんの所には行つてないよ」

「え？」

「あ、有志さんが向こうに戻る前にピアノを聞かせてくれるって。それで兄さんも一緒に是非って言っていたよ」

「は？おまつ」

何故か、世にも恐ろしげな顔で指差される。
指、わなわなしてるけど…大丈夫？

「妖怪の所に行かず、有志といたのか！？」

「うん」

「それで、有志にピアノを聞いて欲しいと言われたと！？」

「うん」

何故か鬼気迫る様子で両肩を掴まれ問われる。
ちょ…近い近い。

若干引いていると今度は、いやまさか…。とか、あの有志に限って…。

とか訳のわからない事をブツブツ言いだした。

「お前は、変なのばかり引っかけおって…」

「はい？」

本当に意味分らないんですけど？
おつて、つて何だ。おつてつて…。

「お前、有志に会ったから、あいつの所に行けなかった訳じゃない
だろ」

兄が襟足の所をかきながら、やれやれといった様子で言った。

暗に、夏目さんの所には行かなかった理由があるんだろ？と聞いている。

悪い事をした訳じゃないのに、何故か責められているような心地になった。

思わず、小さくなって答える。

「何か、良く分からない」

私は、何度この台詞を言ったのだろう。

言うたびに暗示にでもかけられるように、どんどん心の霧が濃くなつていく気がする。

兄がまた、大きく溜息をついた。

「お前も何か思う処があるんだろうし、俺もとやかく言う気はない。」

だがなあ、と兄は続けた。

「人の気持ちは変わる。だが変わったらいけねえこともあるだろ。
お前はあいつのことを何か特別な物のように慕っているが、あいつ
も一人の心を持った男だつてことを忘れたらいかなだろ」

兄の言葉は、忠告のような暗示のような響きで私の心に問いかけて来たけど、やっぱり私はその言葉たちを上手く飲み込むことが出来なくて、消化不良にでもなったかのようにだった。

布団の中、歯に良くないなと思いながら一粒だけ、と桃色の星の欠片を口に入れて転がす。

夏目さんが、一人の男？

その言葉は生々しく私の頭の中に残った。

考れば、あの飄々とした人は私のことをどう思っているのだろうか。毎日古本屋に行っている訳では無いけれど、行かない日は、少しは気にしてくれているのかな？

金平糖の甘さが溶け行つて、泣きたくなくなるような切なさ胸を襲う。一杯一杯の心は何処に逃がせばいい。

良く分からない、そうじゃなくて。

私は、考えたくないだけなのかな。

今まで通りを覆すのは、とても勇気があることだから。

ごろり、と寝返りを打った。

返せないままの椎名君の小説。

明日は、彼は学校に来るだろうか。

その事を考えたら、少し心が楽になってくる。学校であつたら、おはようってあいさつして、休んで心配だったよって言つて、それから、小説の感想を言おう。

無表情な彼はどんな反応を返すだろうか。

やっぱり、鉄仮面のままかな？

それとも、何時かみたいになんとだけ笑ってくれるだろうか。

そんな事を思ううちに、私の瞼は重みを増して、眠りの世界へと誘われていった。

―葵、駄目だ。あいつに近づくなよ。

どうして？とつてもきれいなよ。葵の王子様なの。

―王子様なんかじゃないよ。あいつは――…だから葵の王子様にはなれないよ。な？だからもう行っちゃ駄目だよ？

どうして？どうしてお兄はいじわる言うの？葵もつとたくさん会いにいきたいの。

―…葵、きつと何時か悲しむ時がくるよ。

いつかなんてわかんないもん。

だったら悲しくないようにたくさんみておくの。

―……馬鹿だな、葵。

そんなのお前が辛くなるだけなのに……。馬鹿だな……。

18話

懐かしい夢を見た気がした。

肝心な事が抜けおちた妙に気になる内容だったはずなのに、朝食を食べ終わる頃にはもう忘れてしまっていた。

ま、夢なんてそんなものだ。

「椎名君！」

「笹野さん……おは、よう？」

「うん。もうお昼だけだね」

椎名君は、今朝もその姿を現さなかった。

今日も休みなのか、と少々落ち込んでいたら、彼は昼休みにひよいとやって来たのだ。

待ち詫びていた姿だけに、開きかけたお弁当は其の儘に彼の傍に駆け寄った。

「……」

「あ、小せ……あつと」

彼の書いた小説のことをすぐにも話したかったけど、何故か教室中の視線を集めてるっぽいし、言いふらされていい話でもないだろう。

「えっと、椎名君お昼まだでしょ？一緒に食べない？えっと、ふ、二人きりになれるところ、とか…」

最後の台詞がまずかったのだろう、まさにドヨッと教室内がどよめいた。

あばば。これじゃ告白じゃん。これから、告白しますよ！的な。

おとめ！再来！

変にカミカミなのがさらに誤解を助長させたようだ。

ちがうぞ。みんな！日頃の私を思い出して！ワタシ、そんなキャラチガウ！

「えっと、そうじゃなくていや、二人きりになりたいのはそうだけど…」

「……」

誰に言うでもなくシドロモドロしていると、椎名君は然して気にする様子もなく、ゆっくりと無言で頷いた。

椎名君が教室の扉近くで待ってくれている間、急いでお弁当を包みなおし鞆に突っ込む。

一緒に食べるはずだった友達数数人に断りを入れて教室を出た。

何故か生暖かい笑顔で「頑張れ」とか言われたのは、気にしない。

いやだわ、この年頃の人たちは何でもかんでも色恋沙汰に結び付けようとして！

アイアムクリーン。

ウィーアーフレンズ！

モクモク
モクモク

「……」
「……」

椎名君と連れだってやってきたのが、裏庭。

もともと饒舌ではない椎名君だから、私が黙ってしまうと本当に無言だ。

何で喋らないかって。

寒いんです。今11月中旬です。

確かに二人きりになるには絶好のスポットでしょう。

何てったって人っ子一人いないからね！この寒さじゃあね！

寒さのせいで上手く動かない指先を叱責しながら卵焼きを口に運ぶ。横に座る椎名君を見る。

彼は、寒さも感じないのでしょいか。鉄仮面最強…。

というより、鉄仮面改めロボコップと呼ぶべきでしょうか。

平然と背筋を伸ばし、綺麗な動作で箸を口に運ぶ椎名君を啞然と眺めながら、自然と彼の箸が向かうお弁当箱へと視線を運ぶ。

「って重箱！？」

思わず、声に出してしまった。

何故、今まで気付かなかったのか。何処の料亭の仕出し弁当かとい

う豪華絢爛な3段重箱が彼の膝にずっしりと乗っているのだ。

「す、すごいね。気合入ってるね…椎名君のお母さん」

私は自然と自分の膝に乗ったマイ弁当を眺める。

昨日の残りのブリ大根とか煮物とか、おいしいけど如何せん花がない…茶色い。

「…」

「…?」

がつくりと肩を落とす私を、首を傾げながら見る椎名君。そして、ポツリと言う。

「…田中さんが」

「ええ!?!」

た、田中さん?今、お弁当の話してたのに田中さん?それっきり黙ってしまふ椎名君。

ご、ごめん読めない。読み取れない。

あ、もしや!

「私、笹野」

「…うん」

「……」

「……」

私は自分の顔を指差したままフリーズした。
ち、違ったー！！

確かに、呼び間違いとかしないよね。椎名君はね！私は昔友達を“おかあさん”って呼んじやった事はあるけどね。他意もなく。あの時の居た堪れなさと言ったら…。

椎名君はぱちぱち数回瞬きして、スと私のお弁当を指差した。

「笹野さんが？」

「え？これ？うん。兄が」

椎名君はコクリと頷いて自分の重箱を見下ろす。

「これ、は田中さんが」

ああ読めた。椎名君のお弁当はお母さんではなく、どうやら田中さんなる方のお手製らしい。

はて、しかし田中さんとは誰ぞ？

「た、田中さんとは？」

「家政婦」

さらりと無感情に言っただけの椎名君。

私は再びフリーズしてしまった。ヤバイ身分の壁が此処に。

椎名君は何故か再び私の茶色いお弁当をじっと見つめている。
いや、そんな見つめないでください。

兄には悪いけど、田中さんの煌びやかなお重と比べられるとホント庶民丸出しなんです。

「それ」

「はは、茶色いなんて言わせないぞ」

事実だけど。事実だからこそ。

くそう。こんなことなら缶詰さくらんぼでも添えときゃ良かった。今日に限って炊き込みご飯なのがまたいかん。プリーズ彩。

「愛があるね」

「…ぐは。…げほごほ」

色々な意味で咽てしまった。真顔で愛とか言っちゃう椎名君にも原因はあるが、兄のひよこエプロン姿が脳裏に掠めたせいもある。激しく咽る私に椎名君は無言で背中をさすってくれた。

うう。ありがと…。

「あ、愛…。そ、うかな？」

「うん」

素直に頷かれると更に恥ずかしくなる。

他の女の子みたいに可愛くないし、お洒落でもないお弁当。中学生のころは本当に恥ずかしく思っていた。

だけど、冷凍食品とか既製品を一切使っていないこととか。

朝早く寒い台所で、卵焼きを焼いてくれている兄の背中とか。

朝の弱い私に、文句も言わず手渡してくれるお弁当の温かな重みと

か。

考えると、文句なんて言えるはずもなく…。
ほんのりと何とも言えない温かさが込上げる。

椎名君は私がお弁当を卑下していることを分かって、そう言
ってくれたのだろう。

言葉少ななのに、ストレートに物を言う。

短すぎて分からないこともある。

だけど、回りくどいよりずっと、ダイレクトに入ってくるものもある。

椎名君はすごいな。

私も、そんな風に伝えられたらいいのに。

「椎名君は、いろんな事が見えるんだね」

何時の間にか食べ終わったらしい重箱を丁寧に重ねながら、彼は私
を見る。

その、無表情の中にあるレンズの奥の瞳は吸い込まれそうなぐらい
深かった。

椎名君の小説を見て、まず思ったこと。

冷たい無表情で端的な言葉の彼だけど、こんなにも熱く、伝えたい
言葉たちが有るのだと。

そして、それを表現する術を彼は知っている。
だけど。

「だけど、とても誤解されやすいね。本当に、辛い時、一人で立
つとするね」

勘違いかもしれない。椎名君のことをちゃんと知っている訳ではな

い。

だけど、普段、ピシツと背筋の伸びた背中とか、クラスの人に一目置かれていることとか。

私も勝手に近寄り難いなんて思っていた一人ではあるんだけど。話して、近付いて思ったんだ。

何も感じない人間なんていない。

「辛い事があるの？」

彼の小説“月影”の主人公の葛藤、苦悩を読んでいると、これは彼自身のことなのではないのかと。

「特別」だと言って渡してくれた小説には、本当に特別な彼の言葉に出来ない言葉たちがたくさん詰まっています。

彼は、私に近付いてくれたのだと思った。

夏目さん中心で、深い人間関係を学校という場で求めなかった私でも心が動かされた。

だから、立ち入ろうと思った。

近付きたいと思ったのだ。

椎名君は無言だった。

無言でじつと私を見る。

まるで真意を確かめるように。

私もその目をじつと見返した。

「主人公は、どっちを選んだら幸せなのだと思う？」

スイと視線を私から裏庭の木々に移して椎名君が問う。

其れはきつと椎名君の書いた小説の主人公のことだろう。叶うことのない夢を追うか。

家を継いで定められた道に行くか。

無理やり断ち切られたかのような物語の終わりは、彼にも答えが見いだせなかったからなのだろう。

けれど、それを私が、どう答えることが出来る？

事実それが彼の悩んでいることならば、安易に答えてはいけない気がした。

私はどちらとも答えることが出来ず、椎名君の横顔を見詰める。

「定められた道だと思うと」

冷たい風が吹いて、落ち葉がガサリと音を立てる。

こんな風に言葉を連ねる彼を初めて見る。

だけど短い言葉より、それは何処か冷めていていつそ寒々しい。追い風に舞う髪の間隙から、椎名君の険しい顔が見える。

「すべてがくすむ」

ああ、私はやはり何も言えないのだ。

此方に戻ることのない視線に、私は悲しくなった。

19話

中センは言った。

椎名君と私が似ていると。

だけど、そうではない。と私は思う。

中センは恐らく私たちの人に対する“壁”のことを言ったのだと思う。

事実、私は深い人間関係というものをあまり求めた事はない。

その場凌ぎの当たり障りのないすべらかな人間関係は、トラブルを引き寄せず上手く渡っていくのには丁度いい。

立ち入っていい所、そうではないところ。そこを踏まえての慎重な会話。

私も立ち入らないから、あなたたちも立ち入らないでと。

そういうシグナルを送って、私は守りたかったのだ。

夏目さんという聖域を。

だけど、椎名君は自分の内なる世界こそが彼自身の領域で。

しかし彼はもつと出たがっているような気がしてならないのだ。

壁を作っているのは彼自身ではなく、彼の周りの環境がそうさせているような気がしたんだ。

けれど臆病な私は結局踏み入ることを戸惑って、彼の壁を壊すことのできない傍観者に甘んじてしまう。

それがとても歯がゆく、酷く悲しい。

何も言えなくなった私に椎名君は、少し笑った。

そして、初めて自分の書いたものを人に見せたので照れてしまうというような事を端的に戻った口調でそう告げた。

彼は氣を使ってくれたのか、それとも何も助言出来ない私に諦めてしまったのか。

そう思うと居た堪れなくて。

私は小説に対する素直な讃辞しか、彼に伝えることが出来なかった。

彼の氣を使うような笑顔。

私が欲しかったのは、それではない。

教室に戻ると、椎名君とはどうなったのかと色々な人に聞かれた。

私は弁解することも出来ず、どう答えたのかもあまり覚えていない。ただ、早く放課後になって欲しいと思った。

早く古本屋さんに行きたい。

夏目さんにあいたい。

昨日訪れなかったただけなのに、とても長い間来なかった気がする。古本屋さんは相も変わらず寂れた外観で、ちつとも変った所など無いのに、その引き戸に手を掛ける時、僅かな緊張を伴った。

引き戸を開けると、少しも変わらない本の匂いと静謐な空間があった。

本棚を抜ける。

ああ、やはり。

何時もの場所に、何時もの姿を見つけて、何の安堵か私の目頭は熱くなる。

蜂蜜色の髪が、頬杖をついた手の甲にさらりとかかつて。

伏せ目がちの瞳に長い睫毛が頬に影を落とす。

まるで完成された絵画のようできて、その甚平姿とページを捲るその長い指の動きが彼を現実のものにする。

私は、時が止まったかのように見とれてしまっていた。

鮮烈に現実から切り離される感覚。

クスクスという甘い笑い声で、私はやっと時間を取り戻す。

「そんなに見つめられると穴が開いてしまいそうだなあ」

本に向けられていた青灰色の瞳が、私を映す。

穏やかで少し間延びした口調に、私は何か言葉を返そうと思うのだけれど言葉が詰まって上手く出てこない。

その様子に夏目さんは、おやおやと笑みを深めて私を手招いてくれる。

よく来たね。そっちは寒いから、こちらにおいで。と。

「夏目さん」

「うん？」

「夏目さん」

何時もの場所に落ち着いて、彼の名前を連呼する私。

彼は手に持った本をパタリと閉じて、ゆるりと微笑んだ。

そして音もなく、するりと私に手を伸ばす。

待ち望んでいた、しなやかな指先が頭を撫でて髪を滑った時、私はやっと落ち着いたように息を吐き出すのだ。

その様子を見て、夏目さんは一層目を細めた。

「葵ちゃんは猫のようだね」

私の頭を撫でながらそんな事を言う夏目さんこそ、その不思議な色の目を細める様子など日向でまどろむ猫のようだと思う。

「そっけなく訪れなくなったかと思うと、こうして甘えてくる」

笑いを含んだその言葉に私はムツとした。

所詮私は、夏目さんにとっては気まぐれに餌をやる野良猫のような存在なのか。

それに、私がそっけなくしている訳はない。

寧ろそっけないのは夏目さんじゃないのか。

不貞腐れた私に夏目さんは言葉を続ける。

「今日は来てくれるだろうかと一喜一憂する僕は、君に振り回されてばかりだよ」

「うそ。夏目さんは、私が居ようが居まいが関係なくせに」

咄嗟に子どものように反論してしまう。

彼は棘のある私の言葉に不快感を現すことなく、ゆっくりと首を傾けた。

「何故？」

「だって、私は何も出来ないから。何にも与えることが出来ないから」

私は視線を床へと漂わせた。

与えられるばかりで、私は何も与えることのできない存在だ。

それは有志さんのことや、椎名君のことでも十分に思い知らされた私には持ち得ない悩みに私は何も言えなくなる。

私よりずっと賢く聡明な人たちに私の言葉の何が役に立つというのか。

そう思うと私は、終ぞ何も言えなくなってしまうのだ。

吐き出す言葉はきつと真実味を帯びない綺麗事に聞こえるだろうか。

落ち着いた声音が頭上から響く。

「与えた事が、与えられた事実になることもあれば、そうではないこともあるのだよ」

私の落ちた視線を引き戻すかのように。

頭を撫でていた手が髪を滑り下りて顎先を持ち上げる。

決して強い力ではないのに逆らえず正面から覗きこまれた。

一瞬で瞳に目を奪われた。

「ある哲学書にこうあった。自我とはつまり他者により成り立つと」

夏目さんは呪文のように言葉を紡ぐ。

「与えるのではない。そこに存在することこそに意味がある。大切なのは、何を与え得るかではなく、どう存在するかだと」

何時もの間延びした口調は影を潜め、謳うように朗々と紡がれる言葉。

「君は自分を卑下するのだろうか」

青灰色に吸い込まれる。

この人の瞳には魔力が込められていそうだ。

「知らぬ内に、多くは受け取られているものさ」

それに、と彼は続ける。

「斯く言う僕も君には随分与えられているよ」

私はその言葉にとっても驚く。

夏目さんに貰ってばかりの私が、何を与えたというのだろう。

視線で問いかけたけれど、夏目さんは瞳の中の光を揺らして私を見るだけだった。

その瞳の意味を私は汲み取ることが出来ない。

はっと、とても近い位置で互いの目を覗き込むようにしている事実にようやく気付いた。

私は、今更にうろたえた。

あからさまに目が泳ぐ。

私の顎に添えた指先が、つと首筋をたどる。

僅かな刺激にびくりと震えた。

「でも君は、僕以外にも与えようとするのだね」

何時もと違う夏目さんの雰囲気呑まれる。

視線さえも絡め取られて。

再び、身動き一つ取れなくなる。

触れられた箇所が、熱を持ったかのように熱い。

「な、つめさ…」

自分のものではないような掠れた声が出た。

夏目さんは何とも言えない微笑をして、私から離れた。

一息に緊張が解ける。

けれど俯いた視線を彼に遣る事は出来なかった。

頬が焼けるように熱い。

20話

―あいつも一人の心を持った男だっことを忘れたらいかなだろ。

兄が言ったその言葉が私の頭に木霊する。

今までにない先ほどの空気は、いったい何だったのだろう。

見たことがない夏目さんの揺れる瞳。

意味深に触れた指先。

離れた距離に安心したと同時に少しの余情があつたのも確かで…。

って何を考えてるんだ私はあ！

あああ。

私は頭を掻き毟って悶え苦しんだ。

「さて、お茶をいれようか」

私がこんなにも動揺しているというのに事の発端である夏目さんはいええ、もう何時も通りの態度だ。

くっ何故された私が恥ずかしがらなければならぬ！

だけど、何時もと同じ夏目さんの態度のおかげで、羞恥も薄れ少し平常心を取り戻すことが出来た。

何時もは夏目さんを制して私がお茶を入れるのだけど、今日は何となく夏目さんに任す。

奥の間に立つ背中を眺めながら、先程気になったことを問いかけた。

「私が夏目さんに、いったい何を与えているのですか？」

私自身、自覚がない。

私の存在することによって彼に与える何か。

すごく興味深いのですが。

「さてね」

筒状になった緑茶の蓋をポンと開けながら夏目さんは言う。

「また、そうやって誤魔化す」

飄々とかわす彼に、私は頬を膨らませた。

「別に誤魔化してなどいないさ」

心外だとばかりに彼は肩をすくませた。

笑い交りなのが、彼の背中からでも見て取れる。

「そういう態度が誤魔化してると言っんです」

湧いたヤカンがピーと音を鳴らした。

カチと止める音と同時に、不意打ちに此方を振り返る夏目さん。

彼の背中に油断していた私は、思いきり膨れ面を見られてしまった。
慌てて口から空気を抜く。

うつ、変な顔見られた。

すました顔を取り繕うけれど、ぱしぱし瞬きが多くなってしまった。

夏目さんはそんな私の様子に頬を緩めた。

「何にも代え難い物をたくさん貰っているよ」

結局、明確な答えはもらえないけど、
その何とも形容し難い、慈しむ様な、
眩し気な微笑が全ての答えの気がして。

まあいいかと。

私は言及するのを諦めたのだった。

「それで、君を悩ます一因は何かな？」

一息ついた後さて、と仕切り直すように夏目さんが問うた。

「私、悩みがあるなんて言いました？」

「ないの？」

「ありますけど…」

何故分かると視線で問いかける。

夏目さんは片眉をあげて事も無さ気に

「立葵の君が訪れた時からしょんぼりして、分からないはずが
ないだろうか？」

と言った。

私は、そんなに頂垂れていたのだろうか。
全くこの人には敵わない。

私は、近日あったことを話した。
勿論、夏目さん自身に対する色んな気持ちは本人に言えるはずが
ないので伏せて。

中センに指摘された他者に対する壁。

椎名君に小説を渡されたこと。

椎名君の小説を読んで、彼自身の悩みを垣間見た事。

私は、それらの相談の何の役にも立たなかったこと。

何か気の利いた助言をしたいけれど、そうできないこと。

一連の話を黙って聞いてくれた夏目さんは机の上に組んだ両の手をトンと置いて言った。

「葵ちゃん。言葉には呪が宿るのだよ」

「しゅ？」

「そう、のろいと書いて」

行き成りの話題に私は瞬く。

「特に断定的に発せられた言葉や、強い意志を持つ言葉、相手の持つ弱い部分に対する指摘は、良くも悪くも言われた者の心を縛る」

文字よりもずっとね。と彼は傍らの本を掲げて見せた。

「君は担任の先生に自分の一面を指摘され、随分動揺したのではない？そして、その事が暫く頭から離れなくなった」

確かにそうだ。

中センに人との壁のことを言われてから、

この数日、その事についてや夏目さんとの距離の在り方について随分考えた。

自分を見つめ直す良い切っ掛けにはなったのだけど。

確かに、私の思考に酷く影響を及ぼしている。

「ホントだ」

「だからね、本来“助言”というものを与えるには、とても重要で慎重に成らなければいけない。葵ちゃんが助言の言葉に悩み、沈黙するのは悪いことではない。寧ろ、賢明だと言いたいね。」

私が一番気にしていた事に彼は賢明だと言ってくれた。

悪いことではない。

酷く悩んでいただけに、その言葉は私の肩の力を抜かせるのに大いに有効的であつた。

眉尻の下がる私に、夏目さんは優しい声で続ける。

「だけどそれが全く正しいとも言えないよ。君は自分の言ノ葉を自らでもって押し込めているけれど、君には君の感じる必要がある。言葉は命の芽吹きにも成り得るものだから、自分の中で殺してしまつては良くない」

では、どうすればいいのだろうか。

私は問いかけるように夏目さんを見る。

夏目さんは、簡単なことだよと言って笑った。

「もとより助言を与えようとしなければいい。君が答えを与える必要はない。葵ちゃんは君が思うままに。そうだね、その椎名君とやらの小説の主人公をどう思うかなど聞かせてやればいい。どう受け取るかは彼次第。どう行動するかも彼次第」

君がそんなに悩む必要はない。と夏目さんは最後に締めくくった。そうか。

私は深読みし過ぎていたのかもしれない。

救う言葉ばかり探して、言葉を失っていたのだ。

目から鱗が落ちるとは、まさにこのことだった。

21話

どうしてだろう。

夏目さんの傍にしていると私は自分をするりと見つけることができる。

安心して自分の気持ちを引き出して、あるべき場所に据えるように。きっと、彼以外の側でそうは出来ないだろう。

だから、きっと彼はいつまでも私の特別。

それでいいではないか。

不意に、そんな言葉が浮かぶ。

夏目さんと居る時の私。

兄と居る時の私

椎名君と居る時の私。

学校の友人と、先生と、小松親分と有志さんと……。

どの時の私も、本当の私で。

どの時の場所も私にとっては特別。

壁などに臆する必要などないではないか。

私は、もっともっとたくさんの人の傍でたくさんの私を見つける。

私が広がる。世界が広がる。

それでいいんだ。それがいい。

今までうだうだと悩んでいた事が霧散して私の心は水を得たように潤った。

夏目さんはやっぱり私の魔法使いだ。

ねえ。今、心がこんなにも軽い。

やっぱり、その青灰色の瞳には魔力でも込められているのでしょうか？

「僕も、その彼が書いたという小説を読みたいものだね」

ぼつりと夏目さんが言った。

流星は無類の本好きの彼らしい台詞だった。

実は返すことの出来ないまま彼の小説は私の鞆の中で眠っている。

でも、「特別」だと言って渡された小説を本人の了承もなくハイと他人に明け渡す真似は良くないと思った。

それは、いくら夏目さんにでもだ。

でも椎名君にとって夏目さんに小説を読んでもらうのは悪いことではないと思う。

それぐらい夏目さんは本が好きだし愛しているのだ。

「今度椎名君に聞いてみますね」

あるいは、一緒にここを訪れるのも良いかもしれない。

その考えが芽生えて、私は自らに驚いた。

誰にも立ち入られたくないと思っていた場所に一緒に、などと。今までは思い付きもしなかったのに。

ああ、私も変わり始めている。

「椎名君…椎名」

夏目さんが何故か思案顔で椎名君の名前を連呼している。

「どうかしましたか？」

「いや、椎名君は下の名前はなんというのかな？」

「ええと、確か椎名夜彦だったような」

夏目さんは思案顔のままフムと頷くと、早々に席を立ち何処かに行ってしまった。

そして一冊の雑誌のような本を手に戻ってくる。

「美しきかな日本」

と、その本の表紙には書かれてあった。
表紙を飾る写真は地蔵。

「……なんの本です？」

「ちよつとマイナーな月刊誌なのだけど、」

そう言つて夏目さんは、ぱらぱらとページをめくる。

陶芸や書道といった日本の芸術および芸術家が記載されたそれ。
ジャンル別に特集が組まれているもののようであった。

「ああ、そうこれだ」

あるページに辿り着いて、夏目さんは雑誌を机上に広げた。

華道界の新栄、孤高の氷結王子！椎名夜彦

そうデカデカと書かれた見出し。

その下に椎名君の姿があった。

私と夏目さん、二人して本を覗き込んだまま固る。

「こ、孤高の」

「氷結王子」

私は引きつりながら、夏目さんは笑顔のまま呟いた。夏目さんが、愉快そうな口調で書かれた文章を辿る。

「ええと、どれどれ？」迷いのない指先が花へ伸び、凍てつく瞳に、花もその時を止め彼の独創世界の住人となるだろう。揺るがない彼の表情は、湖面に張る薄氷の如しであつた”だって”

「よく分からないですけど、すごそうな感じですね…」

この記事を書いた人は、とんでもないポエマーのようである。

しかし流行りだからって何でもかんでも王子を付けなければならないというものでもないと思う。

しかも何故あえての氷結…。

鉄仮面よりは良いだろうけど…。

鉄仮面王子…。

「葵ちゃんの言う椎名君かい？」

頭の中で奇妙な王子像が出来上がったところで、夏目さんに確認される。

「は、はいそのようで」

「代々流派が続いているようだよ。彼も立派に華道家というわけか」

「…はい。私も、初めて知りました」

写真の中の椎名君は、臙脂色の着物姿でピシリと背筋を伸ばして花を挿していた。

全くの無表情は同じなのに、こうして切り抜かれた写真の彼は、ま

るで別人のように見える。

花図鑑。スイートピーを見詰める眼差し。

伸びた背筋。

度重なる欠席。

家政婦。

自分の夢を追うか、定められた道に行くか。

今までの椎名君の言動が瞬く間に意味を持ち、私を納得させていく。

「そ、か」

写真をジッと眺めながら呟いた。

「彼が遠くなつたかい？」

傍らで、私に問いかける声。

遠い。

手の届かない、とても遠い存在のように思える。

だけど。

だけど私は。

私は、写真の椎名君から夏目さんへと視線を動かした。

私を見つめる視線は、もう私の答えを知っているようだった。僅かに笑む瞳が私に答えを促す。

「いえ。いえ」

私は噛みしめるように否定を言葉に乗せた。

私は知っているから。

すべてがくすむと呟いた彼の厳しい横顔を。

「特別」と開け渡された心の欠片を。

写真で見る遠い彼ではなく、この目で見て感じた彼の傍に、私は居たい。

彼の問題は大き過ぎて私の手に負えることではないと思う。だけど。

——大切なのは何を与え得るかではなく、どう存在するか

私は、彼にとって、安心して弱音を吐ける存在でありたい。

「面白いですか？」

いまだに椎名君の記事を見つめている夏目さんに問いかけた。

私は、記事の内容のことを聞いたのだ。

夏目さんは、花や芸術ごとに関心が深いから。

「おもしろくはないね」

十分な間をおいて、夏目さんは記事を見詰めたまま呟いた。予想外の言葉に驚く。

蜂蜜色の髪が彼の表情を隠して、どこか不安にさせられる。

返す言葉を探して黙していると、夏目さんは見えない表情まま言葉を続けた。

「僕はね、君が思うほど、聖人君子でも何でもないよ。葵ちゃん」

「え」

「君の話を聞くのは、あまり愉快ではなかったね」

其の言葉に私の心はツキンと冷えた。

やはり、迷惑だったのか。

私の悩み事を聞かされるのは、不快でしかなかったのか。

余りの驚きと衝撃。

私は、目の前を真白にさせるだけで何も言えなくなってしまった。

「君が他の男の話をするのは正直、おもしろくない」

少し不機嫌そうに呟かれた夏目さんの声が沈黙を破る。

私の意識は浮上したが、言われた言葉にまた思考が真っ白になる。

「え、男の？」

言われた意味が、よく…。

「君の口から他の男の相談など聞きたくはないというのが本音だからね」

たじろぐ私に、やっと雑誌から顔を上げた夏目さんが微笑む。

ものすごい笑顔。

な、ん、か。

夏目さんが恐ろしい。

すごく笑顔なのに……。笑顔だからこそ。

何時ものように揶揄として受け流すことが出来ない。

「どう、して、ですか？」

私は動揺を隠せないまま、どうにか声を出して、彼に尋ねた。
尋ねるより他に答えが見つからなかった。

彼の言葉を理解するのには、あまりに動揺していたのだ。
本当に答えが出せないのだという困り顔で夏目さんを見つめる。

「……………君ね、」

珍しく夏目さんが呆れた表情をして言い淀んだ。

何かを言いかけるように薄く唇が開かれるが、いくら待っても彼から次の言葉は出てこない。

珍しいその様子に、私は動揺も忘れて彼に見入る。

興味津々とばかりに目を瞬かせていると、夏目さんは少し呆れたような、ムツとしたような複雑な表情をして、

手に持った雑誌を彼にしてはぞんざいな動作でバサリと閉じた。

「それを聞くのは無粋というものだよ。葵ちゃん」

そう言う彼は、もう笑みさえ浮かべた何時もの彼で。

私は幻でも見た心地で首を傾げたのだった。

22話

4限終了のチャイムと同時に私は椎名君の前に立ち塞がった。
朝からこの時を待っていたのだ。

「椎名君。今から、裏庭にいい？」

私がそう言ったとき、例のごとく教室内はどよめいた。

「よびだし」「昨日ふられた腹いせに」「あ、葵、暴力は・・・」
とか、聞こえるのですが。

何かめちゃくちゃ聞き捨てならない台詞出たけど。

私、振られたことになってんのかい！

いや、気にはしていない。心を静めるのよ葵！

椎名君は私をじっと見た後、ゆっくり頷く。

「し、椎名君逃げて」「何て強者だ」「あ、葵、暴力では何も生まれないわ」

て、其れはあんまりだ。

ぎりぎりの忍耐力を頼りに、早々に椎名君を連れ立って騒がしい教室を後にした。

「椎名君、昨日は言えなかったのだけど」

私はお弁当のことも忘れて、早々に話を切り出した。

今日も裏庭は人寂しく冷え冷えとしている。

しかし、緊張のためかそんなことは気にならなかった。

昨日、家に帰って決めたのだ。

椎名君と話をつけよう、と。

変な考えだが、私は椎名君と本気で向き合う決心をしたんだ。
只ならぬ私の様子に、椎名君も重箱を傍らに置いて、聞く体制をとってくれた。

夏目さんは、気負う必要はないと言ったけれど。

こんなに真剣に誰かに伝えようとしたことがないから。
今、こんなにも緊張している。

誰かのために言葉を紡ぐ。

それが相手の役に立たなくても。

ただ、届けと。そう願って。

「椎名君の小説はね。昨日も言ったけど、すごいと思ったよ。主人公の思いがグワッって心の中に入ってきて、夢中になって読んだよ」

昨日は言えなかったと切り出しておきながら、昨日も言ったと小説の讚美をする私はいったい何者だ。

昨晚言いたいことをリハーサルしたはずなのに。

本人を目の前にして、思考とは裏腹に上手くいかない。

椎名君は急かすこともなくじっと黙って私の言葉に耳を傾けてくれている。

揺るがない彼の表情に安堵した。

私が言いたいことを言えていないのを、彼は分かってくれているようだ。

落ち着け私。

——君が答えを与える必要はない。葵ちゃんは君が思うままに。
私は、そつと夏目さんの言葉を思い出し、心の中で深呼吸した。

「椎名君の小説主人公は何故、自分の夢を馬鹿みたいなことって言

ってしまえるの？私には、まるで最初から夢を諦めてるみたいだと思っただよ」

――月に行きたいだなんて馬鹿みたいだと思うかい？

馬鹿みたいで、叶わない。だから言えるんだよ。

椎名君。貴方の月は本当に届かないものなのだろうか。

そうやって諦めて届かないふりをしているのではないの？

「主人公は月に行くことを馬鹿みたいに叶わないことだと言っていただけ、好きなことってどんなに大変なことでも努力しようって思わない？」

あの日の有史さんの背中が脳裏に蘇る。

馬鹿みたいで叶わないなら努力する。

どんなに大変でも自分のやりたいことだからと。

彼はそう言っていたのだ。

私には持ち得ない悩みだからこそ、私には眩しくとても美しく思えた。

「私はまだそう言えるものは無いけど。好きな場所はあるよ。好きが動かす気持ちってとっても強くて大切だと思う」

ざわり、と風が吹いて私の視界を髪がゆらめいた。

目に何か入ったのか椎名君は目を細め、無駄の無い眼鏡をそっと外して眉間を押さえた。

暫く待っても彼はそのまま動かない。

ゴミが入ったという様子でも無さそうだ。

何か思案しているのかもしれない。

私は、意を決して言葉が続けることにした。

彼の視線が此方に無くても私はもう言うことをためらわない。
瞼をそっと閉じる。

「あと主人公は家業を継ぐことに、決められた道を進むことにとて
も否定的だったけど私は、羨ましいって思うよ」

「うらやま、しい？」

訝し気な椎名君の声が繰り返した。

「うん。だって其れは、親が与えてくれたチャンスだと思うんだよ
ね。その人の強みになると思う」

とても無責任なことを言っている自覚はある。

でも、私には選ぶ資格はない。だってそれは椎名君が決めることだ
から。

だけど、これこれだけは。

ちゃんと伝えたいと思ったんだ。

私はゆっくりと瞼を開く。

レンズの隔たりの無い深い椎名君の瞳にやっと出会って。

いつもの無表情だけど、いつもより幼げに見える彼の顔にほっとし
た。

「だけど。だからね」

うまくは言えないけど。

「あの主人公の彼は」

椎名君は。

「何も、あきらめる必要なんてないよ。どちらか一つなんて、そんな風に自分を追い詰める必要なんてないよ」

私を真剣に見つめていた椎名君の目が見開かれる。

「だって、私たちはまだ若いし、視野は広く持たないと」

これは、受け売りだけどね。

私は、言い切った清々しさに思いつきり笑って見せた。椎名君は驚いたような表情をしている。

珍しいな。何て考えてたら、次第に眉間に皺がよって。そして、くしゃりと笑った。

泣き出しそうな子供が笑ったみたいな無垢な笑顔。

――！！

不意打ちを食らって私は息を呑んだ。

しかし、その瞬間目の前がぶれて視界が真っ暗になる。いや。私は、椎名君の腕の中に抱き込まれていたのだ。

「ししし、椎名君？」

「・・・」

動揺のまま呼びかけると、ぎゅうつとさらに腕に力を込められた。ええええ。

ど、どうしたら良いんだ。

心臓がバクバク鳴っている。

だけどこれは私の？それとも・・・？

「知って？」

うつむいた椎名君の髪が首にかかると同時に問われた。
一瞬何を問われたのか分からなかった。

「え？」

「華道」

すぐ思い当たる。

「・・・うん」

気まずく答えた。

彼は、私が彼の家柄を知っているのではないかと思案したようだ。
椎名君は小説の主人公ではなく、自分自身に向けられた言葉だと
悟ってしまったのだ。

そうになると、何かしら彼の置かれている環境を私は既に知っている
可能性が高い。

そういうところだろうか。

折角のオブラードがこうもやすやすと剥がされるとは。
何だか悲しい。

「私、わかりやすい？」

私は素直に尋ねた。

「私たちはまだ若い」って

ああ。そうか。

小説の主人公はそう若い年でもなかったっけ。

全く、最後の最後で私は詰めが甘い。

「雑誌で知ったの。憶測ばかりで勝手言うてごめん」

私の謝罪に椎名君は首を緩く振った。

彼の髪が首に当たってこそばゆい。

僅かに身じろぎすると離れると思ったのか、椎名君はまたぎゅっと腕の力を強めて、もつと首を振った。

まるで子供みたいな仕草。

あの鉄仮面の行動とは思えない。

私は苦笑して、彷徨っていた手を彼の後ろ髪に添える。

左右に揺れる頭部を宥めるようにゆっくりと撫でた。

私が一番落ち着く行為。

椎名君にも効くかな。

撫で続けると、やっぱり彼の腕の緊張が弱まる。

どうやら椎名君にも有効らしい。

私は彼の艶やかな髪を撫でながら、寒々しい裏庭の光景をボンヤリと眺めた。

椎名君の髪は外気のせいかわんやりとしていた。

私の首に僅かに弾く彼の水滴もまた、酷く冷たい。

何故か胸だけがギュツと熱く、切なく爆ぜた。

「椎名君。どちらが正しいなんてないよ」

私は彼のことをどれだけも把握していない。

ほとんど知らないと言ってもいい。

でも、これだけは分かる。

彼はきつとずっと苦しかったのだろう。

早く大人になることを求められて。

私はそつと彼と同じように椎名君を抱きしめた。
もう最初のような動揺は無く、ただ励ますようにばんぽんとハグする。

私にしては大胆な行動だが、今の椎名君はまるで幼い子供のようなので、私の腕はなんの戸惑いもなく彼を抱きしめた。

「大丈夫だよ。椎名君が選んだ答えなら私応援する」

綺麗事かもしれないけれど。

なんの手助も出来ないかもしれないけど。

辛いならこうして、何度でも抱きしめよう。

ずっと首を寄せるように抱きついていた椎名君は、本当にゆっくりと顔を上げた。
首を掠める髪感触がくすぐったい。

「・・・好き」

「は」

耳元で囁くように言われた言葉に耳を疑った。

いや、まで私。

きつと聞き間違いだ。

でもこの至近距離で？

まさか、まさか！

「好き、なんだ」

「ええええええ」

私は椎名君の肩を驚掴みにし、勢いよく距離をとった。目の前に現れた彼の表情は何処かキョトンとしていた。私の行き成りの行動に驚いたって顔している。いや。こっちのが驚いてるからね！貴方の突飛な発言には！だつてすすす。

「す、すきつてー！」

「書くことが」

「・・・」

「・・・」

あ。

書くことが好きと。

さ、さいですか。

乾いた視線が、ベンチに取り残されたお弁当を捉える。

「・・・おべんと、たべようか」

私の問いかけに椎名君はゆっくりと頷いた。

23話

「おめでとー葵!」

椎名君とお昼ごはんを滞りなく済ませ、教室の扉を開けた瞬間言われた一言。

「は!?!何事?何が起きた?」

私、誕生日過ぎてますけど。

不審顔で周りを見渡すと、生温かな微笑が返ってくる。

これはいつたい…。

私の横に立っていた椎名君に視線を遣ると、彼も少し首を傾げて私をジッと見返した。

どうやら彼にもこの周りのテンションに心当たりは無いらしい。

「んもーう。さっそく見つめあっちゃって。ラブラブなんだから」

にこにこ笑いながら四季子が寄って来る。

「は!?!」

ちよっ!?!

ええええ。

このこのって、肘で小突くなあああ。

「なっ。らぶっ!?!」

「葵がさ、振られた腹癒せに椎名君殴るんじゃないかって、心配し

た私たちはクラス代表で岡崎を裏庭へ送り込みましたー。現場の岡崎さーん」

「振られたって前提から違っ」

何でそんな話になってるんだー！

「はいはい。現場の岡崎でーす」

焦って否定する私を遮り、クラスのお調子者岡崎が呑気な声を出した。

「なーんと。椎名夜彦君と笹野葵さんは、あつっーい抱擁を交わしておりまーす。」

岡崎が大げさなジェスチャーで言うと、クラス中がヒューヒューやらなんやら盛り上がる。

お・か・ざ・きー。殺ー！

岡崎を睨むと、悪びれもせずヘラリとした笑顔が返ってきた。こいつ！

「椎名君はー。何か敷居高いって感じでー寡黙二枚目って感じで正直悔しいけどー。まあ、純朴和風系葵なら似合わんこともないよー」

そうそう！イケメンってか二枚目とかハンサムって感じだよねー。

わかるー。だよねー。

女子は女子で、勝手に盛り上がってる。

何だそれ。

恐る恐る椎名君を見れば、色んな男子になんやかんやと絡まれている。

依然として無表情な椎名君。

ああああ。このこのってやられてるし。

椎名君は決して絡まれキャラでは無かったのに！

一目置かれた委員長キャラだったのに……。図書委員だけど。

ごめん。椎名君。

決して私だけが悪い訳では無いけど、どうしようもなく申し訳ない。
発端は私だし…。

誤解が解けることはなく、始業のベルが鳴った。

ざわめく教室内に入って来た中センは、騒ぎの中心でワタ付く私を見てニヤリと笑った。

くうう。何か不本意だ！。

「ごめんね。椎名君」

放課後、押し出されるようにクラスメイトたちに促され、椎名君と
帰路についている。

何と無く、椎名君は騒がれるのが好きじゃない気がするし、何だか
申し訳なくて謝る。

「なんで」

「え」

「笹野さんは、悪くない」

思ったより柔らかな口調に顔を上げると、しっかりと椎名君と目があつた。

その目線だとか、口調だとか、いつもより柔らかく届くのは私の気のせい？

「そっか」

「ん」

ジツと見つめられていると、昼間抱きしめられたこととか、首にかかる柔らかな髪とか、まざまざと甦って。

思わず赤くなつた顔をごまかすように俯けた。

寒さに乗じて手を温める振りをして顔を隠す。

何、この湧き上がる恥ずかしさ。

「それに」

「あ」

椎名君の手が私の手に伸びて、しっかりと捕まえた。

行き成りで予想外の行動に、逸らした顔を再び彼に向けてしまう。

「存外、愉快だ」

何時かのようなセリフで、何時かよりもずっと柔らかかに笑う椎名君。

私は、何も言うことができなくて、ただ啞然と椎名君を見ていた。

あの時とは決定的に何かが変わった。

それは何によつて？

彼を変えたのは何？

私を動揺させるのは何？

私の頭の中はパニックを起こして、たくさんの疑問が渦巻いた。
触れた手の熱さに、私はどんどん平静さを失っていく。
動揺した顔を見られたくないのに、合わせた視線を自分から逸らす
ことが出来ない。

「おや？ 葵ちゃん？」

聞き馴染んだ、良く知る声が私を思考の渦から救い出した。
そうか。ここはもう、並木茶屋通りだった。
この人に出会っても、何らおかしくはない。

「な、つめさ、ん」

ぱつと視線を声の方に向けると予想通りの姿。
だけど。

その瞳が。

美しい青灰色の瞳が。

暗い無機質なガラス見たいに冷たくて、私は声を詰まらせた。

「君は…椎名、夜彦君、かな？」

夏目さんが笑み湛えて優雅な動作で近づく。
だけど、その瞳がとても冷たくて。

私は、怖いというより悲しくなった。

以前も夏目さんの瞳が、ガラスみたいに冷たくなることはあった。
けれど、それとは違って今は笑顔を作るから。

不安定な薄いガラスが今にも壊れてしまいそうな、言いよりの無い不安。

そう、ちょっとした刺激で意図も簡単に崩れ去ってしまいそうな、そんな心許無さ。

そんな顔しないで。

そんな眼で笑わないで。

未だに椎名君に繋がれた手にギュツと力が籠る。

はっとして、椎名君を見れば何処か緊張した面持ちで夏目さんを見ていた。

ピリツとした空気を肌で感じる。

やばい、やばい、やばい。

どうする？

否、どうにかしないと。

「そうです！そんなんです。彼、椎名君。クラスメイト、寡黙！！」

私は、どうにかこの空気を脱しようと、何故か片言で言った。

最後にバディーっつとばかりに繋がった手を振り上げる。

そして、素早く夏目さんの手を、空いたもう片方の手で捕まえる。

「彼、夏目さん。近所の古本屋さん、年齢不詳！！」

勢いに任せた意味不明な紹介を終えて、同様に夏目さんの手も振り上げた。

「……」

「……」

「……」

私は、長身の彼らの手を必死に上げながら、ダラダラと汗を流した。冷や汗という名の。

何をしてるんだ私。不審過ぎる。

ああ。両側からの視線が痛い…。

「ふ…あはははっ」

急に、夏目さんの方から快活な笑いが響いた。

繋がれていない方の掌を額に当てるようにして、そっれはもう爆笑してらっしゃる。

私は、ハハハ…。と乾いた笑いを漏らした。

そつと振り上げたままの二人の手を下ろして離す。

兄さん……。人間やばい時は幾らでも捨て身になれるのですね。

けれど、私何か失った気持で一杯です。

大人になるってこういうことなのでしょう。

「ははっ…。年齢不詳は酷いな。葵ちゃん」

「…だって。そうじゃないですか」

やっと笑いが収まったのか、そう言って私の頭を撫でる夏目さん。先ほど纏っていた空気は何処にもなく、心の中でホッと息を着く。

「あ！あの、夏目さん椎名君の書いた話読みたいって言っていましたよね」

仕切り直しとばかりに尋ねると、うん？そうだね。と返って来る。

よし。

今度は、先ほどから黙ったままの椎名君を振り返る。

「あのね。椎名君の作品すごく良かったから、是非夏目さんにも読んで欲しいんだけど、どうかな？」

「……」

椎名君はこくりと頷いた。しかし、無表情ながらいつもに増して表情が堅い、気がする。

やはり、気が進まないのだろうか。

「…やっぱり嫌？嫌なら…」

「クラスメイト」

「え？」

急に言葉を遮られて、キョトンとしてしまう。
無表情の様で、何処かしらムツとした椎名君。

「特別」

ああ、うん。

その一言でやっと納得。

彼は、さっきの私の紹介フレーズが気に食わなかったらしい。
そういうところに拘る椎名君は少し可愛い。

「うん。そうだね。ごめん。椎名君はともだち」

「…」

にっこり笑ってそう告げたら、椎名君はぴくりと固まった。そして、小さく私に頷くと、夏目さんにゆっくりお辞儀して去って行った。

去っていく彼の背中に何故か哀愁を感じる…。

仲良くなったと思ったけど、まだまだ謎だ。椎名君。うーんと首を捻っていたら、横から声が落とされた。

「牽制するまでも無く、か。無意識とはまた酷な…」

意味深で不思議な夏目さんの言葉に更に首を傾げたら、苦笑して両肩をひよいとあげられる。

結局、教えてはくれないということか。

少し眉を顰めて見上げると、ちょっと溜息つかれてしまった。

「やれやれ。困ったものだね」

24話

「ところで夏目さん。どちらに？」

夏目さんが意味不明なことを言うのは常だし、不可解ではあるが放っておく事にした。

本を購入するために出掛けることは良くあるようだが、今日の様子は手ぶらだし、若しかしてこれから向かうところなのだろうか。

「漣に行った帰りなんだよ。僕もすっかり、あそこの珈琲に魅かれてしまつてね。ああ、そうそう」

夏目さんは、はい、と懷から何かを取り出し私に差し出した。
手紙のようなそれ。

金の縁取りが施され、やたら煌びやかだった。

不審に思いながら、恐る恐る受け取る。

「何ですか。これ」

「有志君から君と秀君に、だそうだよ」

有志…さん？

思い出すのは、女嫌いの垂れ目の男。
何でまた。

不審に思いながら封を開き、中からカードのような物を取り出す。

「招待状…今宵7時に漣にて演奏会を行います。是非、御兄妹で御出で下さい…？何でしょうこれ」

「読んで字の如く、招待状だね。」

そう言えば何時だったか、演奏を聞いて欲しい的な事を言われたような気もする。

殆ど社交辞令として受け取ってたのだけど…。

招待状まで作るとは、何ともマメというか律儀な男だ…。

しかし、今夜とは些か急な御誘いだ。

「夏目さんも誘われました？」

「ああ、うん。折角のお誘いだっただけど、どうにも今夜は…ね」

夏目さんは語尾を濁すように言うと、困った風に眉尻を下げた。その様子だと断ったのだろう。

どうやら、何か用事があるらしい。

夏目さんの事だから、本関係の事かな？

何の用事が聞きたいが、私が言及すべきことでもないだろう。

「…そう、ですか。急なお誘いですもんね…」

ピアノへの情熱を取り戻せたのは、夏目さんのおかげだと言っていた彼。

さぞ、がっかりしたのではないだろうか。

若干行くの面倒とか思ってしまったけれど、せめて私は招待されようではないか。

もちろん兄は強制同伴で。

「わかりました。夏目さんの分までしっかりと聞いてきますね！」

何かよくわからない気合いを込めてそう言つと、夏目さんはくすりと笑つて、うん、頼んだよ。と私の頭を撫でた。

「ただいまー。兄さん有志さんから、招待じょ…」

「葵。お前に荷物が届いている」

「え？」

出迎えもそこそこに、兄が白くて大きな箱を私に渡して来た。
なんだこれ。

通販した記憶ないけど…。

覗きこめば確かに、宛名は笹野葵様となっていた。

次いで、依頼主の覧を見て私は一気に開ける気をなくしてしまった。

「足長おじさん…？」

そう書かれていたのだ。

……不審すぎる。

「……兄さん。普通にこわい」

「案ずるな。有志だ。照れているんだろう」

「はい？」

荷物を押し返そうとする私に、兄は呆れた風に言った。

「いやいや。ばりばり案じますが。」

箱に不審な視線を送る私。

兄はやれやれと後ろ首をかいいた。

「女に贈り物などしたことが無い男だからな」

「い、意味わからん。」

有志さんに贈り物をされる事自体も意味わかんないけど。

何を照れる？

何故、足長おじさん？

しかも、それなら何故招待状は郵送じゃないんだ？

ばれる事を懸念して？

いやいや、ばつち兄にばれてますけど。

そして、何故兄は彼の心情をそんなに汲み取れているんだ？

兄よ、立派な心理学者になれるぞ。

「…お前。また馬鹿なことを考えているだろう」

「は！考えてないよ。心理マスターとか思っていないし！」

「……馬鹿か。いいから。開けてみる」

何時もは、もつと乗って来るか鋭い突っ込みが炸裂するのに、兄は
何処か疲れた様子だった。

はて。彼女にでも振られたか？

ドンマイ。

テンション低めの兄を気にかけてつつ、言われた通り箱を開いた。

「う、わぁ」

出て来たのは、深い藍色のワンピースドレス。

思いもよらない出現に驚きながら、そっとそれを持ち上げ、広げてみる。

可愛らしいデザインだが、しっとりつやのある藍色が何処か大人っぽい。

裾に葵の花の刺繍があり、所々にライトストーンがあしらわれている。

すごくかわいい。

「けど、これをどうしろと?」

深意を図りかねて、心理マスターの兄を見れば、物凄く渋い顔をしていたぎよつとする。

「それを、着て演奏会に来いということだろう」

「え、兄さんにも招待状きてたの?」

「…招待状? さっき電話が来たぞ」

「え」

ならばこの招待状何だ!

要らなくない?

先ほど受け取った無駄に煌びやかなそれを取り出し兄に見せる。

「…今宵、とか気障だなアイツ」

何処かさえない表情の兄は、やはりさえない突っ込みを入れた。
まあ、それは確かに思ったけど。

「兄さん。きつと彼女も何か理由があつて…」

「お前何を言つて…いや、いい何も言つな。もういいから。それ、着替えて来い」

折角、傷心中…かもしれない兄を励ましてやろうとしたのに。

背中を押され、服共々部屋に押し込められる。

襖が閉まる直前、あいつ…とか、予感はしていたが…とか言つ兄の低い呟きが聞こえた。

相当傷心らしい。

それは肌にしつとりと馴染んだ。

柔らかなシフォンのスカートは歩く度にさらりと揺れ、動きに合わせライトストーンを煌めかせる。

「わぁ…」

何で有志さんがこのドレスを送ってくれたのかは謎だが、私も一応女なので、ときめかない訳無い。

素直にうれしい。こんな綺麗な服着たの生まれて初めてだ。

「おい。準備できたか？」

等身鏡でドレスの素晴らしさに見惚れていたら、スーツの兄が襖を開けて入って来た。

兄の方も既に準備が整ったらしい。

ネクタイを調整している様子は、我が兄ながら格好良い。いつもがひよこエプロンだから尚更だ。

「見て裾、きらきら！」

「…ああ」

兄は、はしゃぐ私を見て頬を緩めたが、すぐ思案顔になって、有志…あいつめ…と苦々しく呟いた。

「…やっぱり、行くのやめるか」

「？ 何言ってるの今更。さ！行こう」

今更渋りだした兄の腕を引いて、家を出た。

いざ出陣！

25話

「いらつしえい」

カランカランと御馴染のベル音を鳴らして漣に入ると、例の如く小松親分が威勢よく出迎えてくれた。

私は、ドアに手を掛けたまま固まってしまった。

何時もと同じベル音と小松の親分の声。

ただどこは何処ですか。

隅にひっそりとあったピアノが店の中央…テラスに続く大きな窓の手前に配置され、まるで何時もの喫茶店の面影を消している。

そして何より、明らかに外国の人が二人います。

しかも、何やら見られております。

…非常に、入り辛い。

「おお。葵ちゃん！えれえめんこいじゃねえか！秀坊も良く来たなあ。さあ入んな！」

「どうも御無沙汰です。葵。つかえてないで早く入れ」

固まっていたところを、小松親分と兄に促され、おずおずと足を踏み入れる。

本当に此処は漣なのだろうか。

何時もと違う雰囲気のお店を、私は所在無く辺りを見回した。

普段はレースのカーテンのせいで気付けなかったが、窓の外はテラスになっていたのか。

あ、テラスにいる白いスーツの後ろ姿は若しかして有志さんでは？
テラスに続く窓に肩をもたせかけながら、月を眺めている様子の白

スーツ。

うん、あの気障な佇まいは確実に有志さんだ。

ジツと見ていれば、白スーツの背中が振り向く。

予想通りそれは有志さんだった。

眼が合った瞬間、彼はカツと眼を見開きすぐに逸らされる。

何故だ。

何か、出会った当初を彷彿させるな…。

不審に思いながらも、先日なんだかんだ打ち解けたことも手伝って、私は躊躇い無く有志さんに近づいていった。

「こんばんは。今日は御招待ありがとうございます」

「……にっ合わない事も無い！」

「…はい？」

顔を明後日の方向に向けたまま、唐突に言われた言葉。いったいこの人はどうしたのだろう。理解できない。

「ダメでしょユーシ。ソンナんじゃ何も伝わらナイよー」

若干困惑しているところに、少し片言混じりの日本語が割り込んできた。

振り返れば、さっき見た外国人二人だった。

声の主は、フワフワの栗毛にヘーゼルの釣り目がちな瞳をした悪戯っ子を思わせる風貌の人物。

その彼につづく男性はダークブラウンの髪に灰色の瞳で、その佇まいは一言で言うなら紳士。ダンディズム溢れる人だ。

「君がアオイかー。ウンキュートだ。本当にちゃんと女の子なんだねえ。ふーん。へー」

栗毛色のフワフワした方が興味深そうに言った。

少し屈みながらの近い位置でジロジロ見られる。

初めてのインターナショナルな人に、私は失敬な！と感じるよりドギマギしてしまう。

すると紳士の方が、こら、失礼でしょう？とフワフワ栗毛を諷めた。流石紳士だ！とか思っていれば、彼が私を振り返って微笑する。

「失礼、レディ。ドレス、よくお似合いですよ。無理な注文に応えた甲斐がありました」

「そうそう。ユーシったらイキナリ電話で……」

「ライアス！！マロー！！」

有志さんが怒鳴った。

余計なことを言うなとばかりに、二人をギリギリと睨みつけている。

「オーコワイネー」

「することは無駄に気障なくせに、本人を目の前にとすつかりヘタレですね」

栗毛さんが、少しも怖くもなさそうに肩を竦めて言い、紳士さんが嘲る口調で続いた。

有志さんはうっと言葉に詰まってしまっている。

話の流れはよく分からないけど、何か哀れだった。

思わず、憐憫の眼差しを彼に向けてしまう。
すると横から肩をチョンチョンされた。
振り向けば、にっこり笑う栗毛さん。

「ドーマー。向こうでユーシの親友でチェリストのマローでース」

「同じくユーシの友人で洋服店を営んでおります。ライアスと申します。」

「あ、どうも葵です」

栗毛さんがマローさんと、紳士がライアスさんか。

頭の中で彼らの呼称を変換していたら、ライアスさんが私を眺めながら満足そうに頷いた。

「本当に葵という名がぴったりの方だ。刺繍を施して正解でした」

「え！これ！？」

「はい。私のデザインです」

うわああ。

葵の刺繍とか偶然じゃなかったんだ！

凄い。何か感激過ぎて言葉が出ない。

そういえば洋服店を営んでるって言ってた。

こんなダンディーな人が私にドレスを誂えるなんて！

「すごい素敵です！あの、こんな素敵な服生まれて初めてです！」

きらきらとした視線をライアスさんに向けると、彼は堪りかねたよ

うに噴出した。

そして、意味深に有志さんを流し見る。

「くっ。これでは肩無しですね。ユーシ」

「…煩い」

どういうことだろうと首を傾げる。するとライアスさんは苦笑交じりに言った。

「レディ。礼なら彼に言っておやりなさい。私は彼から注文を承って仕事をしたのですから」

「あ……」

そう言えばそうだった。

足長おじさんは有志さんだったんだっけ。

何で、私に服を送ってくれたのかは謎だが、くれた本人には違いな

い。

私は、慌てて有志さんを見上げた。

また、変な方向を向いているけどこの際気にしない。

ニヤニヤと有志さんに視線を送るマローさんも気にしない！

「……」

「あの、ありがとう」

「おい。まだ始まらないのか」

地の底から響くような兄の登場でその場は凍りついた。

兄の登場により、本来の目的である演奏会が始められることになった。

兄と小松親分はカウンター席、私はピアノの近くのベロアのソファ―に何故かマローさんとライアスさんに挟まれる形で座っている。狭くは無いけど、他にソファ―あるのに…。

ピアノに向かう有志さんからの視線が痛いのですが。

両隣の二人は、そんな有志さんを楽しんで態とからかっている様子。何だか不憫ですね。と呟くと、これ位自業自得だという答えが両隣から帰ってきた。

自業自得か…。何を仕出かしたんだろう有志さん…。

窓越しの月を背景にピアノに向き合う姿は、それはもうさまになっていた。

「では、この月にまずこの曲を捧げようか」

そんな気障な言葉を言って、有志さんは鍵盤に手を預ける。

静かに、零れるように始まったメロディーに私は目を見開いた。

うわ。

今なら、彼の言っていたことが分かる。

技術だけではなく、気持ちの籠る音とはこうも鮮やかなものなのか。

その音はまさに、淡く静かに光る月だった。

何て綺麗なのだろう。

目の前に見える月が、歓喜し白光しているようにさえ感じる。

これが心を込めるということ。

音に思いを寄せる事。

音が溢れる。

色になって弾ける。

胸を打つ。

最後の一音を聞き終わっても、私は余韻から中々抜け出す事が出来なくて、暫しぼうつとしていた。

ヤバイ。今までの人生クラシックなめてた。

本気で泣きそう。

「Debussyの“月の光”だ」

「腕を上げましたね。ユーシ」

両隣からそんな言葉が聞こえる。

ドビュッシーの月の光…。

本当に、月の光そのものだった。

私は、放心状態のまま胸に手を当てていた。

それから、ショパン、モーツァルトと演奏は続いた。
どれも素晴らしすぎて、どんどん気持ちが高まる。

——あいつの演奏を聴いたらみんなあいつに惚れてしまうんだ。
今なら兄が言っていたことも強ち嘘じゃないって分かる。
これなら、彼に熱を上げる女性が増えても仕方がない。

「最後の曲はリスト。これは…君に」

そう言つて有志さんは私の方を見た。

え、私？

自分を指さしてキョトンとしているうちに、有志さんの視線は、もうピアノへと外れてしまった。

リストと聞いて、以前夏目さんが弾いた超絶技巧を思い出したが、
始まったメロディーは、それとは対照で、流れる様な甘やかな曲だった。

夢の中を、漂うような心地になる。
今にも薔薇の香りが漂ってきそう。
メロディーが物語を紡ぐみたい。

夢の心地でその曲を聴いた。

最後の一音が惜しむように音を響かせて、私はようやく夢の世界から帰って来た心地で瞬きする。

「さっきの、リストの何て言う曲ですか」

今まで隣で曲の題名を覚えてくれていたマローさんへ問いかける。

「これはボクの口からは言えナイナー」

マローさんは悪戯っ子のように無邪気に笑ってウィンクした。

26話

きらきら

きらきら

スカートの裾が動きに合わせて煌めく。

それだけで、私が私でないような、現実味の無い感覚。

ぽつかりと浮かぶ月の下、綺麗なドレスに身を包んで此処はまるで別世界だった。

私という人間の本质は何一つとして変化していないのに、包む服と整えられた舞台で人間は如何してこうも浮足立ってしまうのだろう。つまり、この美しくも優美な空間に私はすっかり酔ってしまっていた。

有志さんの演奏が終わって、小松親分が手ずから用意してくれた料理を肴に各自まったりモードの中、私は飲み物片手にテラスに出ていた。

ふわふわとまだ夢が醒めぬ心地で夜空を見上げる。

きらきら

きらきら

心に宿る効果音が消えない。

言葉に表そうとしても、それは掴みどころ無く、まるで疼くような走り出したくなるようなそんな衝動ばかり掻き立てる。

平凡で秀でたところのない女子高生の私にも何か、何かあるのでは

ないのかと。

作り出せるのではないかと。

手探りで探したくなるような、そんな訳もわからない高揚感。

グラスに入ったジュースで月を透かしながら感情の波に身を委ねて
いると、コツリと後ろに気配を感じた。

振り返れば、それは有志さんだった。

彼は無言のまま私の横に並ぶ。

彼から近い位置に並ばれたのを不思議に思いつつ、私は夜空へと視線を戻した。

暫く二人で何を見るときもなく自然な無言の時を共有していた。

ふと、私は彼に重要なことを告げていないことに気がつく。

そうだ、大切なことを彼に告げていなかった。

慌てて有志さんを見上げると何時の間にか彼も私を見ていたようで、
バチリと視線がぶつかった。

瞬間、彼の視線が私から逃げようとする。私は咄嗟の行動で、有志
さんの腕を掴んだ。

有志さんは目を見開き、吃驚した様子で私を凝視した。

自分でも突飛な行動にびっくりだ。

有志さんはその表情のままガチリと固まってしまった。

女嫌いの彼には酷だったのか。

なんか申し訳ない。

だけど。

この感情が胸から消えないうちに、私は、この人に伝えたかった。
掴んだ腕を離して、気不味く彷徨う手を胸に当ててギュツと閉じた。

きらきら

きらきら

固まったままの有志さんを見上げながら、私は口を開く。

「あの。ピアノ…。すごくすごく」

感動した？

綺麗でした？

上手い？

素敵？

どれも当てはまるけど、それじゃ正しくはない気がする。

きらきら

きらきら

「落ち着かない気持ちです」

きっぱり告げると、有志さんは見開いた目をぱちりと一つ瞬きさせて「それは、光栄だ」と、零れるように笑った。

空間が、ドレスが、私を浮足立たせる。

だけど、このキラキラと心に宿るものは、彼が奏でた音のせい。まだ心に響いてやまない。

「きつと、有志さんの演奏を聴いた女性は、皆夢を見たんですね」

「夢？」

まだ耳に残る甘やかな音を思う。

「凄く甘くて、まるでヒロインになったような気分になるんです。ずっとずっと醒めてほしくないから、きつと何度でも聞きたいって思っんです」

「そう言われたのは、初めてだ」

私の発言に有志さんは素気なく、でも悪く無いという雰囲気で呟いた。

「そうなんですか？私今でも夢見心地ですよ。何だか叫びたいっていうか。うずうずします」

「うず…っ」

私の表現がおかしかったのか、妙に視線を彷徨わせる有志さん。何か、顔が赤いですが…。

よく分らず観察していると、顔を背けながら「そう感じてもらえたなら、本望か…」と小さく呟いた。

何やら、彼の中で解決したらしい。

ふむ。自己完結の多い男だ。

一人勝手なことを考えていれば、今日初めて有志さんの方からちゃんと視線を合わせられた。

「少し寄り道をしたが、私は努力という名のレールを敷いて歩いて行くよ。一步一步大切に、ね」

「へ？」

ふっきた顔つきで有志さんは言った。彼を見ると、決意の籠った眼で見返される。

「ドイツに戻ろうと思う。ピアノへの情熱を思い出させてくれたのは夏目さんだが…。ピアノに向き合うこと。もう一度向うで頑張る事を決心させてくれたのは君なんだ」

「え、でも私は何も」

淀みなく告げられて戸惑う私に、彼は緩く首を振った。

「いい。私がかかっていれば…。それで。ドレスはそのお礼も兼ねてだったんだ」

はにかむ有志さんの笑顔に、私は夏目さんの言葉を思い出す。

——知らぬ内に、多くは受け取られているものさ

きらきら

きらきら

きつとそれは、私も同じ。

現に今、この湧き立つ感情は有志さんから貰ったもの。

だけど、それは何かと、どんなものなのかと、口にするのは難しく、きつと言及されても答えられない。

私がかかっていれば。と言う有志さんのように。

さてね。と夏目さんがはぐらかしたように。

それは言葉にせずとも、きつとこのドレスのようにキラキラして、

それ以上の価値がある。

私と有志さんの間に、出会った当初の歪な居心地悪さは不思議ともう存在しなかった。

思い返せば、公園で話して二人で夜道を帰った日が切っ掛けだったのだろう。

闇夜が本音を少し溶かして、お互いの許すことの出来る領域がぐっと広がった。

あの夜、私は有志さんという人を受け入れ、そしてきっと彼もまた私を受け入れた。

それって、何だか凄い奇跡だと思う。

もし、あの日少しでも環境が違っていたら、今こうして向き合う私たちはいないだろう。

寸分の狂いなく、あの日があの日であったから。

そして今日の日もまた、この時がこの時であるから。

「ありがとうございます」

私は、面映ゆい感情を受けとめながら。

たくさん気持ちを込めて、そう言って笑った。

——人は受け入れられないことを知った時、とても絶望すると思わない？

何時か夏目さんに言われた言葉。

あの時、冷え冷えとした暗い瞳に、私は何も言葉を返すことが出来なかった。

けれど今なら返すべき言葉がこんなに近くにある。

ねえ、夏目さん。

だけど、人は受け入れられた時、とても面映ゆく、温かいのです。

27話

有志さんと並んで月を眺めていた。

ああ、こうしてこの人と夜を共有することは無いかもしれない。

そう思うと、恐ろしいほどの寂しさが胸に押し寄せた。

彼はもう自分の進むべき道を定めてしまったのだ。

自分の手で、手繰り寄せるように彼は進んでいく。

ああ、なんと目映いのだろう。

彼は、私の前を通り過ぎていくのだ。

去っていく。

時間は刻一刻と色を変えて目の前を通り過ぎていく。

まるで取り残されたように感じてしまうのは、私がそれを羨んでいるからだろうか。

変わりたい。彼が、彼の音楽が私を急き立てるから。

私も自分のレールの先を見たい。動き出したいのだと。

だけど、と同時に思う。

それは、とても恐ろしい。

怖いのだ。踏み出すことで何か失いそうで。

私の日常全てに溢れる幸せが、少しずつ色褪せてしまうことを私は望まない。

変わらないでいたい。変わらないでいて欲しい。どうか、どうかこのままで。

変わらない、確かなものに縋りたい。

ああ、夏目さん。

貴方は、何時まで変わらず私の側にいてくれますか。

手に持っていたジュースを一気にあおいだら、何故か気分が一層浮足立った。

ふわふわ、というか何だかクラクラの境地だ。

足元も心許無く、地面が揺れる。

思わず、フラリと隣に佇む有志さんに寄りかかってしまった。

彼の肩がビクリと震えたが、すまん。何だか頭がふらふらということとを聞かないんだ。

「っおい！それ、何を飲んだ？」

「え〜？マローさんが、渡してくれたんですよ」

ジュース…だよなあ？。クラクラした頭で答えると、直ぐそばで舌打ちが聞こえる。

あは。不機嫌になってる。やっぱり触れるのは嫌なんだな。

女性嫌い克服も後一步ですよ。

「あゝ。最後ぐらい無礼講です。いいじゃないですか。最後なんだから…」

「…最後、最後ね…。君は余程私と永遠に別れたらしい」

もたれかかった頭をぐりぐりさせてやれば、少しの沈黙の後、ため息混りにそんな言葉が返ってくる。

思いのほか、遣る瀬無いようなその響きに、ぼやけた頭が冷静になる。

「……だって、有志さんと私は住む場所が違うから」

それは、土地的な意味だけではなく、彼はこれからきつと音楽家としてきつとずっと高見を目指すような人だから。

「はっ…そんなことは、自分の意志と努力でどうにでもなるだろう」

馬鹿にしたように笑って有志さんはそううそぶいた。

有志さんの肩から頭を持ち上げ彼の顔を見る。

言葉に反して表情は真剣だった。

その言葉は、前に聞いた言葉に良く似ているように思う。

ピアノに関しての努力は惜しまない。いくらでも少しのことでも怠らないと。

ブルトップでさえ開ける事を戸惑うその指先を思い出して、思わず頬が緩んだ。

きつと、彼はそれを実行できる人なのだ。

「それなら…最後じゃ、ない？」

「ああ、最後になどさせるものか」

私と有志さんはとても近い距離でお互いを見ながら笑った。

もう目を逸らされることも無くて、それが何だかとても嬉しかった。不意に彼の手が私の手に触れた。

外気に晒されたその指は冷たく、触れられたことに驚くより先にピアノの指を守らなくてはと、咄嗟にその手を包みこむように握った。

「つめたい」

「君は温かいな」

確かにこの寒さなのに私の手は有志さんとは対照的に温かった。
ん？というか…。寧ろ体中があついような…。

そんな事を考えていると。

「ああもつつじれたいナ！ユーシ！早く、ちゅー！イマ！ちゅー
！」

「それは無理でしょう。ユーシの女性経験は小学生以下ですよ。」

「おうおう。若けえなあ」

「……」

ぎゃいぎゃいと騒がしく、入ってくる声。

ぎぎぎ、と有志さんとそちらを向けば、齧りつくように此方を見て
いるマローさんと、あきれ口調のライオスさん、ほのぼのと小松親
分、そして殺人者のような凶悪な面持ちで佇む兄がいた。

ひいひい。

何時からそこに。

ずんずんと兄が凶悪顔のまま近づいてきて、私の肩を掴むとベリッ
と有志さんから引き離れた。

ふらふら状態だった私は引き剥がされるままに兄の胸に背中から凭
れかかってしまう。

「……おい。葵に酒を飲ませたな」

兄は私をしっかりと支え、不穏な声を響かせた。

「ちっ…おいマロー!!」

「えゝ？ボクしらなゝイ」

有志さんのとマローさんの声を聞きながら、私は急激に訪れた眠気にそのまま瞼を下した。

ふわふわ熱くてどうしようもなくだるかった。

それからの事は酷く曖昧で、どれが現実でどれが夢だったか定かではない。

ゆらゆらと。

心地よい暖かさと振動。

ああ、このたゆたうような心地よさは兄の背中なのだろう。

「…おにい？」

「…なんだ」

「お兄はずっと側にいるよね？ずっと葵の側にいるよね」

「ああ、葵は何も心配しなくていい」

「誰も何も変わらないよね」

あれ、私は小さい頃の夢を見ているのだろうか？
それとも、これは現実だろうか。
覚醒しきらない頭ではそんなことさえ分らない。

「夏目さんも、変わらないで葵の側にずっといるかな」

「……」

だってそうでしょう？

夏目さんはずっと昔から少しも変わらず夏目さんなんだから。
蜂蜜色のきらきらの髪に、とっても綺麗な青灰色の瞳で、甚平を着
て、いらつしゃいと私を迎えてくれるでしょう？
それが、何年先でも変わることは無いでしょう？

それが、どれほど不自然なことでも。

私の問いかけに兄はもう何も言っではくれなくて、ただ暖かい背中
に頬を擦り寄せた。
いやだいやだと駄々を捏ねるみたいに。

そうか。

そうか。

私は怖い。

だから。

私は変わることを恐れる。

それは変わらない夏目さんを置いていく事だから。

苦しくなる胸が水滴となつて兄の背中に染みを作った。

夏目さんとの間に立ちふさがる歪みが私を怯えさせる。

それは、有志さんの言う意志と努力だけでは、きつと越えられない歪み。

ゴトンと何かが立てる音に私の意識はふいに覚醒した。

暗いが、見覚えのある天井。間違ひようもなく私の部屋だ。

なぜ、何時の間に戻ったのかと起き上がり、ベットから足を下ろすと足に何か硬質なものが触れた。がらりと鳴るそれを拾い上げる。

「あ、」

拾い上げてそれが何かを知る。

大事に大事に瓶に詰めた金平糖。

——カタチに残るモノより、溶けてなくなった方がいいのだろう
——だけど、覚えていて欲しい。と言うのは傲慢かな…

夏目さんの言葉は、何時も唐突で脈絡がない。

だけど、それらは私の心深く居座って、事あるごとに私を翻弄する。魔法のように私を縛る。

その言葉で、瞳で。

意味深で意地悪で、飄々とした掴みどころのない人。

私は何時もあなたの言葉を汲み取ることが出来ないのです。

知りたいと、夏目さんを知りたいと思う。

だって、私は知ってしまったんだ。

心を許されるということ。

椎名君と有志さんに関わらなければ、知りようもなかった。

お互いの領域を許し合う心地よさ。

不思議だからこそその聖域だった。触れてはならない触れられない場所だった。

だけど、知りたいと思ってしまった。

誰よりも、何よりも私を縛る人。

はぐらかさずに教えて。

ねえ。夏目さん、あなたがとても知りたい。

気付いたら私は家を飛び出していた。

外はまだ月が高く、深夜である事が分かる。

自分は何をしているんだろうか。

近所とは言え、こんな夜にどうかしている。

吐く息が白い。

暗闇の中、翻る裾だけがきらきらと踊っていた。

当然、古本屋は外から見ても真っ暗で、人の居る気配は無い。半ば希望を持たずに引き戸に手を掛ける。

それは思いがけず簡単に開き、不用心ですよ夏目さんなどと頭の端で思う。

そっと踏み入った店内は、静謐というより何処か寒々しかった。聳え立つ本棚は余所余所しく威圧感を増して、夜の森にでも迷い込んだようだ。

当然この時間に夏目さんが定位置で本を読んでいるはずも無い。

自分は一体何をしているのだろうと思う。もし会ったとして、私は彼に何を言いたいのだろう。

一步一步本棚の隙間を意味も無く歩きながら、自分の行動の無意味さに泣きたくなってきた。

もう帰ろうか、とそう思った時。

ポーンと一音。

ピアノ？

それは確かに、ピアノの音だった。

微かに聞こえるその音を頼りに、店の丁度端にある本棚まで行く。この本棚の向こうから聞こえるけど、どう考えてもここは店の端で本棚の向こうは壁のはず。

首を傾げながら、もっと音を確かめようと本棚に手を掛け顔を寄せた時、ガタンと何かが嵌った音がした。

「え、え、え、うそ」

嘘みたいなことだけど、それはまさに私の目の前で起こった。ゆっくりとスライドしていく本棚。

その先に見えるのは下へ下へと続く隠し階段。

何か、とんでもないものを見つけちゃいました…。

28話

この階段はどこまで続いているのだろうか。

下へと伸びる階段の先は暗く、踏み出すのは中々勇気がいる事だった。

しかし、先程聞こえたピアノの音は確かにこの先から聞こえたように、微かだが途切れ途切れに階段の先から音が反響していた。

どうしよう。思いがけないものを見つけてしまい戸惑う気持ちと、妙に確信めいた期待が絢交ぜになって私を急き立てた。

隠し階段。その名の通り隠されていたのだ。

いいだろうか、いいだろうか、この階段を下って行っても。

知りたいという気持ちが勝って、私は意を決し仄暗い空間に足を踏み入れた。

石造りの階段は妙に硬質な音を響かせ、少し足が震えた。

緊張のせいか息が上がる。

10段もしないうちに階段は終わり、深く息を吐いた。

ピアノの音はもうしない。

酷く、非現実的だと思った。

耳の奥で警鐘が鳴っているような気がする。

ゆっくりと壁を伝ってすぐ木の扉に行きつく。古めかしい、だけど普遍的な扉だった。

この扉の奥からピアノは聞こえたのだろうか。

ごくりと喉が鳴った。ゆっくりと扉を引く。

「……？」

部屋だった。窓もない部屋だ。

12畳ほどの箱のような部屋。

そのほとんどが、中央に置かれたピアノと、それを囲う山のような

本に占領されている。

人影は無いが、確かに誰かいたのだろう。

ピアノの上に置かれたにランプが暗い部屋を仄かに鮮明にさせていた。

そろりと部屋に踏み入ってもそこに人の気配はしなかった。

年代物という感じがだが綺麗に磨かれたピアノとは対照に部屋に所狭しと積まれた本たちは、どことなく古めかしいものばかりだった。

紙が黄色く劣化しているものも多い。

店に入りきらない夏目さんの私物だろうか。

ということは、ここは本の貯蔵庫？

それならば、と目下のピアノを見やる。何故、ピアノ？

もう一度ぐるりと部屋を見渡して見る。

良く分からないけれど、ここは貯蔵庫と言うには人の気配が強すぎる。

けれど、どこか放置されたような物悲しさが部屋に染みついているような。そんな違和感。

あ、と目にとまる物があつた。ピアノの上に、本が一冊。

部屋に溢れかえる本たちとは何となく違った様子で、それはポツリと置かれていた。

古びた白が黒の上で独立した雰囲気を出していた。

明らかに他の本とは様子が違うように思う。

薄い表紙に書かれたそれに、どこかで見覚えがあるような気がしてそつと手を伸ばした。

「駄目、だよ」

「っ！？」

声に伸ばした指が止まる。

中途半端な姿勢で振り向けば、木製の扉に寄りかかるようにして立つ夏目さんがいた。

「なつめさ」

出しかけた声が途切れた。
彼はゆつくりと私に近付く。

「……」

ランプに照らされた彼の瞳は余りにも冷たかった。
それは、初めて己に向けられたものの。
のぼされる彼の長い指先。無意識に身体が震えた。
私の反応に彼の指先が宙に泳いだ。

「――君も僕が、怖い？」

キミモ、ボクガ、コワイ？

「っ」

言われた言葉に息を飲んだ。
ただ、自分は酷く愚かな反応をしてしまったのだと、はっと彼を見る。

無機質な瞳。それは彼自身を蝕む大きな絶望。
ああ、馬鹿だ。馬鹿だ私は。

「ちがつ」

「リストの愛の夢」

私の否定の言葉に被さるように夏目さんが呟いた。

夏目さんはピアノを見下ろして、一つ鍵盤に指を落とした。ポーンと静かに響く。

「有志くんから招待状を預かった時言われたよ。君のためにリストの“愛の夢”を弾くと」

言われて、有志さんが最後に弾いた曲を思い出した。

最後の曲は君に、と。マローさんに曲名を聞いても教えてはくれなかったあの甘やかな曲。

あれが、愛の夢という題名なのだろう。

だけど何故それを有志さんがわざわざ夏目さんに。

「牽制されたところで僕は到底かなわない」

僕は機械のようにしか弾けないから。と夏目さんはクスリと笑った。夏目さんらしくもない皮肉めいた笑い方だった。

そして、私に視線を戻して言う。ドレスとても似合っているね、と。

「君はとても綺麗になる。たくさんの人に影響されて、もつとずつと」

諦めたような、突き放した言い方だと思った。

褒められたって、ちつとも嬉しくない。

悔しい。悔しくて歯がゆくてたまらない。

私は有志さんから貰ったドレスをぎゅっと握りしめていた。

——君も、僕が怖い？

きみもと夏目さんが私を含めようとする領域。それはとても冷たい領域。

——人は受け入れられないことを知った時、とても絶望すると思わ

ない？

くやしい。

ぐっと喉に力を込めて、私は夏目さんを見据えた。

「私は…、たくさんの人に出会って、たくさん影響されたり影響したりして生きていきたいんです」

私は手を伸ばして、夏目さんの手を掴んだ。ぎゅっと力を込める。

「綺麗になります。だけどそれはずっと夏目さんの隣で、です。たくさんのおかげだろうと、たくさんの人のためじゃない」

言っている意味が支離滅裂すぎて自分でもよくわからない。

だって、夏目さん。私にはあなたが行かないでって言っているように聞こえる。

ずっと夏目さんがいなくなることを恐れていたのは私の方なのに。

「勝手です。夏目さんは勝手だ。私は、夏目さんが怖いなんて一度も思ったこと無い。怖がってるのは夏目さんじゃないですか」

どんなに恐れていても私は変わる。

変わるのを恐れるのは、この人が特別だから。

好きだから。

もう、誤魔化しようもなく夏目さんが、好きだから。ずっとずっと、出会った日から好きだったから。

どうか、否定しないで。私を否定しないで。

私ももう、自分の気持ちから逃げるのはやめるから。

私を映す青灰色の瞳が困惑に揺れた。

「怖がる…僕が？」

「夏目さんはいつもはぐらかしてばかり。本当の夏目さんは何処にいるんですか？」

「本当の、僕？」

「夏目さんを知りたいんです。だって私は
私は夏目さんが好きだから。」

そう言い終える前に、強い力で掴んだ手ごと引かれて胸の中に抱き込められた。

周囲にあった本の山の一部がばさばさと音を立てて崩れ落ちた。

強く引き込まれたにも関わらず、彼は壊れものでも扱うように私を抱き込める。

そのことが、私の胸をギュッと切なくさせた。

「…僕は、この部屋でずっと、ずっと一人だった」

表情は見えないけれど、何時になく頼りない声音だった。

「ずっと？ここで？」

この小さな、暗い空間で？

「ずっと待っていたんだ。僕はずっと」

ずっと、と夏目さんは繰り返す。

身体を包んでいた腕が離れて、夏目さんは私の両頬と包み込むように掬い上げた。

何処までも美しい顔が私を見ていた。

夏目さんが、酷く脆く感じる。

飄々としていて、何時も私を助けてくれる夏目さんが、私の中で何か熱いものが込み上げてくる。

彼の心は一体何に捕らわれているの。

「ごめん」

「！」

耳元で切なげに響いたその言葉。

唇に触れた感触。

思考も呼吸も全部、彼の薄く冷たい唇に奪われた。

途切れる呼吸、息苦しさ。

「っ…ふ…う」

もがくように、溺れるように、求めるように息が漏れた。

じわりじわりとお互いの熱が伝線する。

馴れない甘い痺れは私の中樞神経を麻痺させ、溶かしていった。

● 椎名SIDE ●

まるで興味など無かった。

全てのものに。

全てのことには。

でも本当は、

興味のない振りをしていただけかもしれない。

「すっ好きです。椎名君」

目の前で顔を赤くしそう言ってくる女子生徒。

自分はこの人物と面識があっただろうか。

いくら記憶を辿っても名前は疎か、顔さえ出てこない。

「あっあの。椎名君の冷静そうなところとかっ他の男子とちょっと違うところか素敵だなんてずっと思ってる」

言い訳をするように彼女は言った。

冷静そう。

他と違う。

それが自分の本質を象るものであるのかと問われれば、答えは否。自身を冷静とは思わないし、まして他と違うことを良いなどと思えない。

ただ、自分は自身が客観的であることを強く望んでいる。しかし、だからと言って、雑念が無いわけは無く。寧ろ、自分は物事に囚われやすい。

それを表に出さないから、他人には自分が冷静だと見えてしまうのかもしれない。

集中して考えれば考えるほど、思考は何処までも深く潜って、言葉に出すことが億劫になる。

自分の中で自己完結してしまう。

「あ、あの？」

また、自分の中に意識を沈ませていた。

目の前の存在をすっかり忘れていた。

少しの罪悪感と共に下方にあるその顔を改めて見た。

やはり、知らない顔だった。

じっと見ていれば、今まで赤かったその顔が見る間に青くなっていく。

まるで、リトマス紙のようだ、と思考が斜めに行った。

「つつごめんなさい。私、余計な時間を取らしちゃって。私、ただ気持ちを伝えたくて

それで……。本当にごめんなさい」

去って行く背中を眺めながら、また誤解されたようだと言息した。

ただ、彼女を見ながら考えていただけなのに。

気持ちを伝えて、自分に何を望むのか。

自分は何を望まれた？

虚像のような自分が好きだと言うのは何故。

此方は、呼び止める名前さえも知らないと言っのに。

SHの時間に、図書委員から読書週間というものが設けられる。生徒に少しでも本を読む習慣を付けさせようという試みらしい。15分という短い時間の中で、各自図書の本または持参した本を読むというものだ。

図書委員はその間、教壇の横の椅子に座らされる。

恐らく私語の無いよう生徒の監視役として、ということだろう。その日もまた滞りなく15分が過ぎ、終了の声を掛けようと顔を上げた時だった。

それは、見落としてしまうような、ほんの些細な出来事だった。出来事と言うのも可笑しい些細なこと。

一度も話たことも無いようなクラスメイト。彼女は読み終わったのか本を閉じると、裏表紙を指先でそつと撫でた。

只、それだけの動作。

それなのに、それは鮮明に目に焼きついた。

「夜彦。私たちが重んずるは何か、お前は理解しているのか？」

自分の挿した花の前、その人は静かに問いかけた。

自分とよく似た、顔。

椎名家の当主。父親であり師。

「花本来の美しさ。過剰でない表現力」

「そうだ。私たち椎名家が代々受け継ぐ流派は、花本来の美を生かすことに重きを置く。過剰な演出や独自性など必要ではない。お前は、己を前に出しすぎる。これでは花本来の風情は失われるだろう」と精進しなさい。と表情も無く否定された。

求められる作品を造ること。

それは己の個性を殺すこと。

それならば、自分が挿す意味など…。

喉が焼けつくように熱いのに、吐き出す言葉はこの厳格な人の前では一つしか無い。

「…はい」

ああ、霞んでいく。

目前の生けたばかりの白ユリが、本来の白さに反して、くすんで見えた。

幼い頃は只、花を生ける事が楽しかった。

花器の中に広がる自分だけの創造世界。

鮮やかに美しく広がって行く。

意味など考えるまでもなく、ただ愛で、励むことが出来た。

疑問を感じ始めたのは何時からだろう。

恐らく「椎名」の名を意識しなければならなくなってから。

華道家として世に出る事も増える。それは、名誉を得ると同時に重い責任を負うということ。

椎名の名を受け継げば、自分は求められる姿でそこに収まることになるだろう。

型を守り、それを貫く。それもまた、多大な努力を費やさなければならぬことだ。

しかし、時折思うのだ。

そこに在るべきは、自分でなければならないのか、と。

「あら坊っちゃん」

父の部屋から退室したところで家政婦の田中さんが、にこにこ話しかけて来た。

長年勤めている彼女は、未だに自分を坊っちゃんと呼ぶ癖がある。

「今日も奥様はいらっしゃいませんが。いかがなさいますよう。夕餉は旦那様と？」

「……部屋に」

「はい。かしこまりました」

自分の端的な物言いにも慣れている彼女は、あっさりと要望を飲み一つお辞儀して去って行った。

もう、家族で食事をとらなくなつて随分長い。

厳格な父、奔放な母。

怨むことも嫌うこともしないが、二人は家族というには、とても遠い存在だった。

それが普通では無いと、何時頃気付いただろう。

白い襖を開き、無機質で殺風景な自分の部屋に入る。
しん、と静寂が耳に痛い。

窓辺にある机に近づき、一番上の引き出しに手を掛けた。
何冊ものノートの束。

何時から書き始めているのかすら、もう憶えていない。
言葉の足りない自分は、書くことをその捌け口とした。
文字にすれば、まるで急流の如く言葉は溢れ出す。

他愛も無く取り留めの無い言葉は流れる様に紙上を流れ、やがて一つの話となる。

言葉を紡ぎ、一つの形にし、それを繰り返す。

魂の浄化をするように。

書かれたそれらは、誰の目にも触れられることなく、こうして引き出しに溜まっていく。

何れにせよ、厳格な父がこれを知れば、恐らく好い顔はしないだろう。

馬鹿げた自己満足に時間を割く余裕があるならばもつと精進しろ、
とでも言うだろうか。

いつそ、自分の手で燃やしてしまおうか。

己の執着を燃やせば、椎名に相応しい花を生けることが出来るだろうか。

やり場のないこの感情を昇華出来るだろうか。

そんな考えと共に一冊ノートを取った時、それは脳裏を過った。

裏表紙を撫でる指先。

まるで、物語の余韻を味わうような、慈しむような仕草。

あの指先。

あんな風に、撫でられた物語は、さぞ幸せだろうと。
そんな事を思った。

笹野葵。

あの指先の持ち主。

クラスで目立つ事も浮く事もしない、ごく普通の女子高校生。
クラス内で彼女は、明るく人好きのする生徒だった。

ただ、気にかかるようになって気付いたことだが、彼女は時折、ここではない違う場所を見る様な、妙に神秘的な表情をする。その瞬間の彼女は何処か近寄り難くも感じてしまう。

そんな風に彼是と彼女を気にするほどには、あの指先が頭を離れなくなっていた。

「ねえ葵は何読んでるの？葵もハーレクイン？それともコバルト？」

「違うけど。“も”って事は四季子はそうなの？」

「ちっちゃがうわよ」

「何で焦るの？」

それは読書習慣最終日のSH後に不意に聞こえて来た会話だった。

「井伏鱒二の山椒魚」

「へー。葵ってそゆの読むんだ」

「何で不満顔？」

「何か葵のイメージじゃ無いっていうか…。あれ、図書の本じゃないんだ。自分の？」

「ん？んー」

私ではないんだけど。と彼女は曖昧に答え微笑んだ。
またあの表情だ。

そして、愛しむように本を撫でる。

何故か、はっとするくらい彼女が纏う空気が変わる。

井伏鱒二の山椒魚。

山椒魚の滑稽だけれど物悲しい話。

岩場に嵌った山椒魚。孤独に耐えかねて捕らえた蛙。

何年も何年も、暗い岩穴で二人ぼっち。

山椒魚に投影された、人間の奥深い心理。

とても有名で興味深い名作だ。

彼女はそれ程に、作品に感銘を受けたのだろうか。

彼女の指先の動作は、作品を思ってた？

あるいは、それを貸した人物だろうか。

また、余計な詮索をしてしまう。

指先が、彼女が、頭から離れない。

放課後、図書委員の仕事をしていた時、図書室で彼女を見た。

何やら真剣な様子で本に向かい、ブツブツと小さく呟いている。

図書室には、ほぼ人は無い。

注意するほど煩くも無かったが、何を読んでいるのか興味を惹かれ
側に向かった。

「思えば、なんてことのない出会いだなあ。大体、兄はあの頃から、

夏目さんに恐れを？」

「さっきから、ブツブツ正直不気味」

「おわつ。椎名君！」

自分の突然の出現に驚いたらしい彼女は、大きな声を出した。

自分の名前を知っていたのか、と思いながらジッと見ると、少し強張った表情になる彼女。

それはそうだろう。クラスメイトとはいえ、自分は初めて彼女に話かけたのだから。

元より、話すことが苦手な自分は話す糸口を既に無くして、つい図書委員として彼女に声を掛けてしまう。

「図書館では静かに。これ基本」

「あ、うん。ごめんね」

驚かせたのは自分なのに。

彼女にすまなさそうに謝られて、更に自己嫌悪に陥る。

どうにか話を続けようと、彼女の読んでいる本に目を落とした。

花図鑑？

「花に興味が？」

「や、えつと花ことばを……」

しどろもどろに、少し頬を染めて話す姿が何だか可笑しくて。

「…超、おとめ」

気がついた時にはそう言ってしまった。

29話：夢と現実の狭間

触れて離れて、波のように押し寄せる。

溺れあうみたいな行為。

悶ぎ立てては、熱くなる。

息つく暇が無くて苦しい。目眩がするくらい全身が熱い。

そんな感覚を初めて知った。

初めてのキスは私が知るどの感覚よりも鮮烈で、ひどく甘美だった。

暗い。闇の中。

夢の中をたゆたうようだ。不思議と不安は無い。
ゆらゆら、とても気持ちが良い。

「・・・おい」

ああ、誰かが呼んでいる。

「ああい」

私の名前。

葵の花はね、まあいい花をたくさんつけて、真っ直ぐ太陽に向かって・・・。

「葵!!」

急に視界が明るくなった。
ぱつと急速に意識が覚醒する。

「お前、いつまで寝てる気だ」

見上げた先で、兄が呆れ顔で私を見下ろしていた。
ぱちぱちと瞬く。

え、

なんで。

ぐるりと周りを見渡す。

どう見ても完全に私の部屋だ。
愕然とする。

どうして。

昨日の夜、夏目さんとあの本とピアノの閉鎖された部屋で……。

「うそ。夢落ち?」

「お前、寝ぼけすぎだろ」

「どっから夢? ねえ、どっから?」

混乱する私はベットから転げ落ちる勢いで、兄に縋り付いた。
私の迫力に押されてか若干兄の顔が引いている。

しかし、そんなこと気にしてられない。

今の私の心情は、ドラマの重要シーンでチャンネルを変えられた時に酷似している。

ぽつかりと投げ出されてしまったように朝を迎えて、自分でも何が何だか分からないのだ。

ぐるぐるする頭の中で、記憶を反芻してみる。

昨日は有史さんのピアノ聞いて、それから夏目さんに会いたくなつて、

そしたら隠し階段が出現。それでそれから夏目さんと、きつ……。

「う、うわああ」

「うおっ!？」

兄に縋り付いたまま、ずるずると腰を落とした。
と言つより腰が抜けた。余りの羞恥に。

うそ、あれ夢なの？

な、なんてことだ。

夢にしては生々しすぎる。

私、欲求不満なのか。

何てことだ。

大切な夜だった。

それが何一つとして現実では無いかもしれないなんて。

皺になるのも構わず、兄のズボンをぎゅうつと握ってしまう。

若干腰がひき気味だった兄が気遣わしげに私の頭にぽすつと手を置いた。

「……葵？」

ああ、もう最悪。

何が最悪なのか分からないけど、とにかく最悪な気持ちだった。
希望を探すように私は視線を彷徨わす。

視線を落とした先に七色のものが視界に映り込んだ。
それは力チリと光る転がり落ちた金平糖の瓶。

何処までが現実なんだろう？

兄の話によると、昨晚有史さんのピアノを聞いた後テラスで飲んだ
ジュース・・・もといアルコールに酔った私を兄が背負って連れて
帰ってくれたらしい。申し訳なさ満載だ。

まさか、あれがお酒だったとは。なるほど確かに、昨夜はやけにフ
ワフワ心地だったな。

そこまではいい。私的にはその後のことが重要だ。

昨晚、夏目さんの店に行ったのかどうか、ということ。

兄の証言によれば、辛うじて意識があっただけらしい私は、皺になると
いかん。と言つて律儀にもワンピースを脱いでパジャマでベットに
入ったらしい。

めでたし。めでたし。ではなくて問題はそこだ。

昨晚夏目さんに会いに行った時、私の記憶では私は有史さんから貰
った服を着ていた。

何故？起きてまた着替えた？やっぱ夢を見ていた？

けれど、と心が反抗する。

そう言ってしまうには昨夜の記憶は余りに鮮明だった。

君も僕が怖い？と尋ねた声。

抱き寄せられた時の腕の強さ。

唇に触れた感触。

今まで知ることの無かった夏目さんが、そこにはいた。

暗く狭い部屋で、彼はとても孤独に見えた。

彼の弱さを垣間見た気がした。

彼の秘密に少し近づけた気がした。

夢だと言ってしまえばそれまでかもしれない。

けれど、好きだと。この人を離してはいけないと思った私の感情まで否定してしまいたくない。

この気持ちを無かったことにはしてしまいたくなかった。

嗚呼、夏目さん……。

掴んだと思えば遠ざかる。霧のようで心許ない。

昨日触れた唇の熱さえ、遠い。

現在空港にて、有史さんたちの見送りに来ている。

昨日の今日でびっくりだが、彼らは早々に日本を発つらしい。

小松親分は店を空けないということで、兄と私で彼らの見送りに来たのだ。

私が「昨日はお酒に酔っていたようで、不埒な言動をしていたらすみません」と謝ると、有史さんは実に微妙な顔をした。

何やらかした昨日の私。

「それじゃ、短い間でしたけど」

「また会おうネー」

アナウンスが響き、ライアスさんとマローさんが私たちにつこり

と別れを告げた。

私もそれに、元気でと応えつつずっと黙りの有史さんを見た。何処かふて腐れたような顔に、私はかける言葉を探した。

「・・・あつ！愛の夢」

とっさに出た言葉。

私の呟きに有史さんが目を瞠って私を見る。

「昨晚の、私につて弾いてくれた曲、愛の夢って題名なんですね」

確信を持って確かめるように言うと、有史さんは目を泳がせた。そして、ばらしたなとでも言うようにマローさんを睨む。

マローさんは、ボクじゃあないよー。とそれを暢気にかわした。

「ふふつばれちゃいましたねユーシ」

「はてさて、ユーシその心ハー？」

「なっべつ別に意味など」

ライアスさんとマローさんがにやにや問いかけて、有史さんは顔を赤くする。

リストの愛の夢。

それは昨晚の夏目さんがそう言った。

昨晚が夢でないとしたら。

彼の言葉一つ一つの意味とは何だろう。

- 牽制されたところで僕は到底かなわない。

「牽制」その意味が分からないほど馬鹿ではない。

だけど、と思う。有史さんが？なぜ夏目さんに？嫌われこそすれ好かれてるなんて誰が思う？

確かに最初の出会いよりは、ずっとマシな関係になったと思うけれど。

彼の感情が、いっとう変わったのか分からない。

うーん。と思っているとライアスさんが内緒話のように耳に顔を寄せて来た。

「因みに葵さん。」

「？はい、」

「男が女性に服を送る意味はご存じですか？」

妙に艶めかしい声で耳元で問われ、ぞくつとした。

「あっはっ。ユーシ意味しーん。エローい」

「ばっ！！もう行く！」

私が無言で答える前に、聞いていたらしいマローさんが爆笑。

エロって。

有史さんは、にやにや笑う2人を引き連れて「また」と赤い顔で一言告げると去って行った。

何かちつとも別れっぽくならなかったな

別れは嫌いだ。感傷的になるのも。

有史さんは、さよならでは無くまた、と言った。

また会えるなら、その時間こうか。

愛の夢に乗せた気持ちと牽制の意味を。

ずるいかもしれないけれど、今はまだ見ないふり。

私も夏目さんへの気持ちで一杯一杯だから。

今はただ、この気持ちだけは夢では無いという自信がある。

ただただ、今この時でさえ夏目さんが恋しい。

私は苦笑しながら、隣の兄を仰ぎ見た。

何故かひどく不機嫌そうな顔をしている。人一人殺せそうな殺気だ。話しかけたくない。だけど一つ。どうしても分らないことが気になる。

「・・・ねえ。男の人が服を送る意味って？」

「・・・俺に聞くな」

「・・・」

兄は苦虫を噛み潰したような顔をして低く唸るように返した。

30話

空港からの帰り道、兄とゆっくり土手道を歩いていた。休日のためか、川の畔に家族連れの姿が多く見られた。

駆け回る子供たち、川の方に行っちゃだめよと注意する母親。息子とキャッチボールをしている父親。

日増しに寒くなる季節、ポケットに入れた指先は冷たい。けれどああ、暖かいなと思う。

吐き出す息は白いけれど、それらの姿に羨望にも似たジワリとした気持ちが入み上がる。

何処か鼻の奥がつんとするような気持ちになる。

「葵」

呼びかけられて、ゆっくりと兄を見た。

少し先にいた兄が何処か気遣わし気に私を見ていた。

どうやら歩を止めてしまっていたらしい。

私は目を細め兄を見て、口を開いた。

「今日の晩ご飯何？」

「もう、夜の心配か」

兄が呆れたように笑った。

「私、お兄の茶色いおかずが好きだよ」

照れが生じて、つい昔みたいにお兄、と呼んでしまった。兄はそれには何も言わず、茶色いは余計だと笑った。

兄の所まで歩を進めた私の頭に、ぽんと大きな手が置かれる。

「そうだな、今日はひじきだな」

私の髪にヒジキを連想したのか、兄は思案するように言った。

「茶色いを通り越して黒いおかずだね」

兄に頭を撫でられながら、私は俯いたまま言った。

別れは嫌いだ。

だからつい感傷的になっているだけだ。

兄は私の弱さを知っている。

私は、ひどく変化を恐れる。

だからこんなにも、暖かく私を気遣う。

お兄、私は変わるだろうか。

私は何時でも変化を恐れる。

平凡な幸せに全てを覆い隠して、今に妥協する。

勇気がない。

自分から切り開く、未来に自信を持ってない。

恋心を自覚した今でさえ、怖いのだ。

夏目さんと私。ずっと、ずっと積み重ねてきた静かで幸せな時間が

“恋愛”という焦がれるように熱い

熱に奪われてしまう。

失いそうで怖い。

手に入れる自信もない。

夏目さんと私。ずっとずっと変わらなかった関係を私から変えることが出来るのだろうか。

「夕飯までには戻るね」

兄の乾燥ひじきを水に戻す背中にそう告げて、私は家を出た。
めざすは、もちろん古本屋。

私は、今までに無い緊張感とともに歩を進めた。

ひとつ深呼吸をして、カラリとその戸を開ける。

「夏目さん」

「葵ちゃん。いらっしやい」

分かってはいたけれど、彼はいつものように私を迎え入れた。
まるで何事も起きていないかのように振る舞う、いつもの飄々とし
た夏目さん。

嗚呼、やっぱりこの人は無かったことにしてしまうのだ。
抱きしめた腕も、触れた唇も、全部。

ゆるりと微笑む夏目さんを前に、私はじつと彼を見つめた。

きれいな人、綺麗な人。

踏み入れてはならない私のただ一つの聖域。
ずっと諦めていた。決して手に入らない人だからと。

何時もの場所に座ろうとしない私に、夏目さんは首を傾けて私を見
た。

蜂蜜色の髪がさらりと揺れて、青灰色が私を映す。

その目に負けそうになる自分を叱責し、私は核心に迫るべく口を開いた。

「昨晚、私どうやって帰りました？」

どうか、夢にしてみわらないで。

夏目さんは無表情に私を見て、ゆっくりと一つ瞬いた。

髪と同色の長い睫を追うが、それは伏せられたまま私に戻っては来なかった。

少し困ったように笑う彼の口から、何かはぐらかす言葉が出る前に呼びかけた。

「夏目さん」

私をみて。はぐらかさないで。

そんな気持ちを込めて強く呼ぶと、ひとと青灰色の瞳が私を映した。冬の湖みたいな瞳。

彼から微笑が消えていた。ビスクドールのような整った顔に心臓が跳ねる。

見て欲しいと願ったはずなのに、その瞳に映されると冷静でいられなくなる。

自然と呼吸が速まる。熱が顔に集まる。

見ないで欲しい。見て欲しい。

矛盾した気持ちで心を占領した。無言の空間を破るように、夏目さんの滑らかな手が私に伸びる。

私は身を固くした。

いつも撫でられることを期待しても、身を震わせるほど意識したりなどしない。

無意識に触れて欲しいと心が叫んだ。

ぎゅっと目をつむって、髪に触れる感触を待った。ただ、いくら待ち望んでもその柔らかな感触はやってこない。そっと目を開くと、困惑に揺れる青灰色とぶつかった。

かあつと顔が赤くなる。

見透かされた。

見透かされたんだ。

何を、と考えるまでもなくそう思った。

触れて欲しいなんて、ひどく恥ずかしいことを思った。

青灰色の瞳はそんな私の欲望を汲み取ってしまったのではないだろうか。

触れることを戸惑うほどに。

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。

恥ずかしくて悲しい。小さく消えてしまいたい。

「今日は、も、帰ります」

小さくやつとそれだけ呟いて、私は夏目さんに背を向け店を出た。戸を閉めて、その場にしゃがみ込んで小さく蹲る。

恋をすると、自分が世界一恥ずかしい存在に思えてしまう。

世界一恥ずかしくて滑稽で、苦しくて死んでしまいそうになる。けれど、それ以上に欲深く滑稽な自分がいる。

「引き留めてほしいなんて、」

呻くように呟いた声は膝を抱えた腕に吸い込まれた。

引き留めて欲しいなんて、何処までも私は馬鹿だ。

夏目さんは何も言わない。

彼は、いつだって私を引き留めたりしない。

馬鹿だ。

期待する方が馬鹿なんだ。

駆け引きなんて出来るはずもない。

31話

掬い上げて欲しい。

私の気持ちをどうか掬い上げて。

欲しい欲しいと望む私は結局ただの我が儘な子供。

自分からは変化を怖がり、何時も何時でも他人任せ。

現状を自分からはぶち壊せない。

いざという場面で尻尾を巻いて逃げ出す名も無い脇役B。

「はああ〜」

どんどん思考がネガティブになって行くのを止められず、大きく息をついた。

出て行け、幸せではなくてネガティブ思考！

古本やを飛び出して帰るに帰れなくなった私は、公園で暇を持て余していた。

ブランコの鎖をギュツと握って地面を蹴る。

キイキイと揺れながら私は公園を見渡した。

だんだんと日が短くなっていく季節、あたりは薄く暮れがかつていた。

もう帰ろうと、迎えにくる母親。

今日のご飯は何と尋ねる子供。

じゃあね、またね、また明日。そんな温かな掛け合い。

昼間見た光景のように心がじんわりするような、そんな光景だった。けれど今の私には、それさえひどく辛かった。

キイキイと一人ブランコを漕いで、私一人が取り残されていく。

いたい、私は何をやってるんだろう。

有史さんと缶ジュースを飲んだこの公園。彼はあの時とても輝いて見えた。

目標に向かって真っ直ぐまっすぐ立っていた。

私といえば、何処にも行けずこんなところで時間を持て余していて、ひどく自分が情けない。

中途半端だ、何もかも。

核たるものがない。

揺るぎないものがない。

欲しい。欲しいと思うばかりで手を伸ばすことも出来ない。

傷つくのは怖い。怖いのは、きっと自分に自信がないから。

私には何もない。

そんな私に夏目さんの隣に立つ資格なんてあるのだろうかと思う。好きでいることでさえ、ひどく烏滸がましいことのように感じてしまう。

駄目だ、また卑屈になってる。

緩く首を振って思考を振り払い、ざざと地面に足をつけて止まった。

そのままボンヤリと公園を見つめる。

犬の散歩をしていた最後の一人が公園からいなくなって、公園は不気味なほど静かになった。

ギ・・・と握った鎖が鳴る。

不意に、じわりと視界がぼやけた。自分でもぎよっとする。

今日の私、情緒不安定すぎる。

私の中に眠る小さな闇が、ムクムクと膨れあがっていくを感じる。

変わろう。変わりたい。そう決意した。

だけど、どうしたって私は変化を恐れる。
私には欠陥がある。それはずっと、ずっと目をそらし続けてきた小さな棘。

人は変わる。どう足掻いても。

だけど、その変化が絶対的に良い変化とは限らない。
たとえば、別れ。

ああ、もう目を逸らせない。

知らないふりをしていれば、平気だった。
だけどやっぱり、見ないふりも、もう限界。

別れは嫌いだ。感傷的になる。

私は、変わることを恐れる。

それは夏目さんとの関係においてだけでなく、もっと根本的で深く私に根付いているもの。

昔から、ずっと心の奥に燻っていた黒く悲しい感情。

両親は、もうずっと、ずっと不仲だ。

兄が夕飯作りを始めるもうずっと前から。

昔は喧嘩が絶えなかったけど、今では冷戦状態が続いている。

二人ともお互いを避けるように仕事に出て、家に帰って来るのも夜遅く。

帰って来ない日も多い。

親子仲は別に悪くない。

どちらかが帰っている時は、話をしたりもする。

最近はどう？とか、お金は足りてるか？とか、それぞれで心配してくれる。

だけど、4人全員がそろそろ食卓なんてもうずっと無いに等しい。二人はお互いを避けるだけでなく、私と兄までも置き去りにしてしまった事に気付いていないのだろうか。

幼いとき私は、二人は離婚してしまうのではないかと何時も危惧していた。

そしたら、兄とも離れ離れになってしまいかもしれない。それなら、最悪今のまま変わらないままでいい。変わらない方が良

い。

4人仲良くななくても離れ離れになるよりは、歪でも家族でいられたらそれでいい。

年を追う毎に、私はそう思うようになった。

変化は嫌い。別れは怖い。

分かってる。子供なのだ私は。

兄も同じに辛いはずなのに、彼は私の親代わりをしてきている。

兄はいつの日にか夕食の神になった。

兄は4人分の夕食を必ず作る。

いつ帰るとも知れない2人の分の夕食。

兄は、何時も茶色いおかずを作る。

和食は両親の好みだから。

もう記憶に遠いずっと昔、4人で囲んだのは何時も和食だった。

兄はずっと、家族を取り戻そうと一生懸命だったのだ。

私はずっと、見えないふりをしていた間、ずっと。

ぼたり、ぼたりと涙が溢れた。

幼い頃、兄は今のようにな私を気遣ってはくれなかった。

どちらかと言えば、邪険にされることも多かった。当たり前だ、彼もまた子供だったのだから。

——うるさい。まだ宿題があるんだ。

——バーカ。お兄のガリ勉！もやし！

そうだ。

兄が私に対して変わり始めたのは、あの日だ。

夏目さんと出会ったあの日。

兄に構ってもらえず、癪癪を起こして家を飛び出した。

何でも出来る兄に劣等感を覚えたなんて建前だ。

本当は、ほんとうはずっと迎えに来て欲しかった。

ねえ

お母さん。

お父さん。

葵を見て。

葵に気づいて。

葵のことを探して。迎えに来てよ。

本当はそんな単純な、でも大切なシグナルを伴った家出。

そこで、夏目さんに出会った。

——おやあ。何をしているの？

あの日、彼は、神のように美しく見えた。

私の唯一変わらない宝もの。

あおいの王子様。

ぽとと膝に水滴が落ちる。

ああ、もう大洪水だ。

ぐじぐじと鼻を嚙りながら、子供みたいに泣く。

迎えにきて。

誰か。

だれか。

私を救い上げて。

32話

誰もいなくなった公園にギギギとブランコの錆びた鉄の音だけが響いていたのに、不意にその寒々しい静寂を砂を踏む音が打ち消した。その音はまっすぐ私に向かい、そして目前で停止する。

視界に移る靴から、ゆっくりと視線を上げると、予想もしていない人がそこに立っていた。

「なん、で」

「通りかかって」

白い息をはきながら、椎名君が無表情に言う。

私はすぐに下を向いて涙を隠した。

泣き顔が許されるのは、二次元と美人と相場は決まっているじゃないか。

私の泣き顔なんて人様に見せれるものじゃない。

すると、空気の動く気配。

ふわりと視界をふさぐ熱。

「泣いて」

椎名君は私を抱きしめてそう言った。

「こんなとき、泣かないでって言うものじゃない？」

驚いたのと気恥ずかしいのとで、鼻声ながらそんな憎まれ口が飛び出した。

「我慢、だめ」

椎名君は端的な、けれどひどく優しい言葉を私肩先でとつとつと囁いた。

「見ないから」

泣いて、と椎名君が繰り返す。
そんな風に、いたわるように囁かれて。
もう、我慢できなかった。

「うつ・・うつ・・うええん」

ああもう、遠慮もなく泣きましたとも。
子供みたいに声を上げて、がむしゃらに。
ただがむしゃらに。

声が枯れるまで泣いた。
えぐえぐと、えづきながら泣いた。
全力で泣くって意外と大変。
すごくぐったりなる。

精根尽き果てるまで泣いてしまった私。
もう、出る水分ありませんって感じです。
さらにはこれ以上の恥もありません。

すっかり涙が収まったところ、ゆつくりと椎名君の腕が解かれる。

うん。シャツを汚してたらごめん。

ていうか。確実に汚してる。

なんか本当にごめん。

声を出す元気も無く、ぐったりと俯きながら、心の中で謝罪を繰り返している、極々近い距離で顔をのぞき込まれた。

やめて欲しい。

ひどい顔に決まっている。

もう二次元、美人どうののレベルじゃ無いよ。

ガチ泣きだもんね。

私は隠すように腕を顔の前に持って行こうとしたけれど、どういうわけかその手を椎名君にやんわりと阻まれた。

な、何故だ。

羞恥攻めか！

私は椎名君を恨めがましく睨むが、目の前の感情の伺えない彼は微動だにしない。

ただその湖面のように凧いだ瞳に私を映していた。

その深い瞳に絶えきれず、私はぎゅっと目を瞑る。

すると、見計らったかのように瞼の上から暖かな何かに触れられ、私はぎゅっと目を見開いた。

「な、」

「からい」

目の前の鉄面皮が無感情にそう言う。

ちらりとのぞいた赤い舌が妙に艶めかしくて、いたたまれないのに視線を逸らせない。

舐めた。この人舐めた。

予測不能な椎名君の言動に私の感情はついにショートしてしまったらしく、

「あ、ああ。涙だからね」などと普通に応えてしまう始末。

「からいとつらい・・・同じ字」

椎名君は私をじっと見た後ポツリと言った。

「全部出た？」

「う？」

「つらいの全部出た？」

そう言って首を傾げる椎名君。

「・・・」

「・・・」

お互いしばしの無言。

あ・・・。

ああ、そっか。

そうだね。

声を上げて泣いて、「辛い^{つらい}」の出ていけ。

「辛い^{から}」涙と一緒に出ていけ。

さっきの瞼へのキスが、そんなおまじないのようにも思えてきた。

「ふふ」

何でか知らないけど込み上げるように、ふふつと笑ってしまっていた。

『あーほら痛かったねえ。痛い痛いのとんでけ』
『あらあら。ないたカラスがもう笑った』

記憶に埋もれていた言葉が蘇る。
父も母も兄も笑っていた。

うん。大丈夫。

覚えてる。こんなにも暖かい。
大丈夫。

私が急に笑ったからか、目の前の椎名君がちょっとだけ目を見開いて、
それから、ちょっとだけ表情をほころばせた。

椎名君の無表情が崩れる瞬間が好きだ。
そんなことを、言葉も無く思った。

椎名君は無表情で言葉も少ない。
だけど。だからこそ、少ない言葉の一つ一つに重みがあつて、少しの表情の変化に敏感になる。

最初の頃は無言を居心地悪く感じていたけれど、今では不思議とそれがない。

寧ろ、なんだか・・・心地いい。

「自分は、笹野さんに・・・救われたから」

椎名君は私の横のブランコに移動しながら、ゆっくりと囁くように話した。

ポツリポツリと途切れながらも文章になる彼の言葉に私は静かに耳を傾けた。

彼は言う。私に救われたのだと。そして。

「指が、」

そう言って、伏し目がちに私の指を見つめた。

「本を撫でる、指に惹かれた」

「本を、撫でる・・・私そんなことしてた？」

無言で頷く椎名君。

・・・全くの無意識です。はい。

「ぎゅって」

「へ」

「ぎゅってしたとき」

無表情に椎名君が続ける。無表情で「ぎゅっ」を連発する彼が何故だか可愛らしく見えてしまう。

前は彼のギャップに恐怖していたはずなのに……。

椎名君が可愛く見える時が来るとは……。

私が脳内でギャップ萌の恐怖と戦っている傍らで椎名君は続ける。

「髪を、撫でてくれた」

ああ、あの時だと思い出す。

椎名君を裏庭に呼び出して在らぬ誤解を受けたあの時。

ひんやりと外気に冷やされた髪感触を思い出して「うん」と私は頷く。

「なにより、救われた」

椎名君はまっすぐ私を見る。

「欲していた以上のものをくれた」

言葉が詰まる。

救われたと言う椎名君の言葉に私もまた、救われる。

お互い何も重要な部分を口に出すことなく。

不幸の比べ合いなど無しに。

ただ抱きしめ、抱きしめられ。

魂を励ます。魂で寄り添う。

私は、不思議な感動に心を震わせながら、泣き尽くした不細工な顔で、それでも精一杯の笑顔を浮かべた。

椎名君はくろすぐり色の深い瞳を一つ瞬かせる。
物質的な距離は変わっていないのに、その瞬き一つでまた一歩近づいた気がした。

「今は、指よりも」

椎名君は、その先は言わなかった。
私も聞き返しはしなかった。

お互い何も言わずに空を見上げた。
キイキイとブランコを揺らして。
空中を泳いでいるみたいだと思った。

「遅い」

家の玄関の扉を開けると兄が仁王立ちしていた。ひよこエプロンで
もうとつくにヒジキの煮物はできあがっていたらしい。

「ごめん」

此処は素直に謝る。

兄は、ふーとため息をついた。

「で、」

触れたくないが、触れられずにはいられないといった様子で、兄が
私の背後を指さす。

「お前の背後にいる無表情は人間か？お前、背後霊拾ってきたんじゃないねえだろうな」

失礼な兄だ。

た、確かに一言も言葉を発さず、無表情の彼はちよつと・・・結構怖い。

「同じクラスの椎名君。偶然会って、送ってもらったのです」

「こんばんは」

私が紹介すると無表情でそう言ってぺこりとする椎名君。

「・・・」

「・・・」

じつと見つめる兄。見返す椎名君。

え？

な、長くない？

なんでこんなに見つめ合ってるの？

ええー。何この二人。

だから何で無言で見つめあってたんのー！

焦る私をよそにしばし見つめ合っていた二人。

だが不意にフツと兄が笑う。

何処か達観したニヒルな笑い方だが兄よ、使い所間違っているぞ。

「椎名か・・・まあ良いだろ。お前晩飯食っていけ」

「え、なぜそんな展開に？」

まあ良いって、何が良いんだ兄よ。
いったい何を理解したんだ。

無言で見つめ合っていたようでいて、実はテレパスしてたのか？

「ごちそうになります」

椎名君もめっちゃ乗り気ー！。

そそくさと、携帯を取り出し、家政婦の田中さんに夕食はいらないと告げる椎名君。

「ははは。実はヒジキを水にもどしすぎてな。ありえんほど多量だ」

ちよ、兄！最後めっちゃ真顔！多量のところ笑えてないから！
ぜったい消費目的で誘ったでしょ！好意でも何でも無いでしょ！

「ひじき・・・好き」

「そつかそつか。たんと食べよ」

ええええええ。なんだこの展開。

「葵」

椎名君へ先に居間に上がるよう促した後、玄関の外で未だ戸惑う私を振り返る兄。

「泣いたのか」

疑問ではなく、そう問いかけてくる。
その瞳はとても優しい。

「っ」

「うおっ」

思わず、兄の腰にしがみついた。
やっぱり腰が若干引けている兄にプツと笑う。

「お兄？」

「ん？」

「おにいが、おにいで良かった」

「ははは。何を今更。こんなグレイトな兄はそうそう居まい」
照れ隠しなのか何なのか、兄がぐしゃぐしゃと私の頭を撫でる。

「なあ葵。俺は今の生活をそんな悪いもんとは思ってないぞ」

料理だって今の時代できた方が男はモテる。そう言って笑う兄。

「お前はどうか知らんが、俺たちは中々良い子たちだし」

「うん」

突っ込みたくはあるが、ここは素直に頷いておいた。

「子は銚かすがいと言うし、俺たちが笑って、楽しく過ごしてれば大丈夫だ」

「うん」

「な？だから泣くな。・・・ほら、ヒジキが家で待ってるぞ」

あれだけ泣いたのに、一つ零れ落ちた涙を兄が手の甲で拭ってくる。
かなわないなと思う。

私には迎え入れてくれる手がこんなにあるのだ。

それは、涙が出るほど嬉しいじゃないか。

兄と二人居間に上がると、ちょこんと正座して座っている椎名君と、
・・・黒々しい恐ろしく大量に盛られたヒジキが私たちを待っていた。
た。

33話

ヒジキを3人で限界までもりもり食べた。
食べている途中兄が、

「ヒジキって何か、虫の足っぱいよな」

とかふざけたことを抜かすものだから一発殴っておいた。

食欲減退するようないいな！

それだけでなく多量だというのに！

女子高生の想像力なめんな馬鹿者。

椎名君は兄の言動や兄妹の見苦しき乱闘にもめげず、始終無表情にヒジキを口に運んでいた。

さすがに途中心配になって、美味しい？て聞いたときだけは箸を止めてコクリと頷いてくれた。

よ、よかった。なんかヒジキ消費マシンみたいでちょっと怖かったのは内緒だ。

玄関先で兄と二人椎名君を見送った後、ふと私は思い出してしまった。

私は思い立ったように二階に駆け上がった。

目当てのものを手に取ると急いで階段を駆け下り、さっき椎名君が閉じた扉に手を掛けた。

「おい、葵？」

「すぐ戻る！」

兄の不審気な声を後ろ手に聞きながら、私はまだ遠くないピンと伸びたその背中を追った。

「椎名君！」

「？」

ゆっくりと振り返った椎名君が息を切らす私に首を傾げる。
私は手に持っていたそれを差し出した。

「これ」

ずっと借りっぱなしだった椎名君の小説。

夏目さんに見せても良いかと尋ねた後も結局、今日の今日まで私が持っていた。

快く頷いてくれた彼には申し訳ないけれど、それもしばらく果たせそうにないと思ったのだ。

「ずっと借りっぱなしも悪いし、椎名君、夏目さんに見せてもいいって言うてくれたんだけどさ、その」

歯切れ悪く、言葉を逃がす。

私は、逃げていたかった。

夏目さんと私が今まで築いてきた関係が崩れるだとか。
感情の変化が怖いとか。

夏目さんとの壁がもどかしいとか。

全部真実で、そんなの言い訳だ。

只怖い。

夏目さんに嫌われたかもしれないことがとても怖い。

また、あの手が私に触れることを戸惑ったら・・・。

そう思うと、私はあの人に会いに行くのさえ怖くなってしまったのだ。

夏目さんのことを考えると、胸がぎゅってなる。

触れたい。触れて欲しい。

だけど。

触れる寸前躊躇した掌とか、戸惑うように揺れた瞳が、何度も何度も蘇っては私を追い詰める。

認めたくない。

彼の拒絶を思い知らされたくない。

自覚したばかりの淡い恋をまだ守っていたい。

「ごめん。夏目さんと、しばらく会えそうにないんだ」

溜息のような重い言葉を吐き出した。

私は彼から逃げる。

違う。

彼は私を追いはしないのだから、これは恥ずかしい私の現実逃避だ。拒絶されたらきつと、今の私では平気なふりなど出来はしない。

夏目さんの前でこれ以上醜態を晒すくらいなら、しばらく会わない方が良いと思う。

凄く会いたくて、凄く辛いけど、会ってまた傷つきたくない。

今はまだ、思い知らされたくない。

せめて、平気なふりが出来るまで距離を、置こうと・・・。

椎名君はしばらく黙って私を見た後、そっと手を伸ばした。

けれどその手はノートを受け取ることなく、そっと私の手に触れた。

「いい」

「え」

「特別は、貴女だけ」

何度も彼から発せられた“特別”が、今になって妙に現実味を帯びて私の動揺を誘った。

告白めいた台詞だと、今更ながら思う。

「笹野さんが持っていて。好きにしていいい」

そう続けて、椎名君があっさりと手を離し、ゆっくりと立ち去る気配を見せるのを私は焦って止めた。

「待って」

何か、何か大切なことを私はもしかしてずっと見落として来たのだろうか。

「特別って、どうして」

「好き」

「あ」

「笹野さんが好きだ」

真つ直ぐはつきりと、椎名君は言った。

と言うよりも、私が言わしてしまったのかも知れない。

立ち去ろうとした彼を引き留めたのは間違いなく私なのだから。

「あ」の状態で固まってしまった私の耳元に椎名君は、そつと顔を近づけた。

「無防備過ぎる」

低く耳元で呟かれてやっと、ぱつと耳を庇い数歩後退した。

「な、な」

言葉にならない。

今、目の前で熱を帯びた強い視線を送るのはいったい誰なんだ。仮面が。

彼の鉄仮面が意図も簡単には剥がれ落ちて、“男”の顔がそこにあった。

「揺らいでいるなら」

端的な言葉が、何時に無いもどかしい苛立ちを含ませて私に追い打ちをかける。

「奪つよ」

ああ、恋とは。

恋とは恐ろしい。

さっきまで、ヒジキをほのぼの食べていたというのに。

きつと椎名君は言うつもりなど無かったのに。

最後まで言わせてしまったのは私だ。

受け入れることも出来ないくせに。

だけど。

衝動にも似た熱でどうしても心を揺さぶられるのだろう。

34話

私は、何も答えることが出来なかった。
椎名君もまた、何も言わなかった。

「・・・」

「・・・」

二人の間に訪れる沈黙の中で今が一番苦しい。
声を出すどころか、顔を見ることも出来ない。
俯いて自分の足下ばかり見続けて、静かに気配が動いた時になって
やっと顔を上げた。

ピンと伸びた背中では既に静かな夜闇へと歩を進めていた。

もう、引き留める言葉は出ない。

ぎゅっと椎名君のノートを両手で抱え込む。

ツキリツキリと冷たい冬の外気が私を静かに責めた。

ズルズルと重い足取りで家まで戻り扉を引くと、出て行った時と同じ
場所に兄が佇んでいた。

何だこの人、ずっと此処にいたのか。

突っ込みの言葉が頭を過ぎるが、気持ちが悪々してたのでスルーし
て通り過ぎようとしたら、声を掛けられた。

「お前さ、前俺が言ったこと覚えてるか？」

「え」

意味が分からなくて兄をジッと見る。

俺が言ったこと？何時の話しだ。

私の訝し気な顔を見た兄は、アーと低く唸り首の後ろをかく。しかしすぐに苦笑して、首を横に振った。

「いや、いい。なんでもない」

気にするな。とぼすぽす頭を撫でられるが、そこまでためたなら言
って欲しかった。逆に気になる。

でも、言及する元氣も無くて「そう」とだけ残して自分の部屋に引
きこもった。

なぜ、こんなにやるせない。

告白されるってもっとドキドキしたりあるじゃないか。

ベットに顔からダイブする。

ゴロリと仰向けになって、椎名君のノートを天井にかざした。

見落とし続けた彼の“特別”を何故今になって聞いてしまったのだ
ろう。

なぜ、引き留めてしまったのだろう。

なぜ、好きな人がいるからとすぐに断らなかつたのか。
拒絶される怖さを知っているから？

違うそうじゃない。そんな綺麗な理由じゃない。

ノートを持つ手がボスッとベットに沈んだ。

私は、手放したくないと、そう思ったんだ。

断ればもう、彼は私に話しかけてくれなくなるかも知れない。
そんなの無理だ。だけど恋愛対象として椎名君を受け入れることは
出来ない。

どんなに心揺さぶられようと。

私は。

受け入れることも断ることもしない最低の方法で、椎名君を繋いで
いようとした。

最低だ。

私、最低の女だ。

「来週から冬休みなわけだが、今回冬休みの課題として絵本制作を
してもらった」

中センが気怠げに喋る言葉にボンヤリ耳を傾ける。

因みに中センは現国の先生だ。

うちのクラスが受け持ちの担任だからなのか何時もやる気ない。

そのくせテストの平均点が他のクラスより低いとキレる。

ふざけた教師だ。こんなんでいいのか。まずその無精髭剃れ。

その無精髭がワイルドセクシーとか言う女子の気持ちがかく分から
ん。

なんて何時もなら思うのだろうけど、今日はボンヤリしすぎてそん
なことも感じない。

生徒のブーイングも聞こえるが、全て左から右へ流れていく。

一夜明けて今日の学校。今朝、椎名君は普通に「おはよう」と声を

掛けて来た。

何時もの感情の覗えない声と無表情に怯んでしまった私は、あろう事か彼を無視してしまったのだ。

そして授業中ずっと自己嫌悪。

避けられるのが怖いから告白を黙殺したくせして自分から避けるのかマジ私何者。

痛すぎる。自分痛すぎる。

ボーっとしながら斜め前の綺麗に伸びた繊細な背中を見る。

傷ついただろうか。

それとも怒っただろうか。

「ストーリーは自分で考える。色とかも塗れ。とにかく素敵な世界に一つの作品作れ。手抜きでもしたらシメっぞ。煩せえ。文句言うな。おい！今ヒゲつったの誰だ！ちっ。仕方ねえだろ。教育委員会が生徒の個性を伸ばす授業をしろとかうるせんだから。こちとらめんどいんだよ。・・・ははっなんてな！じゃあ早速今から絵本の原本を配るぞー」

最後だけ無駄に爽やかにまとめようとしても本音だだ漏れすぎて取り返についてないよ中セン。

みんな引き過ぎて静かになってしまっている。

・・・本当に何でこんなのが教師なんだろう。

ちなみにヒゲって言ったのは私の前の席のお調子者岡崎です。

心の中で突っ込みを入れつつ、視線だけは器用に椎名君の背中を据え続ける。

しかし、前から順に配布物が配られるということはつまり、自然と渡されたものを回す時後ろを振り返るわけで。

「！」

後ろの席の人に配布物を渡そうとした椎名君の目と、斜め後ろの席で椎名君を見続けていた私の目がかち合う。

やば。ずっと見てたの気付かれた？

咄嗟に逸らして、また後悔する。

ああ、これじゃ徹底的に避けてるみたいじゃん！

ああああ。と頭を抱えて唸っていると、前の席から岡崎の呟く声が聞こえた。

「笹野。早く受け取れよ。つまってんだよお前で」

……ごめんなさい。

お昼休み、四季子と他数名の女子とお昼ご飯を食べてる時、ねえねえと四季子が興味深そうに話しかけてきた。

「葵。椎名君とどうしたわけ？付き合ったばっかなのに全然きこちなくない？」

「は？」

まだその誤解解けてなかったのか。

びっくりしすぎてヒジキが口から飛び出しそうになった。

他の子たちも「確かにー」とか乗って来て何か逃れられない空気になっている。

「だから、その前提から違」

「ていうか葵。今日椎名君避けてない？」

「は、べつ別に避けてないし！」

思いがけず行動を見破られ、どこのツンデレキャラだという具合に焦る。

端から見てもそんなにあからさまだったのか、私。

「恥ずかしいんだよな。笹野は！」

何処からとも無く話しに乱入してきた岡崎が、何故か分かるぜ みたいなのりで話しかけてきた。

「好きすぎて逆に意識しちゃったんだろ」

「ああ、なるほど」

「恥ずかしがりやさん」

「はにかみやさん」

岡崎の言葉に皆一様に納得した様子で、によよと含み笑顔で頷いてくる。

ちよ、ほんとあなた方なに・・・。

そのタイミングで、ガラリと教室の後ろのドアが開く。
間の悪いことに、椎名君だった。

どうやら今日は食堂組だったらしく数名の男子と教室に入ってくる。

最悪なことに何を思ったか岡崎は、椎名君に近づいて、このこのつて肘で突きだした。

お・か・ざ・きいゝ。

「ヒューヒュー椎名！」

「？」

ヒューヒューとか岡崎お前……。

椎名君はキョトンとしてる。いや傍目からは無表情だけど。温度差激しいなこの二人。

若干怒りを通り越して呆れ混じりに見ていたが、次の岡崎の一言で私は一気に血が上った。

「笹野がさー。椎名君のこと意識しまくっちゃうみたいよー。愛されてんね」

見当違いでずれまくった台詞なのに、意識してるのは本当で。だけどそうじゃなくて。

椎名君の眼鏡越しの静かな双眸が私を捉えた時、ついに絶えられなくなってしまった。

バンッと大きな音を立てて立ち上がる。

「ど、どうしたのあお」

「だからそうじゃないって言ってる!」

こんなことにムキになる方が可笑しいのに、何もかもが絶えられなくなつて四季子の心配気な声を遮つて叫んだ。

シンとしてしまった教室。

こんな風になる私が初めてだからだろうか、皆息を飲んでいる。

ただの楽しいネタなだけなのに。

こんなの何時もみたいに流せばいいのに。

急に自分だけ本気になつて叫んで、どうしようも無く居たたまれな
い。

私は、みんなの視線を避けるように教室を飛び出した。

こんなことで感情的になるなんてどうかしてる。

だけど、あのままそこにいたら泣いてしまいそうだった。

何故か無性に悔しくて悔しくてたまらなかった。

廊下を走つて走つて。

私は、何時ものように心の支えであるあの人の名前を繰り返した。

夏目さん。

夏目さん。

夏目さん。

夏目さん会いたい。

夏目さんに会いたい。

あいたい！

のろのろと、スピードを落とす。

立ち入り禁止のテープを跨いで、人気の無い屋上への階段に座り込

んだ。

会えない。

会わないと決めただけじゃないか。

心の中で自分に言い聞かす。

何処にも気持ちを持って行けない。

頂垂れるように膝を抱え込んだ。

蘇るのはいつもあの人の声。

- 立葵の君が訪れた時からしょんぼりして、
分からないはずがな
いだろう？

夏目さん。

夏目さん。

大丈夫だよって、頭を撫でて。

35話

気を抜けば滲みそうになる涙を袖で拭うべく顔を上げると、視界の先に、今一番会いたくない人がいた。

どうか。

どうかこれ以上私の心に入ってこないで。
私の心を乱さないで。

そんな願いも虚しく、立ち入り禁止のため張られたテープを軽々と跨いで椎名君は確実に私に近づいてくる。
一步一步階段を上って、その視線は真っ直ぐ私を据えて。

お願いだから。
こないで。

恐怖に近い感情に急き立てられた私は、立ち上がって椎名君とは逆方向に階段を上った。

しかし、行き着くところは屋上。

しかも、扉に手を掛けたところで、その扉は無情にも鍵がかかっていた。

それでも意味なくノブをガチャガチャさせる私。

普通の状態では無かった。

逃げる意味など、本来無いことに気付かないくらい私は動揺していたのだ。

背後からドアに、トンと手をつかれる。

私の身体を挟み込むように。

まるで、檻のように。

言わずもがなそれは、椎名君の腕で。

私は、恐ろしく思いながらも、やっと諦めて振り返った。

そして、辛そうに歪められた彼の表情に、固まってしまった。

何時も無表情な椎名君が、こんな風に表情を露わにしている。

辛そうな顔。

私のせい。

椎名君を苦しめているのは、間違いなく私なんだ。

そう、気付いた瞬間また、泣き出しそうになった。

顔を歪めた私をレンズ越しの瞳が映して、またいつそう苦しげに眇められる。

どうしてだろう。

どうして、こんなにイタイの。

どうして、私たちは傷付き合う。

恋は、私が思うよりずっと苦い。

「ごめん」

椎名君が言う。

辛そうに言う。

そして、そっと私に顔を近づけた。

焦れるようにゆっくりと。痛ましいまでに悲しい瞳で。

近づく先の意味を私は知っている。

けれど私は、固まったまま動けないでいた。

こんな時でさえ、蘇ったのは夏目さんの顔だったからだ。

辛そうに私を抱きしめて、ごめんと言っただけで私に口付けたあの現実の

ような夢の映像と見事にデジャブした。

「・・・」

「・・・」

あと、ほんの少しで触れるか触れないかのところで、椎名君の顔が私から逸れる。

そして、項垂れるように私の肩口にその顔を埋めた。

「くるしい」

椎名君がくぐもるように呟いて、ようやく私はハッと現実に戻った。

「その顔・・・あの人のこと考えてる」

何も言えない。

椎名君の言う意味はよく分からないけれど、考えていたのは確かに夏目さんだったから。

「知ってた。叶わないことくらい。言うつもりだって、無かった」

だけど、と私の肩を切ないまでに強く掴むと、椎名君は顔を上げた。不謹慎にも、凄く人間らしくて格好いい顔だと、思ってしまった。無表情何かよりずっと良い。

「好きなんだ」

ドキリと心臓が鳴る。

こんなに真剣に言われて、もう逃げる術など無い。

「……………うん」

だけど、口から出たのはやっとそれだけ。たったそれだけ。

今、私いつたいどんな顔をしてる？

きつと、凄く真っ赤。

そんな私を見てか、椎名君の表情も少しだけやわらぐ。

スツと掴まれた肩が離されて椎名君は私から距離を取った。

「ごめん。好きになつて」

ごめんと好きが繋がると、こんなにも悲しいことを初めて知る。それでも、私は、言わないといけない。

誠意をもって告げられた彼の真剣に、私も真剣に向き合わないといけない。

「好き、になつてくれて、ありがとう……だけど、」

ありがちな言葉に続く言葉を、椎名君がゆっくりと首を振って止める。

「知ってる。言わないで」

自分も、もう言わないから。そう言つて薄く笑む椎名君。

ずるいよ。

そんな風に笑わないで。

そんな、綺麗に笑わないで。

“ごめん”を取り上げられた私は不覚にも、その消え入りそうな微

笑に見入ってしまった。

椎名君と並んで、ゆっくりと教室へと向かっている。

なぜか不思議と落ち着いた私の心。何だろうね。

気まずさに避けまくってたのが今更ながら、恥ずかしい。

というか教室に戻るのが、かなり気まずい……。

でも午後の授業始まるから、嫌とも言っていられない。

我ながら、あの取り乱し方といったら無かった。四季子にも謝らないと。

そんなことを考えて歩いていたら、椎名君の足が教室とは別の方向に向かっていることに気付いて慌てて声をかける。

「ちょ、椎名君！教室こっち」

「知ってる。遠回りして行こう？ちょっとだけ」

ちよつとだけ。と小首を傾げて……なにこの可愛い生きもの。

無表情が逆にフェレットじみた可愛さを醸し出している。

じっと見つめられて抗えるはずありません。

暫く歩いた末、たどり着いたのは何故か図書室だった。

遠回り……とうか、寧ろ寄り道……。

「こっち」と椎名君がさらに奥に誘う。

カウンターの奥の小さな部屋。

こんな所、あつたんだ。

椎名君が言うには、此処は図書委員の人が使う図書管理室だそうだ。「待ってて」と言われて、暫くボーッとしていると、珈琲片手に椎名君が戻って来た。

「どこから、珈琲を・・・」

「国語準備室」

私の疑問に端的に応える椎名君。
いや。知ってたよ？図書室の続きに国語教師の準備室が備わってるの。

だってノート提出の時、来たからね。

だけど。

だけどさ。

私たち何気に授業サボってるわけなのに・・・。

椎名君・・・大胆・・・。

「・・・誰も、いなかった？」

「いたよ？」

えっ？

誰だよ。サボる生徒に黙ってるようなとんちき教師。

「・・・・・・・・だれ？」

「中山田先生。競馬に夢中で気づかれなかった」

担任か！

寧ろ納得だよ！

そして、博打中とか……。

駄目すぎる……。駄目な大人すぎる……。

呆れすぎて、遠い目をした私に椎名君が、そつと珈琲を渡してくれる。

ありがとうと受け取って、彼が反対の手にまだ何か持っているのに気付く。

それは単行本で、その見知った題名に私は思わず声を出した。

「井伏鱒二の山椒魚」

知ってる。

何時だったか、読書週間があつたから夏目さんの所で借りたんだ。

何か短くて読みやすいものないですかって聞いたたら、これを貸してくれた。

懐かしく眺めていると、ポツリと椎名君の声。

「その顔……」

呟かれても困る。

私の顔がなんだというんだ……。

そつえば、さっきもその顔がどうの言ってなかった？

思わず自分の顔を確かめるように触ってしまう。

うん。普通だ……。たぶん。

「その顔。あの人のこと、考えてる時だけ」

「あの人って」

じっと私を見る椎名くん。

いやいや。私テレパス無理です。

「夏目さん」

夏目さん？

確信めいた、静かな口調で。

椎名君が言った。

「山椒魚は、あの人。なんとなく・・・予感してた」

納得したように、切ない笑みで椎名君が私を見る。

いや、私は意味分かりませんよ。

確かに「山椒魚」は夏目さんから借りたけど、椎名君がそれを知る
よしも無いはずなのに。

意味分からん・・・。

「笹野さんは、蛙」

椎名君ワールドは、なおも続く。

しかも私がカエルってどういうことですか？

カエル顔ですか私？

“その顔”ってカエル顔ってことですか？

・・・地味にシヨックですけど。

「それも、自ら捕らえられた蛙」

勝ち目なんて、端から無い。と椎名君は笑った。

腑に落ちない私は、両手で顔を挟みながらハテナを飛ばしていた。

「終わったかー？」

そして、いきなり開く扉と乱入してきた声。

入ってきたのは、啞えたばこの無精髭。

中センがニヤニヤしながら私たちを見てくる。

な、なんだこの人。

「おい青少年。こんなとこで事に及ぶなよ」

「及ぶか！」

私の叫び声が、虚しくも図書室に響いた。

だれかこの人どうにかして……。

36話

それから私たちは、サボタージユの罰として雑用を言い渡された。いやいや、今からでも授業に向かいますスイマセンでしたと逃げようとしたら、襟首をむんずと掴まれる。

「今から行っても中途半端だろ？おら。悪い子は働け」

ニヤニヤ顔の無精髭からどさりと多量に手渡されるプリントとホッチキス。

「・・・・・・・・」

この理不尽な思いを椎名君と分かち合おうと視線をやると、彼は何故かほんのりと目元を赤くさせて顔を俯けていた。どうしたんだ椎名君。

心配になって話しかけようとしたら、中センに肩をそつと掴まれた。

「そつとしいてやれ笹野。男つてのは多感な生きものなんだ・・・」

「

・・・・・・・・い、意味分かん。

意味は分からないが、とりあえず（中センは無視して）私たちは雑用に徹することにした。

くやしいが、サボったのは事実なのでしょうがない。

椎名君がプリントを順番通り重ね束にして、私がそれを受け取りホッチキスで止めるという単純な流れ作業を繰り返す。

無言で黙々とやっていたが、ふいに椎名君からプリントを受け取る際、指と指が触れ合った。

「・・・っ」

ばさばさと落ちるプリント。
え。

何その反応。

過剰なまでの反応で手を離したのは椎名君の方だった。
彼の顔は何故か真っ赤だ・・・無表情だけ。

椎名君がおかしい。
明らかにおかしい。

「・・・どうしたの」

「う、めん。・・・誘ったのは」

「ん？」

「事に、及ぶつもりでは無く。・・・ただ、話し、を、したいと」

事に、およ・・・。

椎名君の言葉の衝撃に暫し思考がフリーズした。

えええ。

椎名君もしかして、中センのあの発言を真に受けてたの？

わ、私普通に何時もの（つていうのもどうかと思うけど）セクハラ
発言として気にも止めてなかった。

な、なんて純粋ジュンキなんだ。

どこかの髭の人とは大違いだ。

「いや・・・椎名君べつに私は、そんな風には・・・」

フォローを言葉にしようとするが、椎名君の赤い顔を見てしまうと何故か私までじわりじわりと顔が熱くなってしまう。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そのまま二人顔を見合わせたまま、顔を赤くして沈黙してしまった。何これ、こそばい。死にそう。

「おお。リアル中学生日記」

異様に顔を赤らめさせたまま物凄いスピードで作業を再開した私たちに、中センのそんな台詞は耳に入ってこなかった。

単純作業とは、人の心を落ち着かせるものだ。

気まずいながらも作業が終わる頃にはどうにか何時も通りに戻る事が出来た。

そして、やっと魔の手から解放された私たちは、現在教室の前にいる。

そのドアに手を掛けながら思う。

また何かいらぬ勘違いされそうだと。

飛び出した私と追いかけた椎名君。

そして5限になっても戻って来ない二人。

どんな誤解を生むかなんて想像に容易すぎる。

それこそ中センが言ったような事におよ・・・いやいやこれ以上考
えるのはよそう。

・・・ああ、それにしたって奴等の生温かい笑顔が目には浮かぶよう
だ。

だからってもう取り乱したりしない。

そう心に誓いつつ、気合いを入れてドアをスライドさせた。

「葵！」

ドアを開けた瞬間、凄い勢いでクラスメイトに囲まれた。

何これ怖い。

リンチフラグ？

「え、あの」

どうしたらいいのか戸惑って後ずさりしそうになっていたら、「こ
めん」とあらゆる方向から頭を下げられた。

「えっえっ」

何で？何で？

おろおろしながら椎名君を見る。

無表情でじっと見つめ返された！

だからテレパス無理だってば！

頭の中大パニックでいると、四季子がスッと顔を上げて申し訳なさ
そうに話す。

「葵って、恋愛とかもそうだけど、あんまり自分のこと話してくれないじゃない？」

——その場凌ぎの当たり障りのないすべらかな人間関係は、トラブルを引き寄せず上手く渡っていくのには丁度いい。

——立ち入っていい所、そうではないところ。そこを踏まえての慎重な会話。

「葵の生身の部分っていうか、そういうのが全然見えなくてさ」

——私も立ち入らないから、あなたたちも立ち入らないでと。

——そういうシグナルを送って、私は守りたかったのだ。

「本当はちよつと寂しかったんだよね」

——夏目さんという聖域を。

私は、呆然となつてしまった。

私が考えていた傲慢とも思える人間関係は、こんな風に相手を傷つけていたのだ。

私が、思うよりずっと、相手は私に近づこうと努力してくれていたのに。

喉がひりひりと痛むようで、言葉が出ない。

私は、彼らに対して凄く失礼だったのかもしれない。
ちつとも、真剣じゃなかった。

私の中の均衡感覚が妙になった感じがする。

私は、大切にすべき物を見落として来たのだろうか。
ぐらりぐらりと何かが揺らいでいく。

「だからって勝手に騒がれて、笹野たちにしたら良い迷惑だったよな」

お調子者の岡崎が、今は真剣な顔をして言う。
そんな顔をさせたくは無いのに。

「踏み込んで欲しくない人だっているもんね」

ごめんね。とみんなに謝られて、もう駄目だと思った。
全部が崩れるような気がした。

心が変に冷えていて、表情までも無くなってしまふ。

すると緊張に冷たく冷えた私の手に、何かが触れる。

その感触に顔をあげると、椎名君がじっと私を見ていた。

右手に繋がれたのは、彼の左の手。

包み込むようにぎゅって握られて、急速に体温が戻ってくる。

無言の椎名君の無表情な顔を見返す。

あ。

今度はテレパス、伝わった。

私は、知っている。

こうして、分け合ったぬくもりも。

心を少しずつ分け合うことも。

踏み込む領域を少しずつ許し合うこと。

そして、伝えること。

うん。私が、変わらなければならない。

だって言ったじゃないか。

たくさんの人に出会って、たくさん影響されたり影響したりして生きていきたいと。

夏目さん。

それでも貴方の隣を選びたいと。

ぐつと喉に力を込めて声を出す。

今まで話せなかったけど。

聞いて欲しい。

「私は椎名君が好きです。みんなと同じくらい好きです」

ぎゅって、握る手に力を込めた。

椎名君もぎゅって握り返してくれた。

これが、私の告白の応え。

ごめんね。

言わせてくれなかったけど、たくさんごめん。

ずるくて、卑怯な言葉でも、応えたかった。

あなたが好きだと。

「それでも、いっとう大事な人がいる。ずっと大好きな人。叶わな
いかもしれない好きだから、大事にしたかった。ごめん踏み込んで
ほしくない理由なんてなかったのに。勝手に守っていたかっただけ
の独占欲だったんだ。飛び出したのは色んな事が上手くいなくて、
イライラしてカッとなっただけ。ごめんね」

それと。

「私に歩み寄ろうとしてくれて、ありがとう。みんな、好きだよ」

ちょっと自分の台詞に照れながら、はにかみつつみんなに笑いかけたら、何でか分からないけどみんなの時間が止まっていた。半ば惚けてる感じ。

あの、何かしらの反応が欲しいのですが……。

隣で椎名君が小さく、「その顔、反則」って呟いた。

その顔って……カエル顔はもういいから……。

「おーい。中学生日記は終わったかー？HRはじめていいかー」

いつの間に入ってきたのか中センが名簿を肩でトントンしながら言うてくる。

中学生日記って酷い。よく分からないけど青臭さ満点っぽい。

何かしら文句を言うてやろうとしたら、先手を打って名簿で頭をポンって叩かれた。

な、なにするっ。

頭を押さえつつ睨みあげると、ニヤリとした顔とぶつかった。

「宝箱たくさん見つかったな」

どこかで聞いた台詞に苦笑してしまう。

人のこと中学生日記って言うけどさ。一番くさい台詞は中センだと思っな。

37話

どういうわけか、放課後クラスのみんなで遊びに行こうということになった。

岡崎曰く、『僕たちよりいつそう団結を深めたね！お祝いだよ全員集合パーティー』らしい。

長たらしい上に、分かり辛い。

何気に8時だよ全員集合をもじってくるあたり、岡崎お前、何時の時代を生きているんだと言いたくなる。

そこに今時の若者の風潮、『パーティー付けとけば何でも楽しそうでおツケーじゃね？』な思考も混じっていると来た。（だいたい、たこパやら鍋パなんてのはパーティーだなんて認めない。パーティーとは、もつとセレブでおハイソな貴族のお遊びであると私は認識している）それでも、クラスのみんなは大いに盛り上がっていて、クラスの殆どが参加した。

私もなんだかんだ文句を言ったけど、初めての放課後パーティーを大いに楽しんだ。

ボーリングでガーター連発して、無表情でストライク連続の椎名君を羨ましくも恨めしく眺めたり。
カラオケで岡崎の歌うバラードに不覚にも感動したり。

四季子のタンバリンを振る手首のスナップが素人とは思えなかったり。

そんな新たな発見。

最後は、ファミレスにドリンクバーだけで何時間も居座って色んな人と喋った。

何時も話す子も、初めて話す子も関係なく皆と、めまぐるしくもくだらない話をした。

あ、この子こんな声で笑うんだ。

そういう初めての、発見。

そうやって、みんなで遊んでいる時ふと思った。
もし、夏目さんと会えることもなかったら、こんな風に毎日放課後
遊んだりしてたかな？

普通の女子高校生みたいにみんなで放課後寄り道して騒いで遊んで、
それから――。

ふと、隣を歩く椎名君の顔を見上げた。

解散となってから、自然と私の送り役を申し出た椎名君。

それについて、クラスのみんなはもう邪推したり捲し立てたりはし
てこなかった。

四季子だけはこっそり、「葵の恋事情おしえなよね。今度ガールズ
トーク決定」と耳打ちしてきた。

恋愛か。

自分とは、全く別次元の物だと思っていた。
むしろ思おうとしてきた。

漫画やドラマや友達の話しを聞いていて、何故彼女たちはこんな事
で悩むのだろうと感ずることもあった。

好きなら、側にいればいい。ずっとそばに。

だけど、そんな単純じゃなかったんだ。

恋は“する”ものでは無く、“おちる”もの。

理性とは裏腹で。

苦くて、苦しくて。

矛盾が一杯で。

綺麗でも淡くもなくて。

もつとずっと生身で、人間ぽさが全開になる感じ。

「なに」

椎名君が、首を傾げて私を見る。

椎名君を見たまま思考の海に嵌ってしまったせいで、ずっと凝視する形になってしまっていた。

あせって、言葉を探す。

「えっと。楽しかったね」

出てきたのは幼い子供のような言葉だけだったけれど、椎名君は何も言わずに一つ頷き目を細めて私を見た。

そうやって時折、私を見ることが増えた。

くろすぐり色の瞳を細めて、愛でるみたいに私を見てくるのだ。

正直、流れ出る視線の甘さにまいってしまいそうになる。

不自然にならないように顔を俯け、冷えた鼻先を暖めるように両手に息を吹きかけた。

すると、突然ふわりと首に暖かな感触。

椎名君が自分のマフラーを、何も無い私の首に巻き付けてくれた。た。

思わず身を固くして、ジツと立ち止まる。

寒いのに、顔だけ湯気が出るんじゃないかってくらい熱くなる。

椎名君は、いたって普通にこういう事をする。

よく考えたら、さつきからずっと、歩道の車道側は椎名君だ。

ああ、もう。こんなふうに、あけすけに大事にされると、どうしたらいいのか分からなくなる。

「……ありがとう」

「うん」

「椎名君、寒くない？」

「ん」

「もう、冬なんだね」

「ん」

初めて送ってもらったのは、金木犀の香る秋だった。無言が耐えられなくて、私ばかりが喋っていた。

今だって、私ばかりが喋ってるのに、あの頃と確実に違うことがある。

視線と空気が、全然違う。

いま、椎名君との空気が居心地良すぎて、のぼせすぎて、私は最も考えてはならないことを思ったんだ。

もし、夏目さんと会えることがなかったとしたら。

普通の女子高校生みたいにみんな放課後寄り道して、騒いで遊んで、それから――。

それから、若しかしたら椎名君と・・・。

身近なクラスメイトと恋をしたかもしれない。

「「あ」」

二人同時に声をあげ、空を見上げた。

「初雪だあ」

空からちらりちらりと、ふり降りてくる雪。

ああ、ほんとうに、もう冬なんだなあ。

そんなことを思いながら、目線を何気なく周りに移した。

そこで、見つけた。

近いけど遠い反対の歩道に、街路樹の間に、その人を見つけた。

「・・・！」

見慣れた蜂蜜色。

だけど、見慣れない黒いロングコートを着た長身。

寒気の中で、青灰色は驚くぐらい冷たくて。

車が視界を通り過ぎる一瞬、その目が合った。

それから、また目を疑うような光景が飛び込んでくる。

夏目さんの後方から、目を瞠るような美女が現れたのだ。

彼女の手が、黒いコートの腕に絡む。

一瞬見えた青灰色はすぐに目を伏せ、かすむような寒気が彼をさらってしまふ。

スローモーションのようだ。

赤いマニキュアが、彼の腕に絡む。

流れるように彼らは奥の道に消えていく。

ただ呆然と見つめた。

うそだ。

少しだって動く事が出来ない。
何一つ、耳に入らない。

私の世界が、音を立てて、崩壊する。

うそだ。

太陽を失った、地球はどうなるのかと、以前考えたことがある。
答えなんか容易く導き出せた。

答えは・・・ただ、闇と共に破滅に向かうのみ。

嘘だ。

ぐらりと視界が揺れた。
比喩ではなく、本当に。

立っていらなくなつて、ぐらりと足元が崩れる。
椎名君が咄嗟に支えてくれて、焦ったように私に何か言っているの
が目では認識出来ているのに、頭がついて行かなくて、何も反応で
きない。

ただ、そこに残像でも探すように、空虚を見つめる。

おかしい、よ。

何だか身体が冷え切つて、言うことをきかない。

手を目の前に翳すと、僅かに震えていた。

寒さとは別種の震え。

掌を見つめていると、そこにふわりと雪がすべり落ちてくる。
震える手で力なく握ると、それは跡形もなく消えた。

嗚呼、これは現実なのだろうか。

私、夏目さんに拒絶、された、の？

ガラス玉の瞳が、まるで無かったかのように、私を世界から弾きだした。

・・・寒い。

死んでしまいそうに寒い。

人は、受け入れられないことを知った時、とても絶望する。

それが、愛している人なら・・・なおさら。

絶望より、深く――。

心が凍って動かなくなる・・・。

38話

崩れ落ちた身体は震えるばかりで、芯を抜かれたみたいだった。

椎名君が私を抱えて家まで送り届けてくれたこと、兄が焦った面持ちで家から飛び出して来たこと。

全て自分の事なのに、フィルターを隔てて映像を見ているように遠かった。

自分の身体なのに、酷く重い。

深海に沈んでいくようだ。

なぜ。なぜ？

考えたくない。

どうか。

考えさせないで。

真っ暗な部屋、外は雪がちらちらと舞っていた。

ベッドの端に蹲って、何度も何度も繰り返す。

同じ映像をこれでもかと言うほど繰り返す。

絡め取るような赤、赤、赤。

何度も、何度も、あの絡みつく赤いマニキュアが脳内で繰り返されて。

「~~~~~」

狂いそうになる。

嫉妬で焼き切れてしまいそうだ。

ああ、だけど。

私を見る青灰色が。

あのひやりとする色が私の心に冷水を浴びせる。
まるで、嫉妬するのも烏滸がましいと諫めるように、冷たい湖に私
を突き落とす。

繰り返すビジョンと思考にいい加減目眩がして、ぐしゃりと髪を掻
き回した。

トントンと静まり帰った部屋にノックの音が響く。

「葵・・・飯食えるか？」

ドアの向こう側から、兄の覗くような声。

もう何度目かのご飯の知らせ。

私は、世界を遮断するように毛布を頭から被り、きゅっと目を閉ざ
す。

トントントントンと暫くノックは続いたが、暫くしてそれも消えた。
階段を下りる兄の足音を聞きながら、毛布をぎゅっと握りしめた。

自分が嫌いだ。

すごく迷惑をかけてる。

気を遣われてる。

自分が嫌いだ。

恋を自覚して、私は弱くなった。

ひどく身勝手になった。

こんな風になるくらいなら、初めから恋なんてしなればよかった。
夏目さんと私の関係を崩そうなんてすべきじゃなかった。

翌日、学校を初めてサボった。

兄が、朝トントンとノックをくれたが、結局身体は鉛のようにベッドから動きはしなかった。

目を瞑る。

全てを遮断するようにぎゅっと目を瞑る。

眠ろう。そして一時の安堵を味わおう。

そうして、また深く深く深海へ沈む。

このまま遠く、小さく無くなってしまいたかった。

どれくらい眠ったのだろう。

真つ暗な思考の端からブー　ブーと携帯のバイブ音が連続して聞こえてくる。

まって。

まだ寝ていたい。

そう思うけれど、途切れる気配の無いそれは煩わしいほど執拗で、しづる私から眠りを取り上げた。

ゆるゆると起き上がり、静かになった携帯を見る。

メールが、10件。

着信1件。

10件・・・。

どうやら、今まで熟睡しすぎて、メールの短いバイブ音には気付かなかったようだ。

取り敢えずまず、メールを開く。

クラスの友人からの何件かのメール。そろって休みを心配する内容に、何処か後ろめたい気持ちになる。

そして、最後の一件は知らないアドレスからだった。

「？」

Sub 無題

あどきいた

だいじようぶ

つらいの

しいな

- - - - - E N D - - - - -

開いた瞬間、その拙い文字に、一瞬固まって、そして記憶を探る。
友達になろうとアドレスを聞いたとき、椎名君は「機会、苦手」と
それを断ったのだ。

言葉以上につたない、この文字からも彼がどれだけ苦手が容易に想像できる。

変換もクエスチョンマークもなしの短い文字。

それでも、必死に打ったのかな。

どんな気持ちで？

どんな想いで？

ああ。

携帯を握りしめたまま、その画面に額を押しつける。

【大丈夫？辛いの？】

ああ、

ごめんなさい。

何への謝罪なのか分からない。

だけど、ごめんなさいと、ただ頭の中で繰り返した。

きつと、椎名君のくれた「すき」は私よりずっと綺麗だ。
私よりずっと、真っ直ぐだ。

向かう先が私であることを嬉しく思うより、恥ずかしい。
自分が恥ずかしい。

額に押しつけていた携帯が、再び振動を初めてびくりと肩が揺れた。
慌ててディスプレイの見ずに出る。

「はい・・・」

『あーおーいちゃん』

「し、四季子？」

『あーけーてー』

「は？」

何のことと言う前に、ピンポンと間抜けな音が響き渡った。

え？え？

転げ下りるように、ベットから出る。

ああ！スウェット！どうしよう。

と考えている間もピンポンピンポンピンポンと連続チャイム
が急かしてくる。

『はーやーくー』

「ちょ、ま」

ええい！もうこのままでいいわと、階段を駆け下りそのままの勢いで引き戸を開けた。

「『や』」

耳に当てた携帯と目の前の良い笑顔で片手をあげる四季子の二重音声。

半目になりながら、携帯をオフにする。

「いきなりすぎやしませんか」

「さつき一回電話したのに、葵音沙汰無いから」

悪びれない笑顔でそうのたまった四季子は、じゃあおじゃましますと玄関に上がり込んだ。

「どうやって家分かったの？」

目の前でお茶を啜っている四季子に尋ねると、あちっと一ツ呟いて湯飲みを置いた。

「椎名君が家の前まで連れてきてくれた」

「え？椎名君家まで来てくれてたの？」

なら、何故目の前に四季子だけしかないのか。
私の疑問を汲み取ったらしい四季子と言う。

「椎名君、自分はいないほうがいいんじゃないかって」

「・・・」

押し黙った私に、四季子が首を傾げた。
私と違う、ふんわりとした茶色が肩先で揺れる。
じっと見つめるその目は真ん丸だ。

「葵さー。今日休んだのって風邪とかじゃないんでしょ？」

言い当てられて、「えっ」と弾かれたように四季子を見る。
そしたら、にんまりと四季子は笑った。

「恋バナしよっか」

四季子が行き成り始めた恋バナ。

最初は、押し黙って聞き役に徹していた私。

しかし、四季子と彼氏とのあれこれの話が終わり目で次はお前の番だと促されてしまうと、ついにはぼつりぼつりと話始める他なかった。

椎名君に告白されたと打ち明けたとき「やっぱりなあ」としたり顔で四季子は呟いた。

「でも、葵、ずっと好きだったひとがいるって言ってたね」

四季子の問に私は神妙に頷いた。

どこまで話すか。

本当は、まだ夏目さんのことを話すのに抵抗がある。

私の大切な記憶。

これは、嫉妬心なのだろうか。

“嫉妬”という単語に赤い爪がフラッシュバックする。

「っ」

ぎゅっと目を瞑ってやり過ごす私に、四季子がどうした？って優しい声で聞いてきた。

誘われるように瞼を開けて、一つ呼吸する。

「・・・ずっと好きだった人が、女の人と一緒にだった・・・」

「・・・」

やつと言葉にした私に、四季子はポカンとした顔をした。
なんだ、その顔はと睨んだら、ぽりっと顎をかいいた。

「それだけ？」

「っだつて。私だけだと思ってたんだ！私の前のあの人が本当だつて思ってたのに！」

シラっとして尋ねて来た四季子とは逆に、私に火が付いた。

何もしらないくせに！と喚きたくなったのだ。

綺麗で、神聖で、なのに甚平なんてギャップのある物を着た夏目さん。

それが、本当だった。

私の中の彼の全てだった。

なのに、あの歩道で見た夏目さんは、私の中の彼とは余りにかけ離れていて。

もし、あっちが本当だったら。

あの冷たい目が本当だったら？

今まで築いてきた夏目さんと私の世界が崩れ落ちていく。

足下がぐらぐらする。

全てが嘘だったのではと疑いたくなる。

また、ぐらぐらと思考が赤に埋め尽くされそうになった時、「でもさあ」て四季子が呟いた。

「それって、葵が決めることじゃないでしょ」

ぴしゃりとした言葉に、瞬きも忘れて四季子を見る。

そこには何時ものノリのいい四季子じゃなくって、真剣な強い眼差しの四季子が居た。

「その人の本当なんて、その人にしか分からないよ。私はその状況を見ていないから何とも言えないけどさ。だけど葵が凄くおかしい事言ってるのは分かる」

言葉が、上手くはいつてこない。

なぜ？

四季子は私を否定する？

「その女はその人の恋人なの？聞いた？だったらそんなことわからないでしょ。あんた、その人に気持ち伝えたの？・・・結局あんたはさ、何もしてないじゃん。うじうじ一人で悩んでるだけ。嫌われる前から嫌われること怖がってさ。変わるまえから変わること怖がって、何一つアクションしてない」

四季子の質問に一つ一つ首を振ると、四季子はちっちゃい子をしかるみたいに含めるみたと言った。

四季子の言葉一つ一つが痛かった。
でも、大切な事を言われているということとはよく分かる。
逃げていたのは本当だから。

「私は、あんたが嫌いだから言ってるんじゃないよ。あんたが好きだから言つの」

俯いた私に、溜息みたいに四季子が言う。

その暖かい声が縮こまって耐えてた心を意図も簡単に引き延ばして、
ついにはボトリと涙が出た。

四季子が、ゆっくり私の背を擦る。

「・・・でも、あの人は、っ普通の人じゃないからっ」

心の中の、どろどろした気持ちの奥の奥。

本音が、えずくみたいに言葉になった。

どうしたって、どうしたって叶わない。

私には、手に入らない。

椎名君みたいに、真っ直ぐ気持ちをぶつけることだって私には出来ない。

だって、きっと、夏目さんははぐらかしてしまうでしょう？

困ったように笑うでしょう？

私にはきつと何も答えてくれない。

真っ直ぐ感情をぶつけるには、彼が遠すぎる。

「なにそれ」

四季子が怒ったみたいに言って、私の頬を両手で掴んで引き上げた。

「そんなのって変じゃん。その人に対して凄く失礼なこと言ってる。

葵さ。その人に対して壁つくつてる自覚ある？」

瞬いて、またボトリと涙が溢れた。

「好きならさ。年の差とか、身分とかに自分が冷静になっちゃ何にも始まらないじゃない」

その人の前で泣きなよ涙は女の武器よ！と掌で私の涙を拭う四季子は、同じ年のくせにずっとずっと、ずるいくらい大人だった。

39話

四季子が帰ってしまってから、ぼんやり金平糖を眺めた。
七色の星の欠片が瓶の中でざらりざらりと揺れる。

——形に残るモノより、溶けてなくなった方がいいだろう。だけど

「だけど、覚えて居て欲しい」

夏目さん。

英語の単語はちつとも入ってこないのに、貴方の言葉ばかり耳に残ります。

時々、突拍子もなく脈絡無いことを言う夏目さん。

だけどその意味をいつも考えてしまう。

いつも、心に響いて消えない。

四季子、言えるのかな私。

会うのだって怖いのに。

覚えている。ずっと覚えて居るから、どうか溶けて無くなったりしないで。

滑らかな瓶を両手でぎゅうつと握った時、玄関の引き戸が開く音。

急いで、玄関まで下りると予想通り兄で。

レジ袋を両手に抱えて脱ぎづらそうに靴を脱いでいた。

ごめん。

一瞬出かけた言葉を喉でとめて「おかえり」と声をかけると、兄は吃驚したみたいに私を見て、すぐに神妙な顔で「ああ」と答えた。
近寄って、一つレジ袋を受け取ると、開いたその手で頭をぽんってされる。

「今日は鍋だ。おまえ、ずっと飯食ってないだろ。しっかり食え」

レジ袋いっぱいのお鍋の具。

ごめんね、お兄って掠れた声で呟いたら、頭をぐりぐりって撫でられた。

ごめんね。

ありがとう。

お鍋がふつつ湯氣を立てる。

兄が、せつせと小分け皿に具材を盛ってくれる。
のは、いいんだけど……。

「ちょ、もう充分……」

「食え」

このやりとり5回目。

いい加減胃がはちきれそうですが……。

しかし、何だか断れないのは兄の優しさだと分かってるから。
ふう。とお腹を一さすりして、箸を伸ばしたところで「なあ」と声をかけられた。

「うん？」

見上げた先に兄の真剣な顔。

「お前、よつか……本屋が好きか」

妖怪と言いかけて、本屋と訂正する兄。考えるまでもなく夏目さんのことだ。

からかう風でないその眼差しから、私は視線を一回彷徨かせて一つ頷いた。

途端に、兄が大きな溜息を付く。

「恋愛の意味でか」

また頷く。

「引きこもったのアイツが原因か」

一瞬考えて、曖昧に頷く。

すると、兄は低い声でぐううと唸った。

そして、暫く考えるように下を向く。

いったい何だと言っんだ。

「お前、あの夜、行ったよアイツの所に」

思い切ったように顔を上げて言う兄。

しかし、何のことが分からない。

「あの夜？」

「有志の演奏を聞きに行った日だ。お前背負って家帰って、そのまま寝かせた。お前、夜中急に家飛び出して……。明け方、お前本屋に抱えられて戻って来た。速やかに引き取って、何にもしてないだろうなって睨みかしたら、あいつ……。くそっ 曖昧に言葉を濁

して去って行きやがって。ま、その後二三度頬を叩いたらお前起きて、自分で皺になったらいかんってパジャマに着替えて」

ちよつと！

だつて！

「兄さん肝心なところ教えてくれてない！」

酷いじゃないか！

現実だった！

やっぱり夢なんかじゃなかったのに！

「言えるか！」

と急に兄が声を張るものだから、勢いを削がれて口を閉ざす。

「お前が傷物になったかもしれないのに！」

な！

「余計大事なことじゃんか！！」

馬鹿！と言ったら、急に兄がへによりと眉をさげた。

あの兄が。

「・・・あの夜、お前が俺の背中で泣くから」

「泣いてなんか・・・」

「泣いた。何も変わって欲しくないって言って泣いたんだよ。お前」

「・・・」

ふつつつと鍋が、煮える音がする。

入れたうどんがふにふによになっている。

兄が、カチリとコンロを止めた。

「本屋と以外で恋をしてくれた方がいいと思った」

椎名でもいい。有志は・・・まあアイツはどうかと思うが・・・。
と兄が言う。

「何で、そんな風に思うの」

そう聞くと、兄はまた、襟足を搔く。

あ、もしかしてこれ癖なのかもしれないと、どうでも良いことを考えた。

「お前、俺が言ったこと覚えてるか？」

そうして兄は言う。

前と同じ事を聞いてくる。

あの時は、なに？って聞いたら何でも無い、とはぐらかされたのだ
つけ。

「何て言ったの？」

じつと兄を見る。

兄は、躊躇うみたいに口を開いては閉じを1・2回くりかえしてや
つと振り切るように言った。

「あいつはお前の王子様なんかじゃない。あいつはいずれお前の前から消える存在だから、お前の王子にはなれないんだ」

「――」

心臓が、痛いぐらい早くなってる。
消える？

何を言って・・・。

「葵、きつと悲しむ時がくる」

何を言ってるんだろう。

「お前が忘れたならいいと思ってた。人の気持ちはどうしたって変わる。だけど変わったらいけねえことだってある。・・・結局お前はアイツに恋をした」

こんなこと、言いたかないが。と兄はがしがしと襟足をかく。

「お前、あの時言っただよ」

どうして。

そんなの、ちつとも覚えてないよ。

「悲しむときが来るなら、よけいに会っておくんだと」

兄の言った言葉が理解できなくて、うつん。そんな記憶ちつともなくて、混乱する。

兄はいたい何を。

「何を知ってるの？夏目さんの何を知ってるって言うの！」

詰め寄った瞬間、がたりと机が揺れて、盛ってくれた小皿からお鍋のスープが僅かに溢れた。

それを見て、兄がすかさず布巾で拭き取る。

私は焦れる思いで兄を見た。

拭き取る手を止め、兄は低い声を出した。

「何も。ただ、本人がそう言ったんだ」

ああ、暗転。

●秀（兄）SIDE●

俺のことを話す時、妹抜きには語れないことが多い。

こんな事を言つと、まるで俺が極度のシスコンのようであるが、まあなんだ・・・自覚があるだけマシだと思つておこつか。

考えてみたらおかしいだろう。

毎日毎日、晩飯を作る俺。弁当を作る俺。

多感なお年頃の頃からずっとそんな所帯じみたことを続けている。この俺が。俺様が。

ま、だれに強制されたでもなく俺が勝手に始めたことなんだがな。そりゃ、俺にも色んな事に不満を持つ俗に言う反抗期って奴はあった。

両親は不仲、纏わり付くまだ幼い妹。

反抗したくもなる。まだ小学生だったんだ。

抱えきれないフラストレーションは、当然のように葵に向かった。

「お兄」

うるさい。

「お兄。葵もノートにかきかきしたい」

うっとうしい。

「うるさい。まだ宿題があるんだ」

まだ小学校に上がる前の妹に俺は辟易していた。

つい強い口調で振り払うと、葵は豆鉄砲を喰らったみたいに大きな目を真ん丸に見開いてそれからぐしゃりと顔を歪めた。

それでも俺の良心はちっとも痛まなかった。

寧ろ、ああ泣くのか面倒だな、と思ってしまう。

俺の時間を邪魔する妹が、無性に腹立たしかった。

脳天気な顔を見るとイライラする。

両親が今、どれだけギクシャクしているかなんてコイツの知ったことでは無いのだろう。

そう思うと、どうしても妹を冷めた目でみてしまうのだ。

今にも泣き出しそうだった葵は、俺の予想に反して泣きだしはしなかった。

そのかわり、下がった眉と目尻を引き上げて力一杯息を吸い込んでいる。

「バーカ。お兄のガリ勉！もやし！」

キーンとする耳を咄嗟にふさぐ。

「こいつ！」

一発殴ってやろうかと、拳を作った時にはとっくに逃げおおせていた。

「っち。可愛くねえ」

呟いて、俺は机に向かう。

ふん。ガリ勉で何が悪い。

もやしは余計だ。

ぎゅっと鉛筆を握りしめた。
計算式を解いている間は嫌事を考えずに済むんだ。

「秀、しゅう」

集中していた思考に、母親の声が割り込む。
面倒だったが、のろのろと顔を上げた。
もう夕方だと言うのに、化粧をした母親。
次に言う事なんか分かりきっていた。

「お母さん、急な遅番の仕事が入ったから行くわね」

「・・・」

「夕飯は作ってあるから、葵とチンして食べて」

「・・・」

父親と不仲になり始めて、母は婚前に勤めていたという会社に復帰した。

父が怒鳴る。

結婚したら仕事は辞めると言っただじゃいか、と。

母は言う。

貴方の帰りを待つ妻としての幸せを感じないのだ、と。
夜に繰り返される口論に俺は耳をすまして。まだ、大丈夫だろうか

と危惧をする。

「しゅう」

いつの間にか沈んだ思考を、母親の声が引き戻した。
うんともすんとも答えない俺に痺れを切らしたのか、俺の目の前に
屈んだ母に肩を掴まれる。

「秀。葵のこと頼んだわよ。いいわね。秀はお兄ちゃんなんだから
お兄ちゃんなんだから

なぜかそれは呪詛のように執拗に囁かれる。
執拗に絡みつく。

俺は、兄に生まれたくて生まれたわけではないのに。
そんなの、いらぬのに。

静かすぎる部屋で、思いの他勉強が捗らない。
コチコチと時計の音が鳴る。
さつきから時計ばかり気にしてしまう。

もう19時を過ぎたのに。
葵が、帰って来ない。

うろつろと部屋を徘徊する。
どうせどつかで道草をくってるんだ。
少しキツク言ったからアイツ拗ねてるだけだ。
すぐに帰って来る。

そう思うのに、俺の足はウロウロと忙しない。

振り払ったときの、葵のぐしゃりと歪んだ顔が浮かぶ。
ああ、もう！くそっ！

家を出ると、10月の夕方は思いがけず冷たかった。
何処行っただんだ馬鹿葵。

兄なんてやってられない。

こんな面倒なことを押しつけられて。
葵に何かあつたら俺のせいだ。

ああもう！なんでも良いから早く出てこいよ葵。

一人の部屋は、時計の音が良く響くんだ。
だから、ちよつとくらいならお前、煩くしたってもう怒らないから。
今度は紙と鉛筆をお前に貸してやるから。

ぐるりと辺りを見渡した時、葵の笑い声が聞こえた。
なんだここ、近所にあっただろうか。

そこはずいぶん寂れた外観の建物だった。
どうやら何かの店らしい。

ずっとこの町で暮らしているが、今まで気に止めたこともなかった。

しかしどうやら、この店の裏から葵の声が聞こえる。

訝しみつつ裏戸を勝手に押し開けた。

「夏目って字はどう書くの？」

「うん？ほつら」

「かくかくしてる！」

一瞬言葉を失った。

金髪青目（葵に言わせると違うらしいが）の異様に整った顔の外人と葵が、木の棒片手に何とも和気藹々としていたのだ。

なんで外人が……。と思う前に、俺は葵の楽しい表情に目を奪われていた。

アイツ、最近あんな風に笑ってなかった。

何だかもやもやしたものが心に渦巻いて、俺はズカズカと二人に近づいて行った。

「葵！」

「あ、お兄」

葵は弾かれたみたいに顔を上げて、ちょっと気まずそうに顔を曇らせた。

何だよ。さっきまで楽しそうにはしゃいでたくせに。
どす黒い靄がまた広がる。

俺は葵の手を掴んで、「お迎えかな？」なんて飄々と笑ってる外人を睨みつけた。

挨拶もなしに、葵を引きずってその場を後にした。

もやもやイライラする。

「あ、お母さん行っちゃったんだ」

家に帰り、テーブルのラップに包まれた皿を見た瞬間、ぱつりと葵が呟く。

酷く小さな声で。

先ほど響いていた鈴のような笑い声とはかけ離れた声だ。
なんだよと思う。
なんだよ。

チンした晩ご飯を、二人無言で食べた。

早い時間だった。寝る準備を済まして二人で布団に入った。
すうすうと隣から安らかな寝息。

もやもやする。

押しつけられたら、めんどくさい。

だけど、俺以外に懐くなんて面白くない。

非常に、面白くなかった。

それに、あの外人。

素性もはつきりしない何処ぞの輩だ。

見るからに怪しい。

あの懐き具合から言って、葵の奴またあそこに行きそうだ。

いや確実に行く。

危険じゃないのか。

もし、人さらいとかで、葵が、海外に売られたりでもしたら！

がばりと布団から起き上がる。

寝ていられない。

これは早急に手を打つべきだ。

変に高ぶった俺は、服を着替え家を出た。

出るときに勿論しっかりと施錠する。

そして、勢いのままあの寂れた店に乗り込んだのだ。

すっかりとまでは行かずとも暮れかけもいところの時間帯。

閉まっているなど、浅はかな子供の俺は考えもせず、その引き戸に
手を伸ばす。

戸は、すんなり開いた。

音を鳴らさぬようにそつと開く。

覗き込めば、聳え立つ本棚が薄暗い店内で妙に威圧感を放っているのが見えた。

足を踏み入れようか逡巡している時だった。

「……」

「死してなお、言葉に意味を奏でようと言っのかい」

「……！」

「お前はもう生きては居まいよ」

「——！」

「お前の言葉は、十分受け止めた。……戻りなさい」

奥の方で交わされてる会話。

一人の声は、途切れ途切れのひび割れたような声で殆ど聞き取れない。

いったい何の会話を……。

足を進めようとしたとき、不運にも本棚から一冊本が崩れ落ちた。

おい！ちゃんとしまつとけよ！

と、焦って拾っているうちに、目の前に陰が落ちる。

「おや、珍しいお客さんだねえ。とは言っても、先ほどぶりかな」

顔を上げて、その飄々とした声の主を睨み据える。

「先客が、居るようなので帰る」

ぶっくらぼくに言うと、そいつはひょいと柳眉を上げた。

「先客などいないさ。見てみるかい？」

そう言つて笑う。

は？と思った。さっきどう考えても話していただろうが。遠慮も無しに本棚の隙間まで店内を徘徊してみる。

「・・・」

笑い声が後ろからして、振り返ると本を片手に愉快気な外人の姿。からかわれたのかと、頭に血が上った。

「おまえっ。さっき誰かと話してただろうが！」

「さあて」

薄く笑んではぐらかすこの男が妙に怖くなった。

人さらいよりタチの悪いものに思えた。

月明かりが、男の人形のように整った顔を照らす。

まるで、人ならざるモノのようだ。

昔、何かで読んだ。

何かの昔話に出る何かの。

「お前、妖怪か」

呟いた言葉はまるで、非現実的なものだった。

しかし、その時の俺は本気でそう思ったのだ。

まるで、その美しい顔で人を魅惑し食う鬼のようだと。

目の前の男は何も答えずただ微笑んだ。
何処か達観した微笑だと思った。

「お前、葵を食うのか！」

「・・・それは、どういう意味で？」

どういう意味！？

何を言っているんだコイツは！

「だめだ！だめだよ。葵は駄目だ！」

俺は、理性を忘れたみたいに叫んだ。

「俺が兄ちゃんだ。俺が葵の側にいないとなんだ。俺が守らないと
いけないんだ」

俺が、守る。

俺が葵のお兄ちゃんだから。

「そう」

本屋は、静かにただ俺を見てる。

そのガラスのような瞳で俺を見据えている。

「葵を食ったら容赦しないからな」

「だいじょうぶ」

だいじょうぶと本屋は言う。

柔らかく、ただ柔らかく本屋は言う。
その声に、俺の心も何故か静まる。

「僕は、彼女に何も残さない。残らない」

彼女、という言葉に一瞬誰の事かと戸惑い、ああ葵かと思う。

おかしくはないが、どこかあのチビの葵に不釣り合いな呼び方に見える。

まあ、そんな違和感よりも気になる事は。

「残らないってどういう事だよ・・・」

目の前の男は、ただ微笑んただけだった。

何処か奥の見えない、だけど命一杯の悲しさを含ませたみたいに。
そして言った。

「僕は、いずれ消える身だから」

と、当たり前のように。決め事のように。

俺は、アイツを氣にくわない。

結局葵は俺が忠告したのにも関わらずアイツのもとに足繁く通うし、
本屋もそれを拒みはしない。

アイツの正体だって未だに訝しいままだ。

しかし俺は、嬉々として古本屋に向かう葵に手土産を寄越して渡す。
葵が、自分で決断したことだからだ。

本屋の微笑が余りにも悲しげだからだ。
ただ、それだけだ。

俺の知ってることなんて、そんなもん大してありやしない。

ただ、俺はあの夜、葵の兄でいることを自ら選んだ。

本屋が消えても、葵が悲しむときが来ても、俺は変わらず葵の側にしよう。

変わらず家族で在り続けよう。

チンした飯を味気なさそうに食うなら、お前が家族を取り戻したいと思うなら、晩飯の神にだってなるさ。

あの夜。

有志の演奏を聴いた満月の夜。

酔った葵をおぶった夜道、俺の肩は葵の涙で濡れた。

お前、昔は泣きそうな顔はしても、決して俺の前で泣かなかった。もしかしたらそれは。

泣かなかったのではなく泣けなかったのかもしれないと今なら思える。

良く、泣くようになった。

それは、少し喜ばしい一方、どうにも居心地が悪い。

葵を泣かせる原因は、本屋のことなのだろうか。

止めてしまえと思うのは兄のエゴだろうか。

もういい。

もういいから。

覚えて居ないなら、止めてしまえ。

消えてしまう奴に不毛な恋など止めてしまえ。

悲しむ時を迎える前に止めてしまえと思った。

――葵、きつと何時か悲しむ時がくるよ。

――いつかなんてわかんないもん。

だったら悲しくないようにたくさんみておくの。

酔いつぶれて泣いて眠った葵は、夜中急に家を飛び出した。行き先なんて分かっている。

お前、どんなに泣いても結局、本屋の所に向かうんだな。

夜中、引き戸の閉まる音を聞きながら、俺は一人苦笑を漏らしたのだった。

●●●おまけ●●●

おそい。いくら何でも帰りが遅すぎる。

俺はイライラと庭先を右往左往していた。

葵が抜け出したきり帰って来ない。

どうする迎えに行くか？

いや、しかし葵ももう子供ではないのだし。

と同じ場所をぐるぐるしている時だった。

「秀くん」

ぱっと顔を上げ、その姿を目にして俺は目を見開いた。本屋がぐったりとした葵を抱きかかえている。

本屋が、ぐったりとした、葵を、抱きかかえている！

「お前！・・・っかせ」

と少々乱暴に葵を回収しようと手を伸ばす。

受け渡す際「乱暴にせず・・・」と静かに本屋が囁いて、頭の中がぐらっとなった。

「おまえ！まさかと思うが！葵に手を出したんじゃないだろうな」

葵を抱えながら、ぎりりと睨むと、本屋は暫くその目を伏せて、そして妖艶なまでの微笑を浮かべる。

「それは、どういう意味で？」

「！」

——お前、葵を食うのか！

！・・・それは、どういう意味で？

「おまっお前・・・」

我に返った時、既に遅し。

俺が茫然自失している間に、その男はその身を夜闇に溶け込ませるみたく去って行っていた。

くそっこの妖怪が！

40話：溶けて消えて、夢のつづき

兄が言った言葉に茫然自失とした。

いつか消える存在……。

不安を言い当てられたような、見ないふりをしてきたモノを突きつけられたような苦しさが胸に押し寄せた。

幼い私が言ったのだと兄は言う。

悲しむ日が来るなら、夏目さんに余計に会いたいのだと。

恐らくきつと、深く考えず出た言葉なのだろう。

だけど、その無邪気なまでの強さに私は愕然としていた。

今の私に、そんな強さは無かった。

ただ、失う怖さから目を背けることしか出来なかったんだ。

体育館に真つ黒な集団。

終業式は寒くて長くて嫌いだ。

冬休みの行いについて長々と語る壇上の校長を見ながらそう思う。

ゆっくり沈み込むような毎日の中でも、時間というのは流れていくものらしい。

夜が明けて朝が来て夜になりまた朝を迎える。

その、刻まれる正確さにうんざりする。

——あいつはいずれお前の前から消える存在だから

兄に言われた言葉は、目を背けようとする私を責め立てる。

それは、いったい何時。

もしかしたら、もう時間など残されていないのかもしれない……。

駄目だ、考えたくない。
視線の先が歪んだ。

「葵!？」

くらりとした、時にはもう遅かった。

「絶対一人はいるのよねえ。校長先生の話の途中で倒れる子」

目が覚めたら保健室で、保健の先生に苦笑気味に言われる。

「寝不足に加えて、貧血と。・・・最近、食べられなかったり、眠れなかったりが続いてる?」

健康手帳に症状を書き込まれながら、尋ねられた言葉に起き上がりながら首を傾げた。

「よく、わかりません」

私の答えに保健の先生は、うん?と不思議そうな顔をした。

実際、確実に眠りは浅く、食は細くなった。

眠る事で、食べることで過ぎた時間を認識するのが怖かったから。ただどそれさえも認める事をしないで、わからないと答える。

私は、ずるい。

臆病だ。

はつきりと答えようとしない私に、保健の先生はちょっと考えるみたいに間を開けて言う。

「今日は、終業式だけだしね。担任の先生には言っておくから、このままお家に帰ってゆっくり休みなさい。保護者の人に連絡は・・・」

それに緩く、首をふると、「じゃあ、彼におねがいしようかしら」と平然と言われて首を傾げる。

「彼、」

って？と尋ねる前に保健室のドアが開いた。

いつもの鉄面皮に色を足したよう、少し焦った面持ちの椎名君が恐らく私のものであるう匍を抱えて立っていた。

その椎名君に「ご苦労様入って」と保健室に招き入れながら、保健の先生は私につこり笑った。

「笹野さんを抱きかかえて此処まで連れてきた“彼”。どうせなら最後まで抱きかかえてもらっちゃいなさい」

いや、それは・・・ご勘弁を・・・。

保健室の先生の言葉を真に受けて、私を抱えて帰ろうとしてくれた椎名君に必死で抵抗し、荷物を持つてくれるだけに留まった。

「よく、倒れる」

「・・・」

はい、何時も抱えて貰って申し訳ないです。

「前より、減ってた」

「・・・・・・・・」

減る・・・うん。恐らく体重の事、だよな。

何時もとは逆に、椎名君ばかりがポツリポツリと言葉を落とす帰り道。

私は、申し訳なさに俯きながら無言で椎名君の横をとぼとぼ歩く。

「戸川さんが自分の言葉が葵を追い詰めたのかもしれないと、言っていた。とても、心配している。・・・彼女だけでなく・・・」

俯く私の前に立ち止まり、椎名君が言った。

自然と立ち止まる結果となりゆっくりと顔を上げる。

無表情に私を見つめる、顔。

ただどレンズの向こうの何時もの風いだのような黒目が、今ははつきりと揺れていた。

分かってるんだ。

兄にも、椎名君にも、四季子にも、とても心配されている。けどその心配そうな瞳が、私を追い詰める。

一杯一杯に時間をやり過ぎそうとする私を揺るがす。

平気でない事を知らしめられる。

自己嫌悪だ。

どうして、浮上できないのだろう。

もっと、ちゃんとしたいのに。

痛い。
痛い。

瞼を閉じて緩く頭を振った。

「四季子は何にも悪くない。凄く勇気づけられたもん」

夏目さんに好きと告げる勇気をくれた。

だけどもた、打ち砕かれた。

消えてしまう人に、どうして好きだと言えるだろう。

「私が、弱いから」

弱くて。

弱くて。

告げることも出来なければ、真実を聞くのも怖い。

ただ中途半端に恋心を持て余している。

せめて何でも無い振りが出来るくらい大人になれたらいいのに。

今だって、私を好きだと言ってくれた椎名君にこんな事を言うのは間違っているって分かって居るのに・・・。

無意識に噛みしめていた唇に、そつと繊細な指が触れた。

親指が慰めるように往復すると、顎の下をゆっくりと掬われる。

瞼を開いた事で、堪えきれず一つ涙が落ちた。

「言った。揺らいでいるなら、奪うと」

静かな声色で、だけど瞳だけは燃えるほど色を伴って、椎名君が言う。

私は、愚かにも思ってしまったんだ。

奪い去って欲しい。

何もかも全て、委ねてしまいたいと。

近づく瞳を見つめる。

そしてそつと瞼を下ろした

「どうして」

予測していた感触は訪れることなく、困惑したような小さな声に瞼を開くと、眉を寄せ苦しそうな椎名君の表情。

「そんな顔が見たいんじゃない！」

椎名君がいつになく、強い口調でそう言う。

私、どんな顔してる？

「そんな顔をさせたいんじゃない」

今度は弱々しく呟くように落とされた言葉。

ごめんね。

ごめん。

弱くってごめん。

卑怯でごめん。

私だって椎名君にそんな顔をして欲しくないよ。

彼の鉄仮面が崩れるのが好きだった。

だけど、こんな表情、望んでなんかいない。

お願い。

椎名君。

泣かないで。

湖面のような瞳からすうつと涙が落ちるのを見て、私はそつと手を伸ばす。

頬に触れる前にその手を掴まれて、あっという間に抱き込まれる。

いつかのように、私たちは抱き合った。

一度目、椎名君が泣いた日。

二度目、私が泣いた日。

そして三度目は、二人して涙を流した。

41話

降り始めた雪が涙とは違う冷さで頬に触れた時、私たちはゆっくりとお互いの腕を解き距離を取った。

椎名君の瞳にはもう涙も揺らぎも無かった。

只真っ直ぐに向けられる、深く黒い瞳。

何かを断ち切ったような、決意の籠もった視線だ。

「きつと、笹野さんを占める、あの人を含め、自分は惹かれた」

寒いせいか、それとも泣いたせいか彼の少し赤い鼻頭に視線を移動させたとき不意に椎名君が言った。

「目を背ければ、それだけ苦しい……あの人の事を考えている貴女が好きだ」

認めたくないけど、と表情を動かさずに椎名君は言葉を繋げる。

あの人と、椎名君が言う人物。

誰かなんて、考えるまでもなく理解できた。

「岩場に嵌った山椒魚は、孤独に耐えかねて一匹の蛙を岩場に閉じ込める」

「え」

夏目さんのことを考えていると、椎名君が何時になく流暢に言葉を落とす。

山椒魚と言ったら、椎名君が図書室で私に呈示した井伏鱒二の山椒

魚のことだろう。

椎名君はいつたい、私に何を伝えたいのだろうか。

私は椎名君の思考を読み取ろうと、その内容を頭の中から必死に引き出した。

読書週間に読んだ、井伏鱒二の山椒魚。

夏目さんから借りた本。

岩場に嵌った山椒魚。

孤独に耐えかねて捕らえた一匹の蛙。

牽制しながら、何年も何年も二匹は同じ穴場の中。

けれど、あくる年、蛙がとうとうその息を引き取ろうとする。

そして最後山椒魚は、お前は今何を考えているのだろうかと尋ねるんだ。

蛙は答える。確かそう。

「今でもべつにお前のことをおこつてはいないんだ」

私が零すように呟くと、椎名君は少し瞠目して、それからゆっくり頷く。

そして無表情に私に問うた。

「どうして、蛙は、そう言ったのだと？」

この話には色んな説があり、その解釈は様々だった。

本当の答えなんて、著者本人にしか分からないこと。

だけど、読者に感じる自由があるとするなら、私はこう思う。

「蛙は、山椒魚の孤独を知っていたから。若しかしたら、長い月日の中で山椒魚を愛していたから」

蛙は“今では”では無く、“今でも”べつにおこっていないと言ったのだ。

愛してるは大げさでも、一度だって憎く思った事など無かったはずだ。

私の答えに椎名君はひどく満足そうに笑った。そして言う。これは勝手な想像だけれど、と。

「山椒魚が蛙の愛に気が付いたなら、彼は蛙を逃がしたかもしれない」

椎名君の言葉に、今度は私が見開く。同時に夏目さんの言葉が脳に響く。

あの階段の下。本とピアノだけの空間。

——僕は、この部屋でずっと、ずっと一人だった。
——ずっと待っていたんだ。僕はずっと。

熱い何かが込み上げて、涙がはたりと落ちる。
椎名君がその繊細な指を私の頬に伸ばしたが、それは直前でぐつと握りしめられ、ゆっくりと下げられた。

「笹野さんは、自ら捕らえられた蛙」

以前、椎名君に言われた言葉だ。

私は、その意味を考えもしなかった。
だから、と椎名君は続ける。

「だから、大丈夫」

言葉だけ聞けば、主語はあやふやなで、酷く曖昧な大丈夫。

だけど私は、それに込められた意味をじっくり噛みしめて、ゆつくりと頷く。
重力に従い、椎名君の手で拭われる事の無かった涙が静かに顎から零れ落ちた。

ああ、言葉に詰まる。

ただ、もう。わからない振りなどしてはならないのだと思った。

家の前まで辿り着き、私は椎名君から自分の鞆を受け取った。
お礼を言った私に、椎名君が「もう一つ」と自身の鞆から真っ白の何かを取り出す。

「笹野さんの鞆には大きくて入らなかったから」

そう言っただけ差し出されたのは、持ち帰るのを後回しにしていた中セ
ンからの冬休みの課題。

真っ白で何も書かれていない本。絵本の原本。

四角く角張ったそれは、私の鞆には入らなかったらしい。

それを受け取ろうと手を伸ばした時、どうしてだか既視感を憶えた。
仲良くなりたいと言った私に、彼が渡してくれた“特別”。

不覚にもそのことを思い出したのだ。

それを椎名君も感じたのだろう。ポツリと呟きが落ちる。

「特別」

私はハッと椎名君を見上げた。

思わず溢れた言葉だったのか、気まずそうに唇を噛みしめた後、彼は目を伏せた。

その瞳は、真っ白の絵本に濯がれたまま。

「笹野さんは笹野さんの特別を然るべき人に」

椎名君の伏せられた瞼が上がる。

そして、ゆつくりと視線が会った。

くろすぐりの瞳。

凧いだ湖面。

「行つて。貴女の特別な人の所に」

私は、無言で絵本を受け取り、彼の立ち去る音を聞いた。
もう椎名君の背中を見てはいけなかった。

見たらいつかのように、引き留めてしまいかもしれない。
それだけは絶対にはいけないと思った。

彼がくれた物を台無しにしてしまう。

真っ白な絵本の表紙を見つめる。

どれ位そうしていただろうか、寒すぎて感覚の無い手。

私は、ゆつくりと視線を上げる。

真っ白な雪が降る。

白い息を吐き出して、はじかれたように私は駆けだした。

目と鼻の先の我が家の引き戸に見向きもせず、私は走った。
顔に雪が当たる。

冷たくて痛い。

だけど、走らずには居られなかった。

鈍く錆び付いていた私の時が、やっと正確に動き始めた。
取り戻すように、脳は命令する。

走れ、と。

目的地なんて考えるまでもない。

はあ、と荒い息を整えながら、その建物を見る。

古本屋さんは私の葛藤など素知らぬ様子で、今までと同じ外観のままそこに在った。

はやる鼓動を持て余しながら、私は引き戸に手をかける。
ところが・・・。

からりと何時もの音を響かせると疑いもしなかった私は、その事実
に愕然とする。

「あか、ない」

がつりと鈍い音を出した戸は、少しも動かなかったのだ。

なんで。

どうして。

くらくらする。

私が、うだうだ悩んで居るうちに最悪な事態は起こってしまったの
かもしれない。

消えて――。

ううん。

駄目だ。

諦めたら駄目だ。

振り切れそんな感情をどうにか抑えて、私は最後の望みを賭け、足

を運んだ。

裏庭への木戸を全力で開ける。

夏目さんと私の出会いの場所。

今は閑散としているけど、暖かな季節が訪れると色んな草木が生い茂る。

縁側からそれらを眺めるのが好きだった。

六月には立葵の花が咲いた。

それを眺めながら、夏目さんが笑うんだ。

——ほうら。葵ちゃんの花だよ。

ああ。

嗚呼！

その背中を見つけて、私は思わず叫んだ。

「夏目さんっ！」

冬になると着るおかしな柄の絆纏。

見慣れた柄。

いつもの背中。

夏目さんの背中。

雪の中、何故か傘も差さずに裏庭に佇むその人は、私の声にゆっくりと振り向く気配を見せる。

それを待つ前に、私は荷物を全て放り投げて駆け出した。

丁度振り向いたその人の胸に飛び込む。

本がバサリと落ちる音がした。

夏目さんが手に持っていた本が落ちたようだ。

それでも、離してなんかやるもんかと、離さないよう、離れないよ

うその背中にすぐ腕を回した。

叫んで、抱き付いて何処にも行かないでと叫ぶ。

金木犀が咲く頃、同じようなことをした。

あの時、後々揶揄されて恥ずかしさに憤慨した。

だけど、今はこの両手に一杯の好きを自覚しているから。

何を言われたって、平気なもの。

からかわれたら胸を張って言うてやる。

貴方を好きだから失いたくないのだと。

「あおい、ちゃん？」

戸惑うような声の夏目さん。

ずっとずっと聞いていなかったように思う。

もっと聞かせて。

返事の代わりにぎゅっと抱きしめる力を強めた。

すると夏目さんから、息を飲むような空気。

少しの間の後、戸惑うように優しく私を包み込む腕。

ああ、やっど。

やっど、触れてくれた。

欲しかった温度。

そのことに目頭が熱くなって、誤魔化すように夏目さんの胸に頬をすり寄せる。

夏目さんからは、本とムスクの香りがする。

私の大好き香り。

ああ、自分の鼓動が異常に速い。

野外、しかも雪の降る中だというのに異常に身体が熱い。

頭も、なんだかクラクラする。

「葵ちゃん——」

少し焦りを帯びる夏目さんの声。

だけど、エコーがかかったみたいくぼやける。

ああ、一言だって聞き逃したくないのに。

そう思いながら、どうやら私の体は限界を迎えたらしい。

意識が遠のいていく。

最近こんなばかり。

。 やっぱり、貧血に寝不足のうえ、全力疾走は不味かった、かな・・・

42話

シュンシュンと音が聞こえる。

温かですっきりした空気に、身体の内側からとろけていくような感覚。

幸せ、の感覚とはこういうものなのかもしれない。

微睡む思考で、そんなことを思った。

シュンシュンと音がする。

額にひたりと冷たい感触。

きもちいい。

少しだけ瞼を上げたら、今まさに離れて行こうとする掌を見つけた。指の先まで美しいその手が誰のものかなんて顔を確認するまでもなくて、引き止めるようにその手に頬をすり寄せた。

一瞬かたくなだった指先は、私がねだるように擦り寄れば、瞬時にとろけてすべるように頬をなぞる。

それが余りに心地よくて、私はもう一度瞼を下ろした。

「これ以上、煽らないでくれ」

沈む意識の中でそんな苦笑混じりの声を聞いた気がした。

沢山の本。

パラパラと風もないのにページが開く。

絵本のように飛び出す本中の世界。

見たこともない花。

木でできた靴。

振子時計。

キラキラ光、七色の滝、雲は綿あめ。
なんて素敵。
なんて、

「きれい」

「全て、落とし物だ」

怜悯な声が響いた。

声につられるように振り向けば、積み上げられた本の上に足を組んで座る麗人。

夏目さん。

とても冷たい、時折見せるあのガラス玉のような無機質な目でキラキラした世界を見下ろしている。

「僕の声を待っているんだ。このガラクタの中から、一つ一つ同一のものを探す。拾い上げる。そして繋ぐ、それを繰り返す」

普段にはない、投げやりに吐き出される言葉。

今の彼からは、いつもの飄々とした余裕は消え失せ、その顔には苦さが浮かんでいた。

焦れる様に早口で喋る彼は、この七色の世界で酷く浮いて見える。

「ガラクタばかりが溜まって煩わしい。だけど、空虚を満たすために僕は手に取らずには居られない。それが一層僕の視界を塞ぐ。いつともう、その中に埋もれてしまえたら……どんなに楽だろう」

夏目さんは頭を抱えて疼くまっただ。

いつの間にか、彼は私の目線の高さに移動している。
でも、彼の視界から私は消え失せている。

彼の周りには、彼を覆い隠すような沢山の本の壁が出来ていく。
まるで、彼を飲み込んでしまうかのように。

一連の非現実的な場面を瞳に映しながら、それでも私は落ち着いた
声を出した。

「夏目さん」

彼には聞こえないだろうか。

「私にはとってもキラキラして見えます。私にはガラクタなんか
見えませんよ」

尚も彼を塞いでいくモノたちの間から美しい蜂蜜色の髪が見える。
その頭が震える。

どうか、否定しないで欲しい。

「夏目さん。私にも拾わせてくれませんか」

はっ、と怯えるような縋るような青灰色の目が私を映した。

小さな子のように澄み切って少し潤んだその目は、先ほどのガラス
玉なんかよりずっと魅力的だと思う。

「綺麗な落とし物、一緒に拾わせてください」

その瞳を見据えてそう告げた。離さないように強く。
何一つとして取り零し足りない。

貴方が嫌だと言うのなら、私が代わりに拾います。
貴方自身であっても拾い上げてみせるから。

揺れる様に薄まる世界。

はた、と気がつく。

ああ、これは夢だ、と。

この非現実を受け入れている自分を感じた時から何となく分かっていた。

私の脳が作る主観的創造物に過ぎない夢。

だけど、見逃してはいけない何かがあると、そう思うから。どうか忘れないようにと、その青灰色を見つめ続けた。

夢とは脈絡もなく唐突に場面が変わるものだ。

夏目さんの手がゆっくり労わるように頬を撫でた。

その冷たい感触に思わず頬を擦り寄せる。

デジャブ。

きっと私の深層心理が幸せの感覚を求めているのだろう。

薄く目を開けると、どこか困惑した夏目さんの表情。

見慣れない表情に思わず手が伸びた。

彼にも幸せの感覚を味わって欲しくて、その頬に触れる。

青灰色が動揺に染まり瞳の中の光を揺らした。

眉間にしわを寄せ苦悶するように瞼を伏せる。

髪と同色の長い睫が震える様子を見ながら、思う。

全くもって、らしくない、と。

飄々とした顔で感情を隠す、夏目さんらしからぬ顔。

でも、とても人間らしい顔。

ねえ、どうしたの？何か悲しい事があった？

それは、声に出していたかもしれないし、そうでなかったかもしれない。い。

その表情を忘れないように、瞼で閉じ込めるみたいにそっと目を閉

じた。

瞼の裏には青灰色。

これはまだ夢？

それとも現実？

どうでもいい。

ああ、もう壁とか、歳とか、見合わないとか、どうでもいい。

完璧でなくていい。完璧でないのがいい。神聖さなんて望まない。見上げるなんてうんざり。

私の高さまで来て。

私の足で貴方に近づけるなら、怖がらないで何もかも踏み越えて側まで行くから。

私の腕で抱きしめさせて。

私だけに曝け出して。甘えて。

狡さも、弱さも、全部見せて。

貴方とだったら、どこにだって行くから。

どうか、どうかずっと。

ずっと――側に。

シンシンと、掠れた蒸気のような音が聞こえる。

パチンと目を開けた。

筒状の古めかしいストーブの上にヤカンが置いてある。

どうやら湯を沸かしているようだ。

ずっと、耳に付いていたこの音はこれだったのかと納得する。

自分は温かな毛布にくるまれて長椅子に寝かされているようだった。身動いで、一度目を閉じ大きく息をする。

本の匂い。

「目が覚めたかな」

深く、落ち着いた声にゆっくりと瞼を開き、横になった状態のまま声の主を見上げた。

「本物？」

夢見の思考が今度は本物だろうか、その人に尋ねた。
夏目さんは、暫く感情の覗えない瞳で私をじっと見て、いつもみたいにひよいと方眉を上げた。

「さて、どうかな」

返ってきたのは曖昧で、はぐらかすような言葉。

何時ものように飄々と、揶揄するみたいに言ってくる。

何時も通りの夏目さん。

その全てに、ほっとしながら何故か残念なような気持ちにもなる。

また、振り出しにもどってしまったような、変な気持ち。

ここ数日、私が思い悩んでいたことなんて彼には少しだって影響しないんだって思い知らされたような、変な寂しさ。

言いたいことが山ほどある。

聞きたいことが山ほどある。

でもその前に。

「もっと、近くにきて」

夏目さんの袈纏の裾を引っ張って、屈むように促す。

促されるまま彼の綺麗な顔が同じ高さになって、その頬に手を伸ばした。

ビスクドールみたいに感情の覗えない表情。
生きているのが不思議なくらいひんやりとした頬。

「つめたい」

思ったまま呟いたら、くすりと笑われる。
長く美しい指が、頬に触れた私の手にゆっくりと触れ重なった。

「葵ちゃんが、熱いんだよ。まだ熱がある。・・・ほら、もう少し
寝ていなさい」

そう言つて、私の手を毛布の中に戻してしまう。

もつと彼の頬に触れていたかったけれど、かけ直した毛布の上から
夏目さんがポンポンとしてくれるから、そのリズムに誘われるよ
うに瞼が落ちてしまう。

熱があると、自覚したせいか身体がだるい。

だけど、また寝てしまうのは、酷く惜しい気がする。

一生懸命瞼を開いて、夏目さんを見る。

困ったように彼は笑った。

「ほら、いいこだから」

「やだ」

「だめ。寝なさい」

「やだ」

夏目さんが聞き分けのない子供に言い聞かせるみたいに言うものだから、余計に子供っぽく反発してしまう。

何でだろう。

たぶん熱のせい。

そう、全部熱のせい。

夏目さんが子供っぽい私の様子に、仕方ないなあって風に笑う。

それから、途方にくれたとばかりに態とらしく「お手上げだ」と深く嘆息して見せた。

「やれやれ。どうしたらいいものか」

「キス、して」

零れた言葉は、確かに自分のもの。

あ、って思ったけど、思いのほか羞恥心は沸いてこなかった。

じつと夏目さんを見つめる。

青灰色を見つめる。

吸い込まれるくらい見ていたら、白い彼の手が伸びてきて、私の視界を覆った。

そして、触れた柔らかな感触は額に。

おでこ、かあ。なんて素直に落胆しつつも、視界を手で覆われたままなので仕方なく瞼を下ろす。

それを確認するみたいに指が睫をそつと撫でて、覆った手がいなくなる。

もう一度、目を開いてやろつか、なんていたずらに思ったけれど。

「いいこ」

なんて囁かれて、髪を撫でられたらそんな気も失せてしまう。
撫でられる度にとろりとした睡魔が私を誘っていく。

「端無く交わりし運命に感謝を。我が声、音となり呪を結ぶなれば、かの者に安穩たる眠りを。疑心、懷疑に心奪われることなく、その頭上に群青の耀きが降り濯がんことを」

ゆつくりと紡がれる夏目さんの言葉を聞きながら私は再び心地よい眠りに誘われていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126g/>

夏目さんと私

2011年10月5日01時35分発行